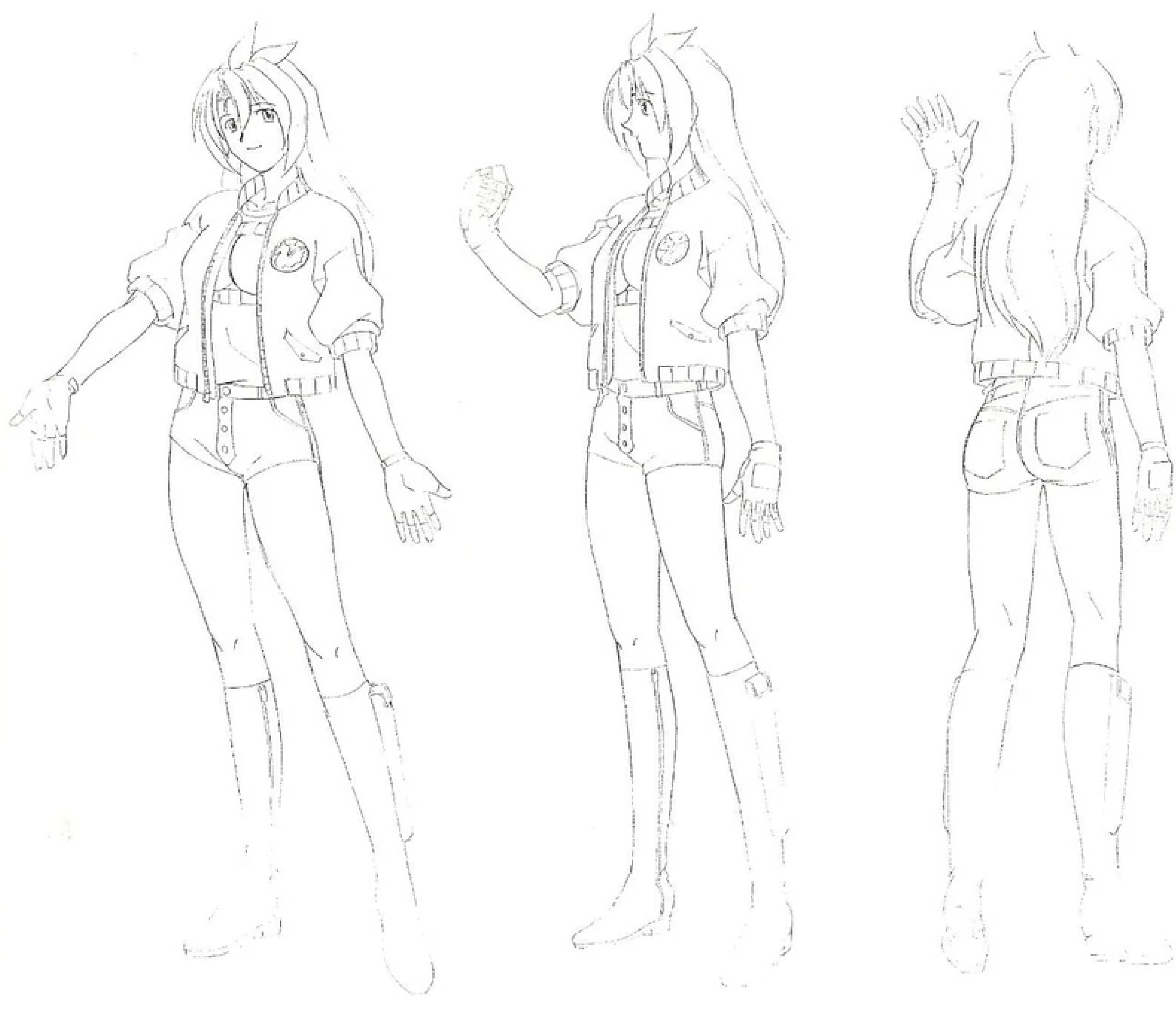
MADLAX the Bible

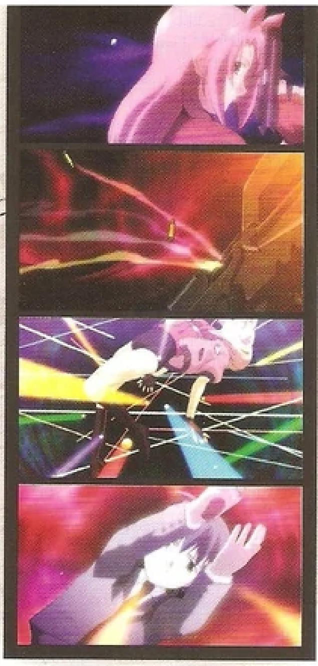


HOBBY JAPAN MOOK

MADLAX the Bible

HOBBY JAPAN MOOK





MADLAX
the Bible
CONTENTS



誰だってマーガレットですよ。

「自分は平和に暮らしている」と

思っているけど、

何らかの原因によって、

どこかで理不尽なことや暴力的なことを

平気で無自覚にしていると思います。

それをちゃんと自覚したら、

「ゴメン」って言うしかない。



そこからがスタートなんですよ。

「みんな自分のこと知らないよね」と

いうことをきっかけに、

「そうか、相手も自分のこと知らないんだ」と気づいて、

それが当たり前のことになれば、

ケンカも戦争も少なくなるんじゃないかな。

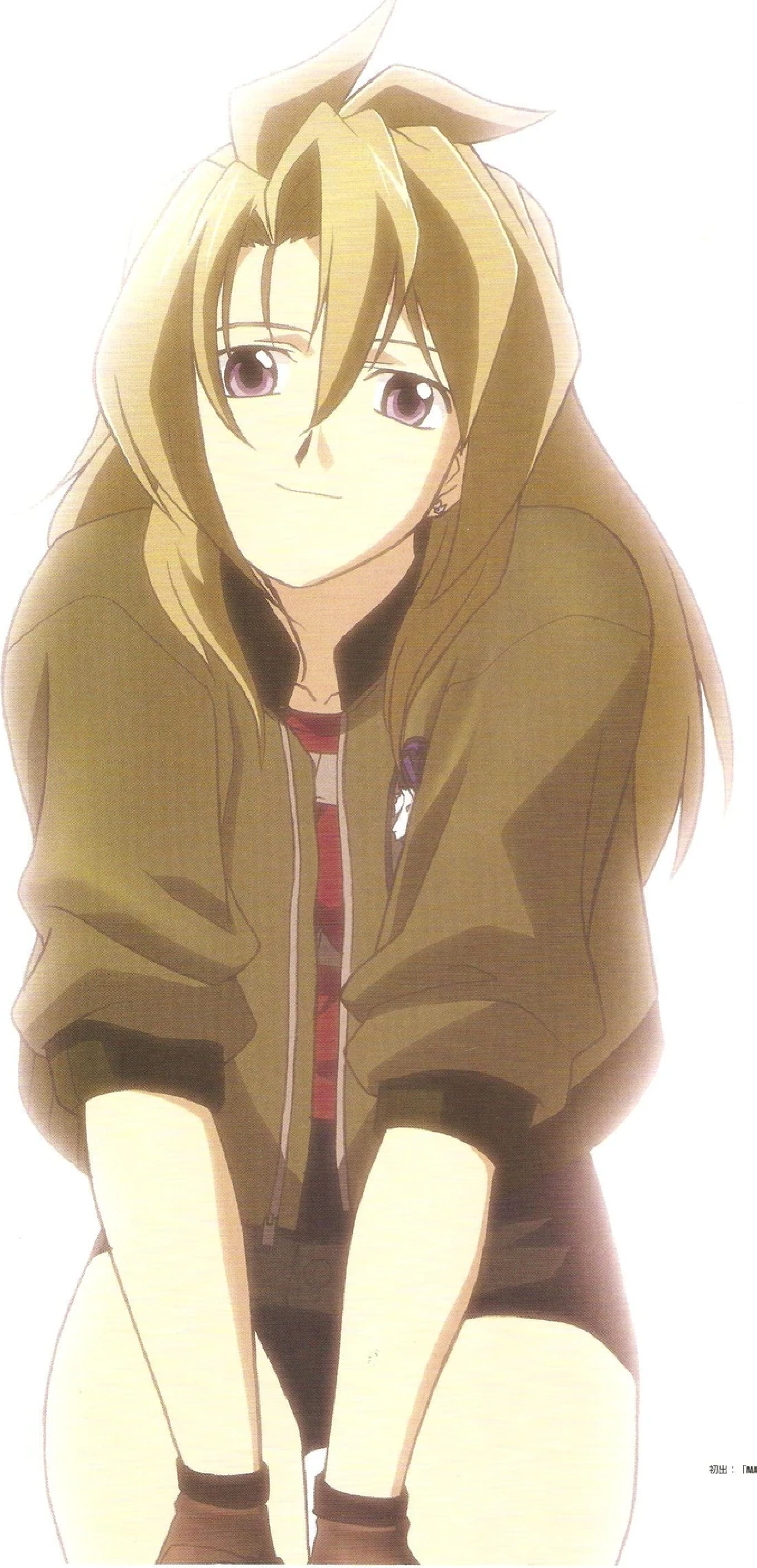
実際、そうなったらいいよね。

――――監督・真下耕一



Illustrated by TAKAO TAKEGAMI
Finished by SAYURI YOSHIDA
Composed by AYUMI KAMO
初出：「MADLAX the Bible」描き下ろし





Illustrated by TAKAO TAKEGAMI
Finished by SAYURI YOSHIDA
Composed by AYUMI KAMO
初出：「**MADLAX the Bible**」描き下ろし

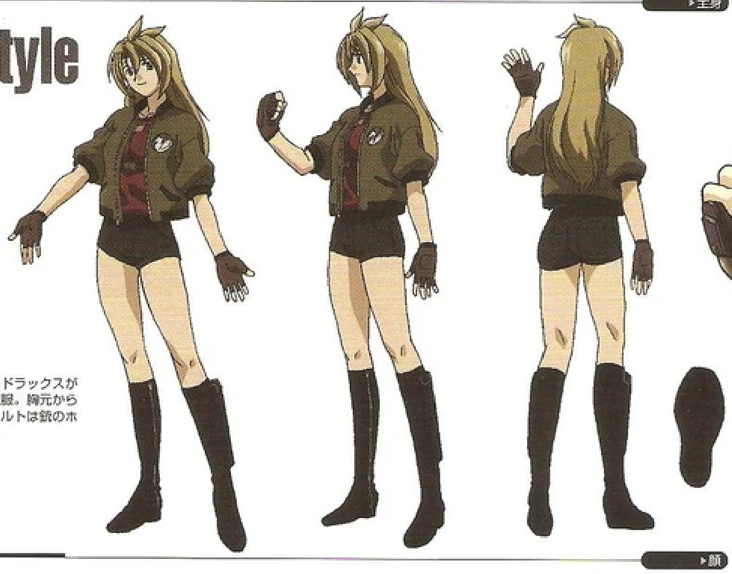
マドラックス

12年も内戦が続いている紛争地域・ガザッソニカで、依頼達成率98%を誇る超一流のエージェント。過去の記憶が無く、父の姿を追い求めている



Style

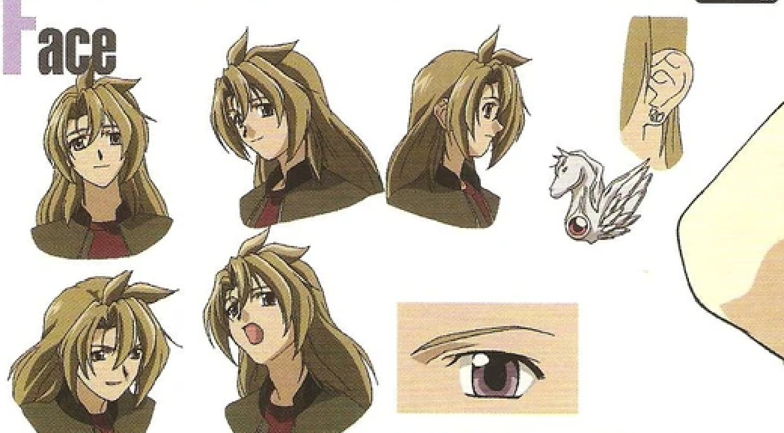
▸全身



普段のマドラックスが着ている服。胸元から見えるベルトは銃のホルスター

Face

▸顔



もちろん、表情の起伏はあるが、戦闘時には冷静。特に、感情を排除したような目が印象的だ

Gun

▸銃

スイス軍やデンマーク軍などで採用されたSIG-P210がマドラックス愛用の銃



Knife

▸ナイフ

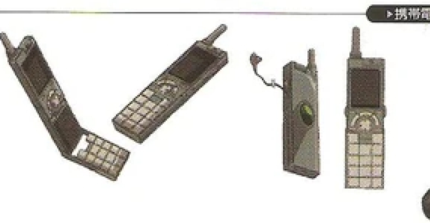
食事の際にはフォークなどの代わりとしても使用



Mobile Phone

▸携帯電話

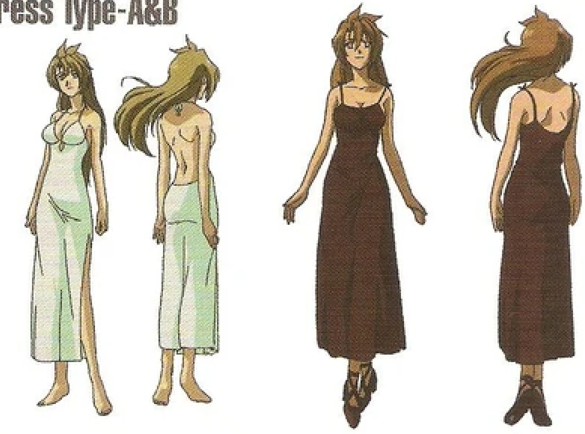
マドラックスの携帯電話。デザインというよりも、機能性を重視したものを使用



戦場で舞うエージェント

Dress Type-A&B

▶ドレスA&B

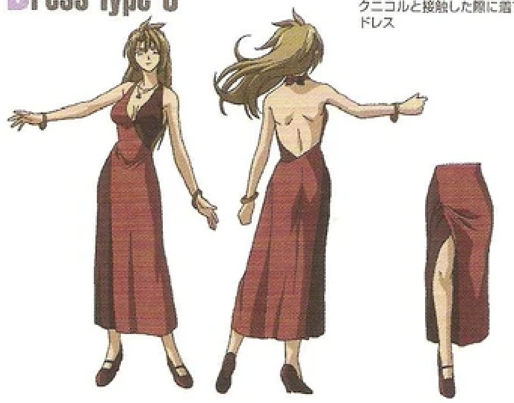


右は記念すべき第1話で着たドレス。左は第14話で街中をさまよっていた際に着用したもの

Dress Type-C

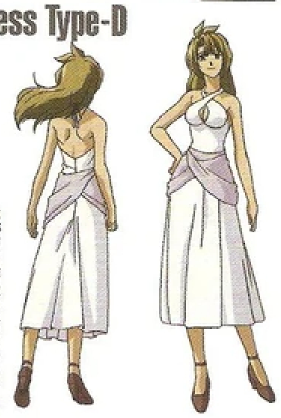
▶ドレスC

第3話で暗殺の前夜、グエン・マクニコルと接触した際に着ていたドレス



Dress Type-D

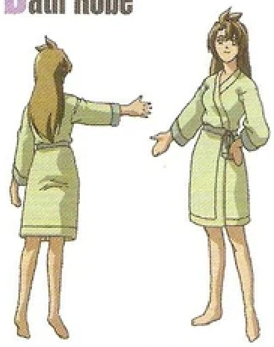
▶ドレスD



第16話で親衛隊に拉致された後、正気を取り戻したマドラックスが着ていたドレス

Bath Robe

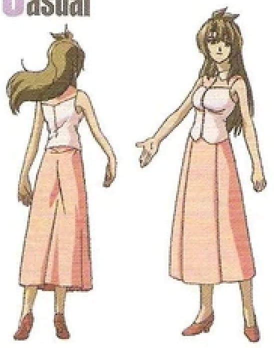
▶バスローブ



風呂上りのバスローブ姿。裾がやや膝上というセクシー仕様

Casual

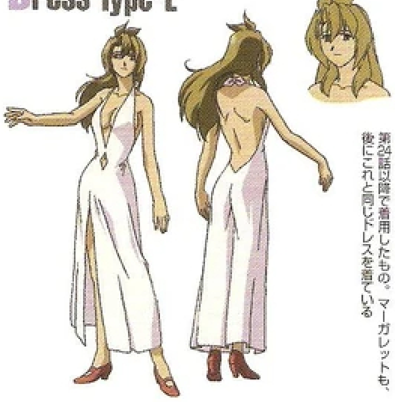
▶私服



ノースリーブにロングスカート姿。普段とのギャップが新鮮

Dress Type-E

▶ドレスE

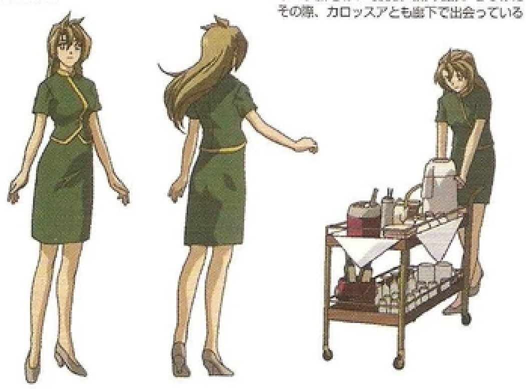


第24話以降で着用したもの。マーガレットも、後にこれと同じドレスを着ている

Maid

▶女中姿

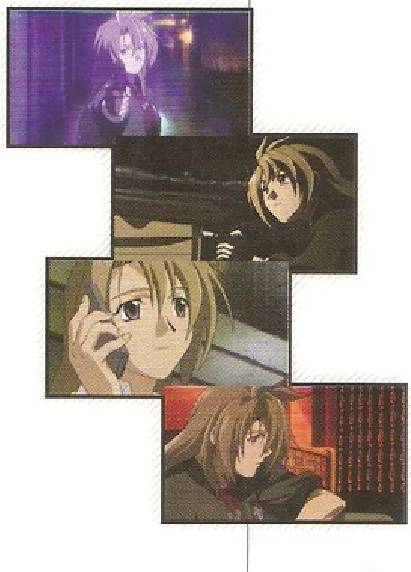
グエン・マクニコルの公邸に潜伏した時、女中から服を奪って変装（第3話）。ちなみにその際、カロッスアとも廊下で出会っている



非日常の日常

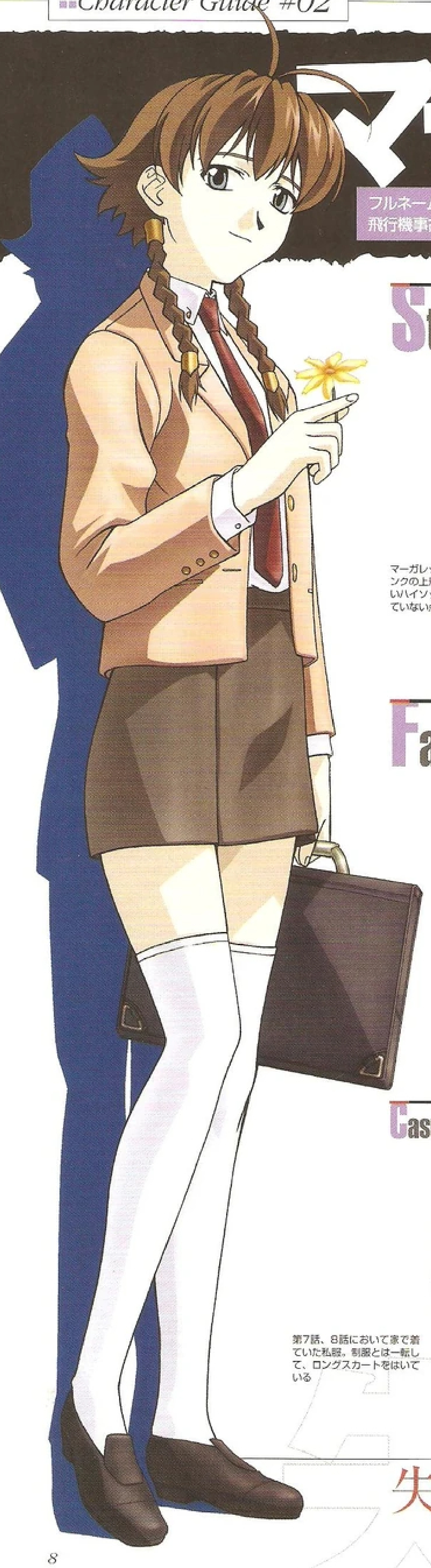
キャラクターとしてのマドラックスのインパクトは、第1話に集約されている。ヘリコプターからのダイブ、危険な場にあっても冷静沈着に振る舞う姿、そして、あの鮮烈なドレス姿での戦闘。細かい設定の説明は殆ど無い上、自身の名前も最後になってようやく口から出てくるという演出だが、逆説的にそれが「この主人公は、一体どういう人物なんだ？」という観ている者の興味を喚起し、結果としてマドラックスの印象を強く与えることに成功している。

マドラックスの住む国・ガザッソニカは、長く内戦が続いており、一般的な人間から見れば、まさしく“非日常”の空間である。さらに言えば、「エージェント」という職業も特殊だ。しかし、マドラックスは、ガザッソニカでエージェントとして生活を営んでいるわけだから、すなわち、他者にとって非日常と思われる世界が、マドラックスにとっての“日常”なのだ。ゆえにマドラックスは、人を殺すことも、生き残る上で当たり前の出来事として捉えている（ヴァネッサとの邂逅により、その点は強く浮き彫りになる）。これは、紛争地域で暮らす人間の心理を上手く捉えており、ひいては、（比較的）平和な日本で暮らしている我々と、過酷な環境下で生きている他国の人々との温度差にも暗に触れている。だがそこには、同時に“哀しさ”が存在することも感じる。彼女は、それすらも包み込んで生きる少女なのだ。



マーガレット

フルネームはマーガレット・バートン。貴族の家柄で裕福な暮らし向きではあるが、過去に遭遇した飛行機事故を境に、12年以上前の記憶を喪失



Style

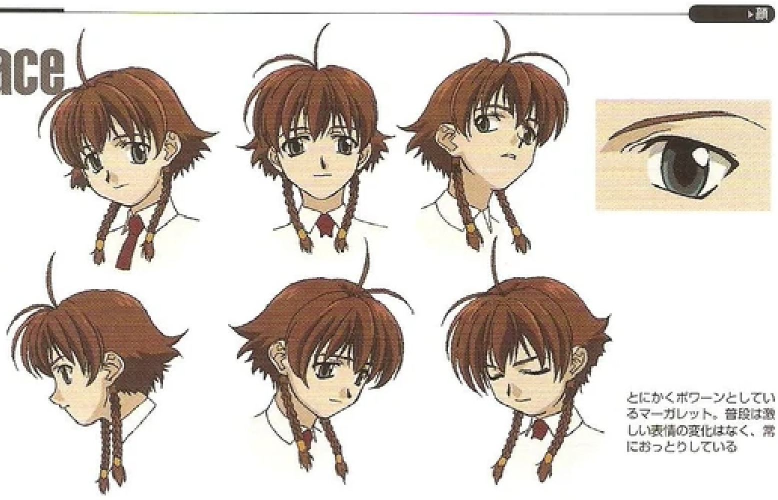
▸全身



マーガレットの通う学校の制服は、ピンクの上着にネクタイ、スカート、白いハイソックス。上着のボタンを留めていない点がポイント！

Face

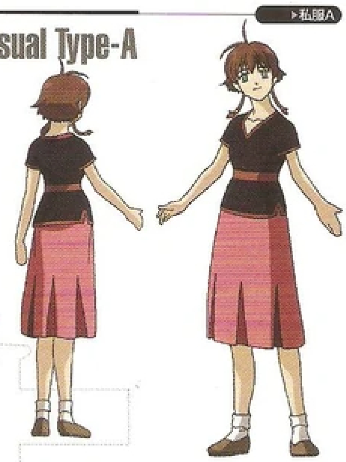
▸顔



とにかくボワーンとしているマーガレット。普段は激しい表情の変化はなく、常におっとりしている

Casual Type-A

▸私服A



第7話、8話において家で着ていた私服。制服とは一転して、ロングスカートをはいている

Casual Type-B

▸私服B



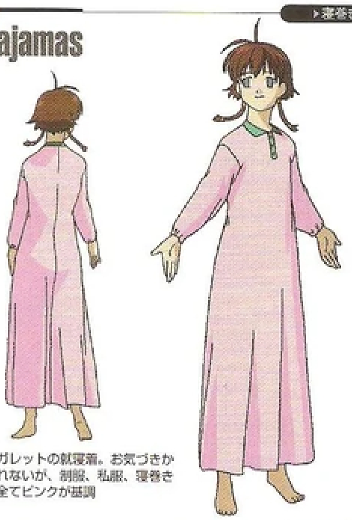
第9話で、ヴァネッサたちと旅行に向かった時の服装。活動的なショートパンツをチョイス

失われた記憶



Pajamas

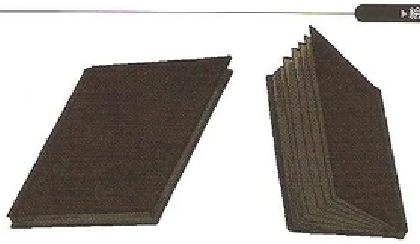
▶寝巻き



マーガレットの就寝着。お気づきかもしれないが、制服、私服、寝巻きと、全てピンクが基調

Picture Book

▶絵本



マーガレットが持っている絵本。その実は、フライデーたちの狙う本「セカンダリ」



Child Age(10 Years Old)

▶10才



10歳時のマーガレット。この頃、ヴァネッサが家庭教師として勉強を教えていた

Notebook PC

▶ノートPC



可愛いデザイン&色使いのノートPC。マーガレットは、主にメールやネットで使用

Bag

▶鞄

学校用のカバン。基本的なデザインはスタンダードだが、手提げ、リュック、両面で使用可能



Dress

▶ドレス



フライデーと出会った後に着るドレス。セクシーなマドラックスのドレスとは対照的だ

Swimming

▶水着



第9話で披露したマーガレットの水着姿。腰のパレオがワンポイントとなっている



平穏の裏にある過去

マーガレットの初登場は第2話。最初のシーンから、マーガレットの特徴である「おっとりとした雰囲気」が全開で広がり、このキャラクターの不思議な魅力が伝わってくる。第1話の、激しいアクションを展開したマドラックスとは、まさに正反対の空気感だ。

ただ、あまりにもボンヤリとしているので、時折、軽い苛立ちすら覚える。とにかく周囲との“ズレ”があるのだ。しかし、このズレを感じた時、マーガレットという人物は、さらなる明確な輪郭を帯びてくる。彼女はマドラックスとは逆に、第3者的に見れば、日常の中の非日常という存在なのだ。しかし、それは翻ってみて、彼女にとっては日常であり、自身としては、まったく普通の暮らしであるわけだ。人は、自分と異質なものを目の前にした時、自己のアイデンティティを強烈に揺さぶられる。そこで自分を守る為に、異質な相手を排除しようとした際に、争いの種が生まれる。マーガレットは、ある意味、その試金石なのかもしれない。

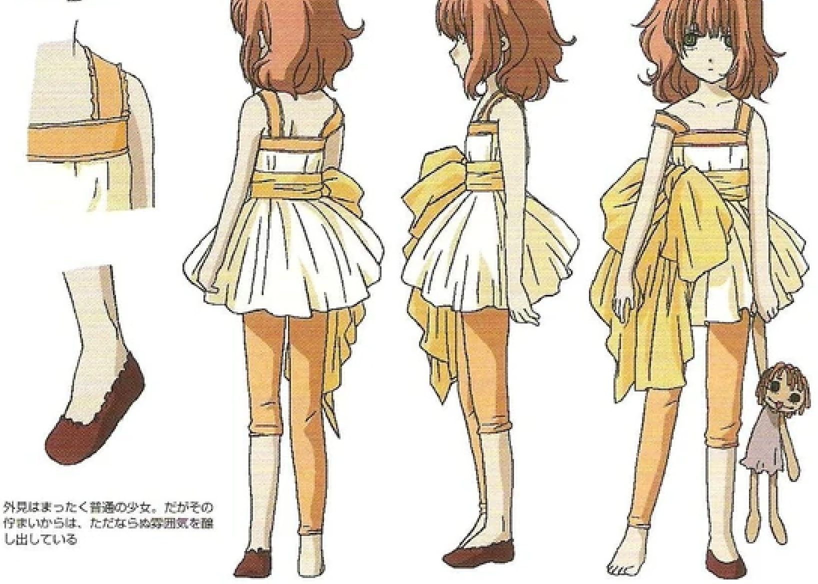
また、彼女には、そんな穏やかな表面とは裏腹に、強烈な過去が隠されている。物語が進むにつれ、その過去が明らかになっていくのだが、そこで初めてマーガレットが、ただ単純にとぼけたキャラクターではないということが理解できる。ストーリーの展開によって、見方がガラリと変わる、非常に複雑な深みを秘めているキャラクターだ。人は、一側面だけでは判断することができない。

レティシア

人気の無い廃墟の中で、意味深なメッセージを語る少女。常に人形を携え、マドラックスやマーガレットたちの行動を、いずこからか見つめている

Style

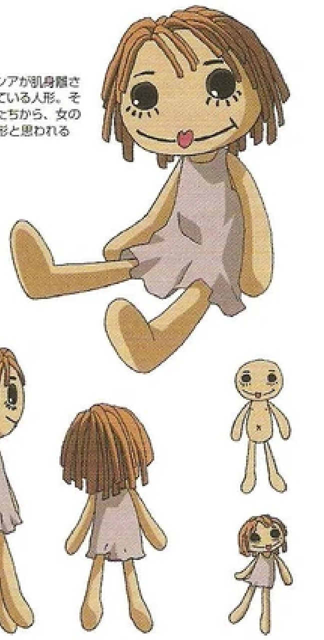
▸全身



外見はまったく普通の少女。だがその佇まいからは、ただならぬ雰囲気を醸し出している

Doll

▸人形



レティシアが肌身離さず持っている人形。その姿かたちから、女の子の人形と思われる

Face

▸顔

表情の変化は皆無に等しく、その瞳は常に虚ろ。そして、そこはかとなく悲しげである

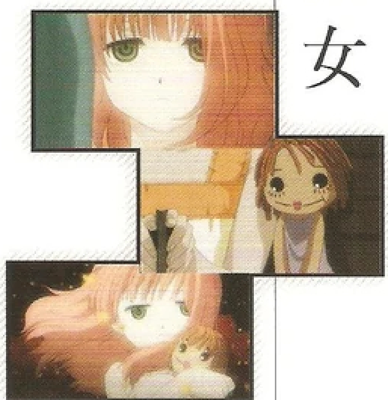


廃墟に佇む少女

語られる言葉

「……見つけられる？　人が望まない場所を……人が、人である場所を」。この台詞と共に、全キャラクターの中で一番最初に登場したのがレティシアだ。

物語に大きく関わってくる重要な人物のひとりである彼女は、一方で、いわゆる「狂言回し」的なポジションにもある。厳密に言えば、この表現は語弊があるかもしれない。しかし、物語の鍵となるような台詞を、あたかも預言詩のように語る様は、ストーリーテリングにおいて、非常に重要な役目を果たしている。特に、第11話の最後に彼女が語る「偽りとは、真実を変えること。無知とは、真実に気づかないこと。無能とは、真実を捕らえきれないこと。そして、逃避とは、真実から逃げること。逃げても無理なのにね。真実は、すぐ側にあるのだから。真実は、こんなにも近くに」という台詞は、物語の主題にも関わる、かつ、謎を解き明かすヒントにもなる台詞だ。彼女の台詞をひとつずつ拾いあげ、繋ぎ合わせれば、『MADLAX』の新たなる表情を見ることができるかもしれない。

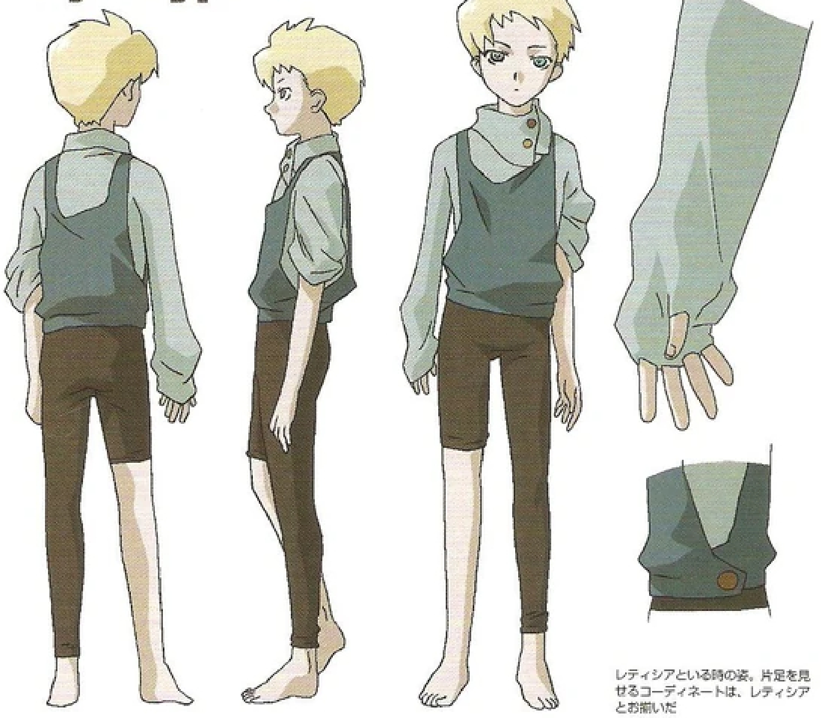


プウペ

いつもレティシアの傍らにいる謎の人物。レティシアのように、何かを語る存在でもなく、ただ黙しているのみだが、ある人物と深い関わりがある

Style Type-A

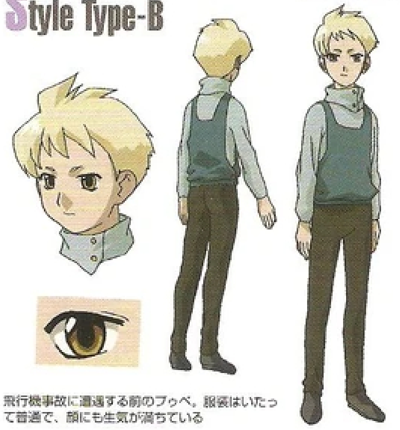
▶全身



レティシアといる時の姿。片足を見せるコーディネートは、レティシアとお揃いだ

Style Type-B

▶プゥペ事故前



飛行機事故に遭遇する前のプゥペ。服装はいたって普通で、顔にも生気が満ちている

Style Type-C

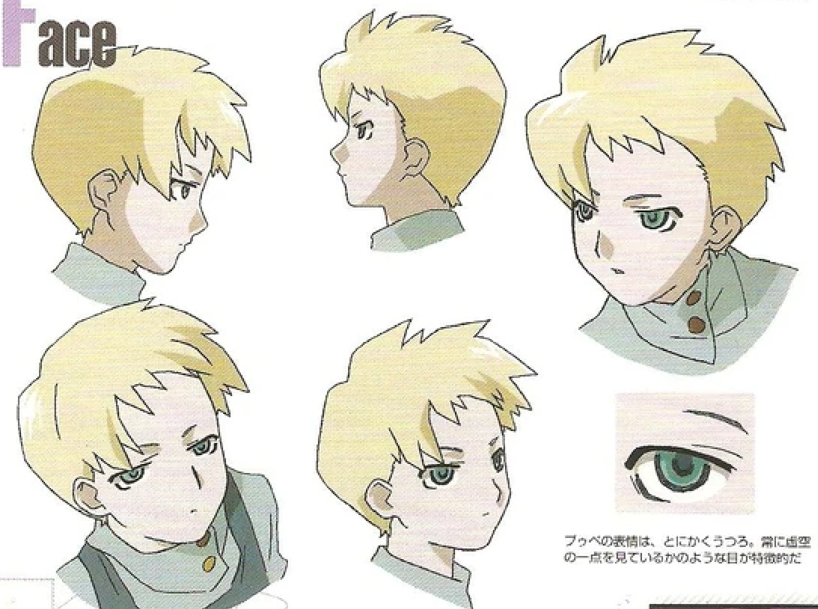
▶プゥペ事故後



事故後のプゥペ。短い左手の袖と、ズボン右太腿部分の切れ目が、左の絵の姿に繋がっている

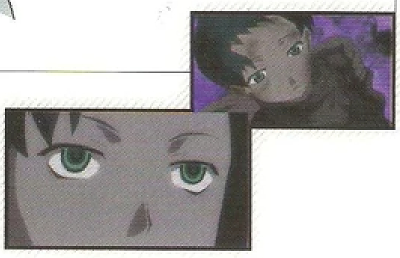
Face

▶顔



プゥペの表情は、とにかくうつろ。常に虚空の一点を見ているかのような目が特徴的だ

謎多き少年



虚ろな瞳の底には

レティシアも、全く説明が無い状態でいきなり登場したが、このプゥペもまた何の情報もないまま、物語の中に配置される。初登場は第2話だが、ただベンチに座っているだけ。一体、この少年は何者なのか？　それは、第21話になってようやく判明する。彼の正体については、また本書18ページで触れるが、とにかくこの“謎の長期保存”とも言うべき存在は、観る者の興味を喚起させる。「一体全体、この子は何者なんだ？」。この疑問は、長じて作品全体への関心にも結びついてくる。

また、非常に空虚な瞳を持っているが、事の顛末を知ると、その奥底には、非常に温かい気持ちが眠っていることがわかり、そこで初めてプゥペというキャラクターは完成する。そして、それと同時に、飛行機事故に遭遇しながらも、懸命に「生きる」ということに対してアプローチしたキャラクターでもある。“優しさ”と“強さ”を持った人物だ。



リメルダ

フルネームはリメルダ・ユルグ。ガザッソニカ軍・親衛隊の凄腕スナイパー。マドラックスを異常なまでの執念で追い回す因縁の相手

Style

▶全身



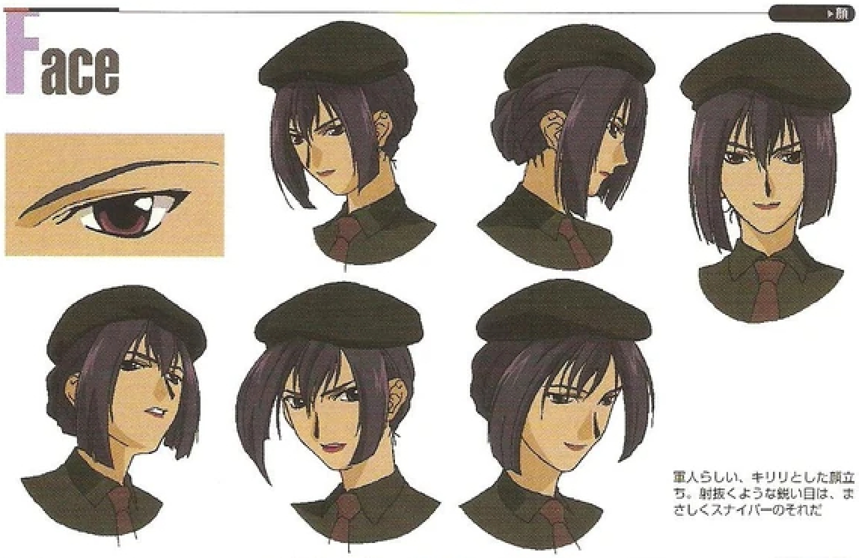




通常の親衛隊の制服姿。制帽を取ると、長く美しいリメルダの髪がハラリと……

Face

▶顔



軍人らしい、キリリとした顔立ち。射抜くような鋭い目は、まさしくスナイパーのそれだ

Gun

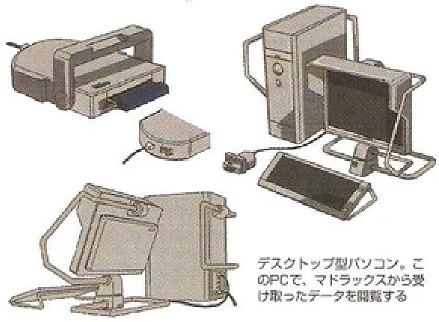
▶銃

リメルダの銃は、HK・PSG-1。対テロ用として作られたセミオートのスナイパーライフル



Personal Computer

▶PC

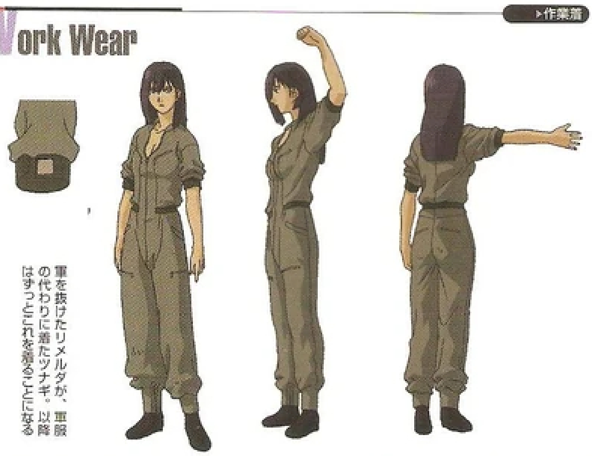


デスクトップ型パソコン。このPCで、マドラックスから受け取ったデータを閲覧する

追跡するスナイパー

Work Wear

▸作業着



軍を抜けたリメルダが、軍服の代わりに着たツナギ。以降はずっとこれを着ることになる

Combat Uniform

▸戦闘服



戦闘時における服装。制服姿とは違い、まさに現場仕様といった活動的なデザインだ

Kimono

▸和服



リメルダ、実は日本好き!? 第18話で、酒をグイグイあおっている際に着ていた和服

Child Age(16 Years Old)

▸リメルダ16才



16歳当時のリメルダ。軍へ入った後とは違い、まだどこか穏やかな表情をしている

Mobile Phone

▸携帯電話



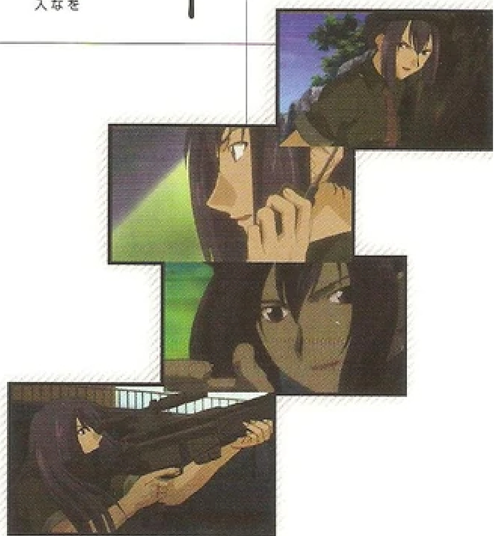
いかにも軍用といった携帯電話。頑丈そうな上に、電波も常にバリ3といったところか？

Bag

▸鞄



バッグといっても、財布を入れたりするバッグではなく、あくまでも銃器類を入れるもの



固執の彼方

マドラックスとリメルダ。2人は第3話で出会うことになる。その際、マドラックスは偽名のパスポート（レティシア・ルゥネと名乗っている）をリメルダに見せているので、お互いのことを正確に認識した上で出会っているわけではない。実質的には、マドラックスがグエン・マクニコルを狙撃した後の攻防で、ライフルのスコープ越しに姿を見た時が、最初の出会いとなる。それ以来、リメルダはマドラックスを執拗に追い回すことになる。

だが、何故リメルダはマドラックスにこだわっていたのか？　軍への忠誠からか？　それともカロッスアへの献身からか？　それらも一因としてあるかもしれないが、思うに、リメルダが純粋にマドラックスの力に惹きつけられたことが大きな要因ではないだろうか。すなわち、「比類なき強さに触れて、自身もさらなるステージへ登りたい」という、戦士としてのプリミティブな欲求があったのではないかと思う。第18話で、リメルダはガザッソニカの真実を知り、自身を取り巻く世界が崩壊してしまうが、そのことが逆にリメルダの想いを純化し、マドラックス（＝自身を満足させてくれる力を持った存在）を、自己を証明するかけがえのないものへと昇華させている。戦いに身を置く人間は、つまるところ、戦いによってこそ身を立てられる。そこに余計な考えや感情は介在する余地がない。リメルダは、ある意味、“本質”に近い行動を取っていた人物なのかもしれない。

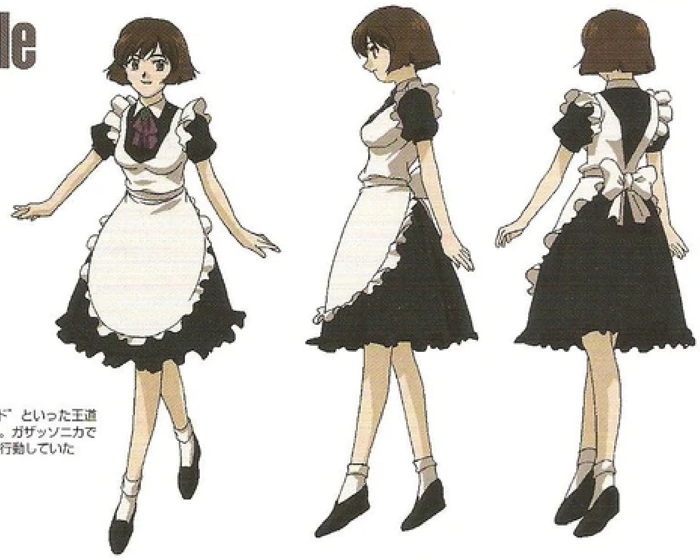
エリノア

フルネームはエリノア・ベイカー。バートン家に代々仕える執事の家柄の娘で、マーガレットの世話をするメイドとして、日々働いている



Style

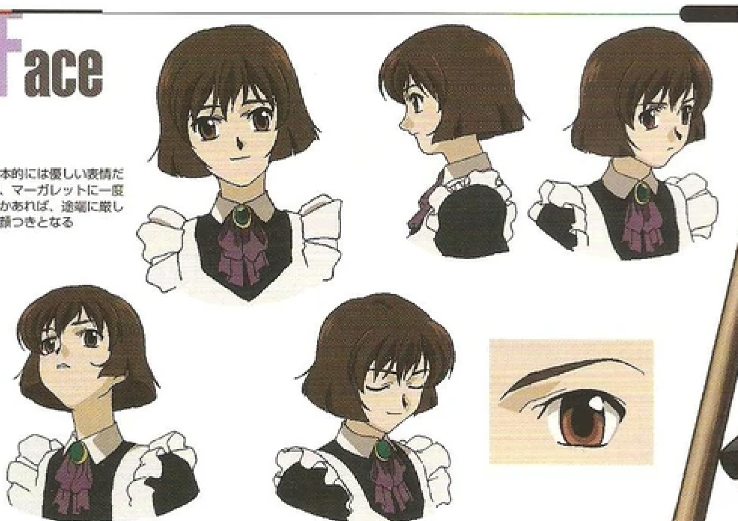
▶全身



"ザ・メイド" といった王道の出で立ち。ガザッソニカでもこの姿で行動していた

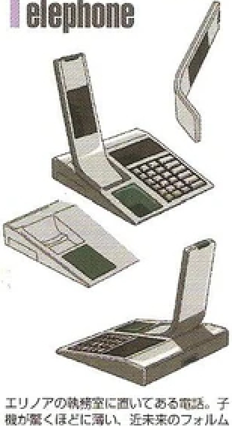
Face

▶顔



基本的には優しい表情だが、マーガレットに一度何かあれば、途端に厳しい顔つきとなる
Telephone

▶電話

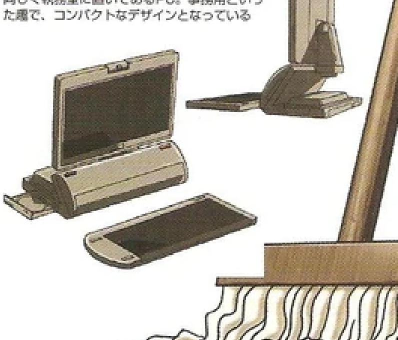


エリノアの執務室に置いてある電話。子機が驚くほどに薄い、近未来のフォルム

Personal Computer

▶PC

同じく執務室に置いてあるPC。事務用といった趣で、コンパクトなデザインとなっている



Swimming

▸水着



ヴァネッサ、マーガレットと共にプールで泳いだ際の水着。普段着の下に着込んでいた

Casual

▸私服

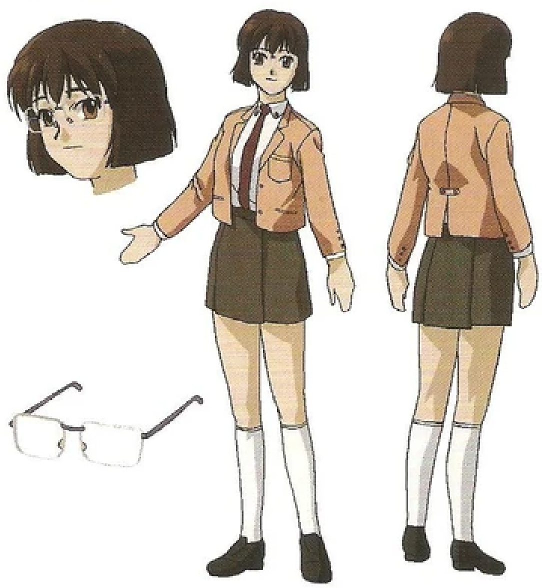
エリノアの外出着は、普段の服に、サッと羽織るケープを合わせただけのシンプルなもの



School Uniform

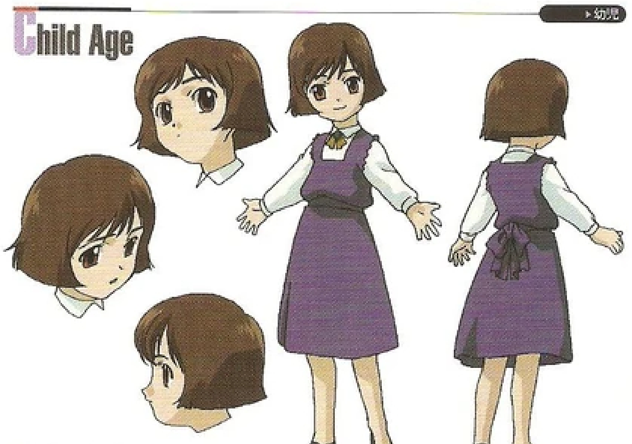
▸制服

マーガレットの身を案じて、学校に潜入した時の制服姿。メガネもまた似合っている



Child Age

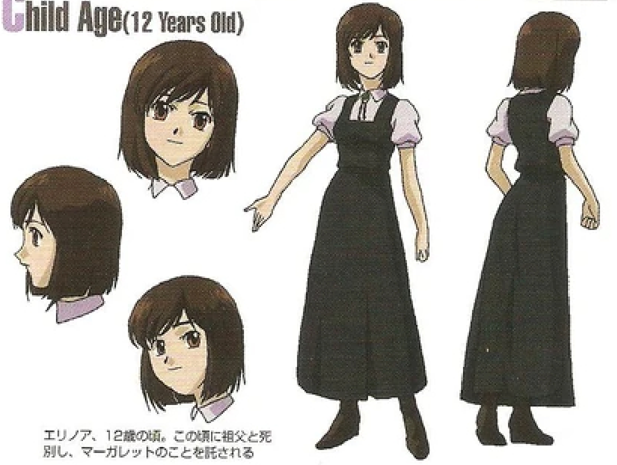
▸幼児



マーガレットが事故から生還した時のエリノア。この頃から運命は大きく回り始める

Child Age(12 Years Old)

▸12才



エリノア、12歳の頃。この頃に祖父と死別し、マーガレットのことを託される

忠良なるメイド

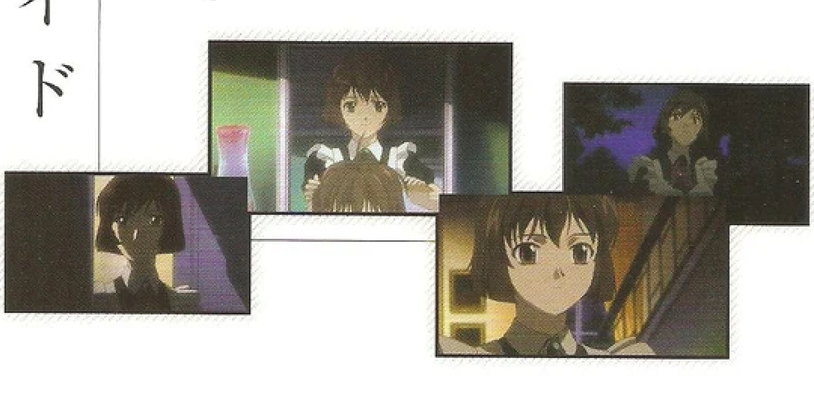
一途な想い

　この物語の中で、エリノアは自分の心が殆ど揺らぐことがなかった。“マーガレットお嬢様の為に”という一点が全ての行動原理となっていた。

　とはいえ、その内面には複雑な感情の動きがあったことも事実だ。周囲からの誹謗中傷に対してのフラストレーションであったり、自己を抑圧したために起こった歪みであったり、そこにはただ単に綺麗事だけでは片付けられない側面も確かにあった。だが、それすらも乗り越えて、最後までマーガレットへの温かみのある想いを貫いた。フライデーの言葉を借りれば、“本質が愛を示した”わけだ。

　なぜそこまでエリノアはマーガレットに尽くすのか？　そこには「祖父の死」があったからだと思われる。（おそらく）劇中で唯一の親族であった祖父が亡くなり、エリノアの心には空隙が生まれてしまった。その空隙を埋める方法は、祖父から後事を託されたマーガレットに仕えるということであり、マーガレットを仲介することで、死んでしまった祖父を間接的に感じていたかったからなのではないかと推察する。

　しかし、マーガレットを自分の“家族”として捉えていたことを打ち明けたエリノアの心境は、また別のステージへと進んでいたと思う。つまり、空隙に存在していたマーガレットが、しっかりと自分の中に溶け込んだということだ。そのことを、エリノアは最後に身をもってマーガレットに示したのだ。

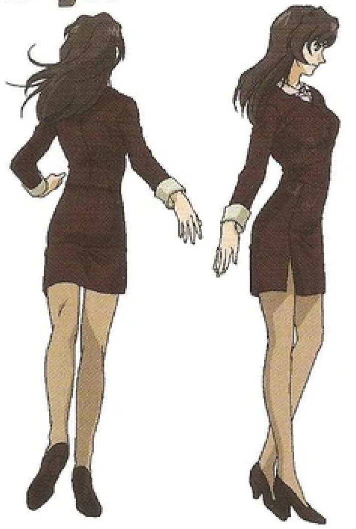


ヴァネッサ

フルネームはヴァネッサ・レネ。ナフレスでもナンバー1の商社・ブッグワルドの国際部で働いている。マーガレットの元家庭教師にして友人

Style

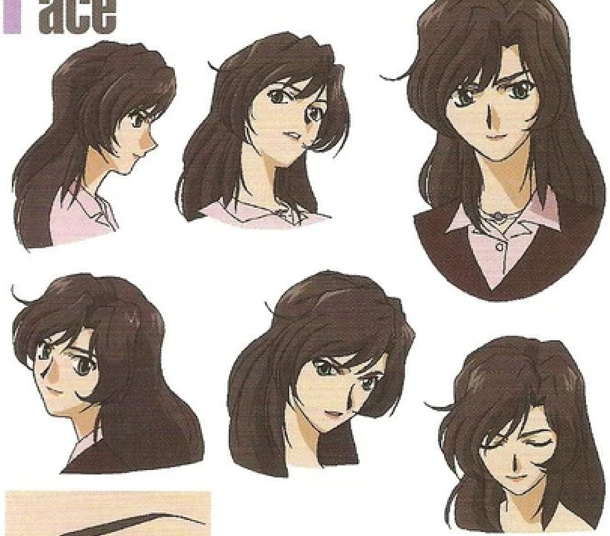
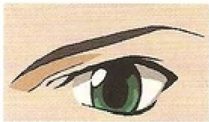
▶全身




いかにも"バリバリと働くお姉様"といったヴァネッサ。スーツ姿は実に凛々しい

Face

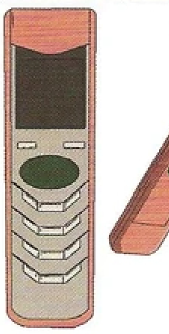
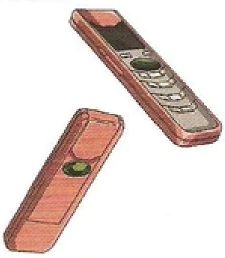
▶顔

大学時代を知るバッジス曰く、「相変わらず美しい」という美貌。確かに美しい……

Mobile Phone

▶携帯電話

カラーはピンクをチョイスしている所が女性的。ボタン部分もスッキリとまとまっている

Notebook PC

▶ノートPC



側面部に取っ手が付いており、持ち運びに便利。ビジネスモデルといった感じだ

Glasses

▶メガネ

PCを操作する時にメガネをかけるヴァネッサ。この顔立ちもまた、違った魅力がある




チャーリー

ブッグワルドの国際部において、ヴァネッサの下で働く社員・チャーリー。その外見からもわかる通り、人畜無害の気のいい男。物語の根幹部分には関わってこないが、緊張感のある展開にあって、見ていると少しホッとするようなキャラクターだ。

だが、ヴァネッサがガザッソニカで異変に見舞われていると感じるや、自らもガザッソニカに渡り、その安否を確かめようとする秘めた行動力も持っている（その結果、とんでもない目に遭ってしまうが）。近しい職場の上司を案ずる気持ちから出た行動かと思うが、それだけであそこまで熱心に足取りを辿るものだろうか？　実はヴァネッサに対して、ほのかな恋心も抱いているのかも……!?

Style

▶全身



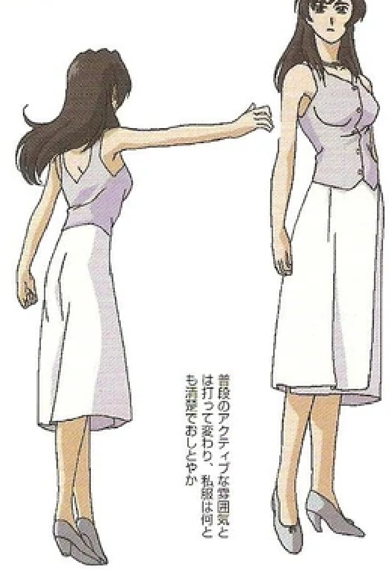
Style-B

▶ベストなし



Casual

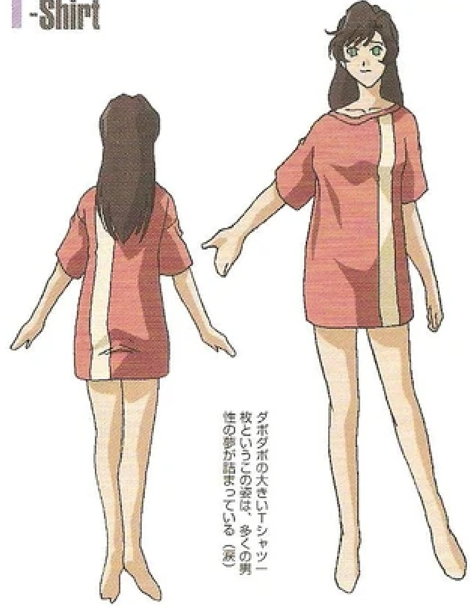
▶私服



普段のアクティブな雰囲気とは打って変わり、私服は何とも清楚でおしとやか

T-Shirt

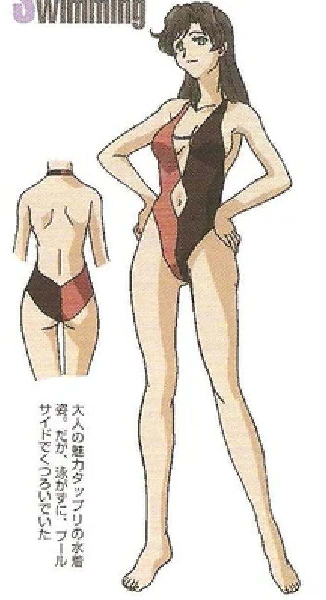
▶Tシャツ



ダボダボの大きいTシャツ一枚というこの姿は、多くの男性の夢が詰まっている（涙）

Swimming

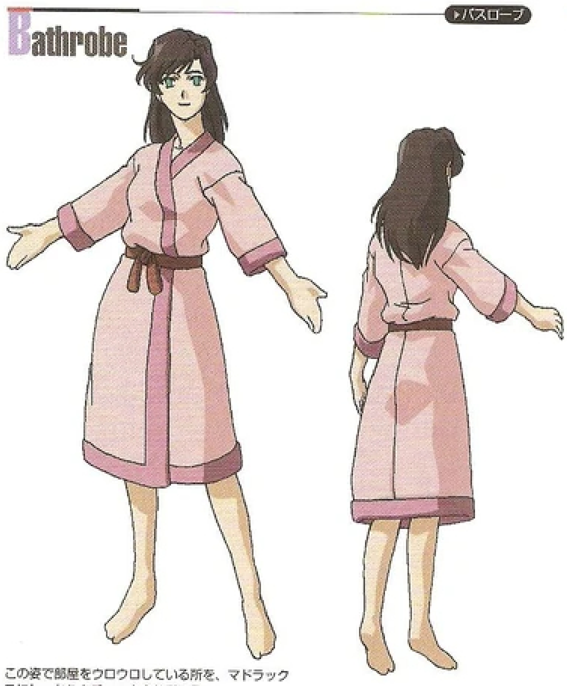
▶水着



大人の魅力タップリの水着姿。だが、泳がずに、プールサイドでくつろいでいた

Bathrobe

▶バスローブ



この姿で部屋をウロウロしている所を、マドラックスにしっかりとチェックされている

Travel Style

▶旅行姿

ガザッソニカ入国時の服装。キャスター付きの旅行鞄がひとつという出張モードだ



真相を追う女

両親、そして友達

まさしく“才媛”と呼ぶに相応しいヴァネッサ。大学を優秀な成績で卒業し、大企業に就職。非の打ち所の無いバリバリのキャリアウーマンとして働く彼女だが、過去には暗い影もある。

それは、ガザッソニカの内戦を誘発させたという罪で逮捕された両親の存在だ。事実は、アンファンによって濡れ衣を着させられてしまったことで逮捕されたわけだが、この“歪められた事実”に対しての憤りが、裏で内戦に絡んでいたブッグワルドを内部告発しようとすることに繋がっている。彼女もまた、エリノアと同様に、失ってしまったものを取り戻すために行動した人物だったのだと思う。

あるいは、両親が逮捕された時に、何もできなかったことへの贖罪の気持ちもあったのかもしれない。結果的に死を迎えてしまう彼女だが、最後に幼き日の自分に戻り、両親の許へと向かうその姿は、心に根深く突き刺さっていたトゲが取れ、晴れて家族が再会したという構図に見える。

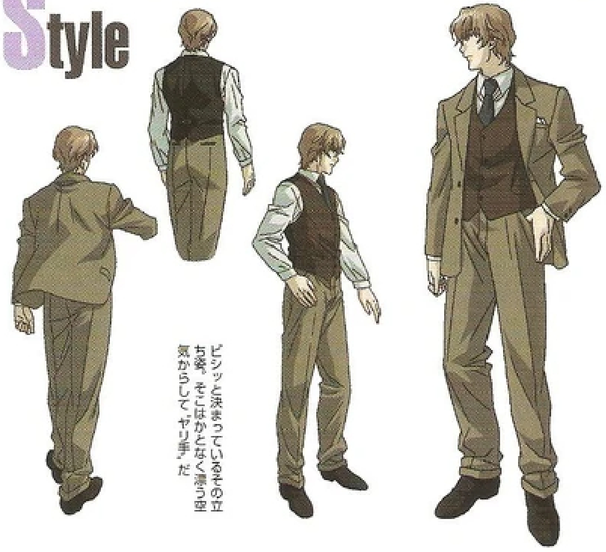
また、彼女は友情にも厚い。マーガレットのことやエリノアのことを想い、最後はマドラックスを庇う形で死んでしまう。さらに言えば、価値観、死生観が異なるマドラックスと対話し、彼女を受け止めようともする。つまり、他者を理解しようとする気持ちが人一倍強い人物だということだ。このことは、物語のひとつのテーマにも関わってくる。彼女もまた、本作の重要なピースなのだ。



カロッスア

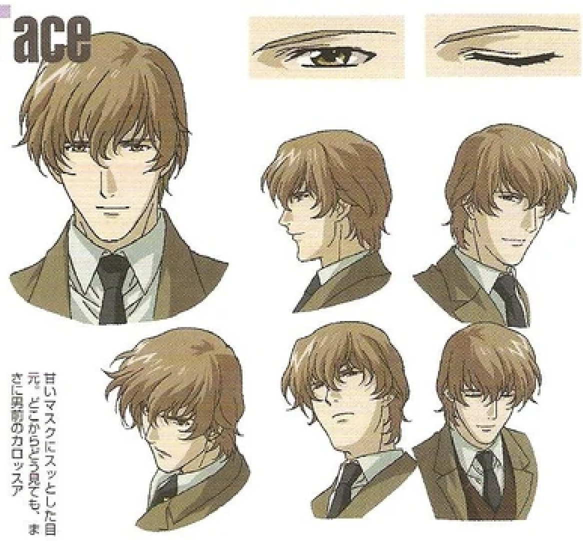
フルネームはカロッスア・ドゥーン。ブッグワルドでは会長直属の独立部門で働く優秀な社員だが、犯罪組織・アンファンの幹部としての顔も持つ

Style ▸全身



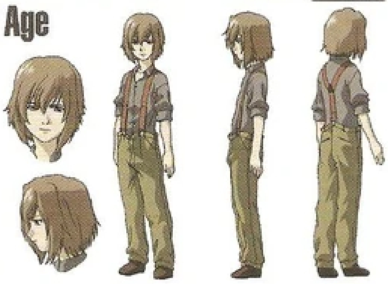
ビシッと決まっているその立ち姿。そこはかとなく漂う空気からして"ヤリ手"だ

Face ▸顔



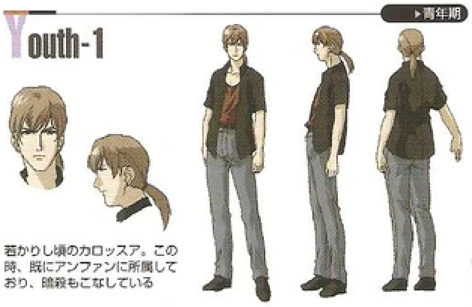
甘いマスクにスッとした目元。どこからどう見ても、まさに男前のカロッスア

Child Age ▸幼少



大人になってからの爽やかな美丈夫ぶりに比べて、子供の頃は何とも暗い雰囲気

Youth-1 ▸青年期



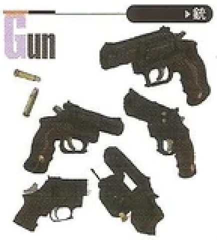
若かりし頃のカロッスア。この時、既にアンファンに所属しており、暗殺もこなしている

Youth-2 ▸アンファン時代



アンファンに入り、しばらく時を経た頃。組織内の階段を駆け上がっている時代

Gun ▸銃



カロッスアの銃・MANURHIN（マニューリン）。護身用といった感のある小型拳銃だ

Mobile Phone ▸携帯電話



極薄型の折り畳み式携帯電話。ジョイントの中心部にはカメラらしきレンズがついている

本当の自分を探して

不確かな存在

カロッスアが、アンファンを裏切っても本を求めた理由。それは自分自身が何者かを確かめるためだ。言うなれば、その行為は、まさしく"自分探しの旅"であった。

そしてその結果、彼は遂に答えを見つける。いや、答えを"見つけてしまった"と言うべきかもしれない。カロッスアという存在は、12年前の事件でプゥペから派生した"生き残りたい"という思いが具現化した存在だった。彼は本来ならばこの世にいない人物であり、事実を知った彼は、死んでしまった（死ではなく、存在の消失と言うべきかも知れない）。だが、何故カロッスアが生まれたのかというと、それは「マーガレットを守りたい」という一心が要因だ。アンファンを裏切り、ファースタリを携えてマーガレットの許へ向かったのも、表向きは自分の為かもしれないが、フライデーの手からマーガレットを守りたかったという心の奥底の気持ちがそうさせたのかもしれない。結果的に答えを"見つけてしまった"彼ではあるが、最後の表情は実に穏やかなものであった。



Character Guide #09

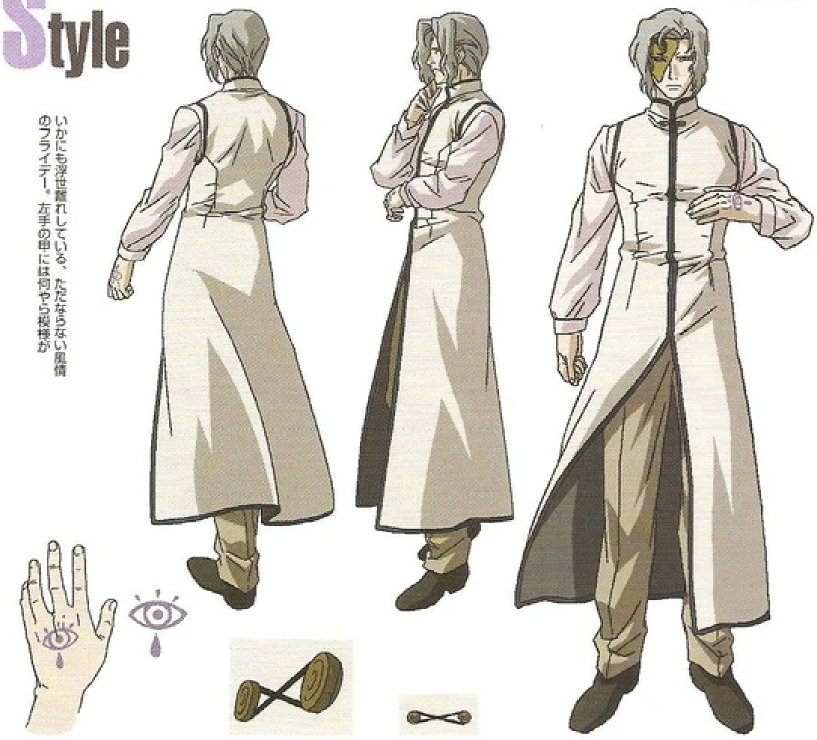
フライデー

フルネームはフライデー・マンデー。アンファンとブッグワルドの力を使って、ガザッソニカで暗躍する謎の人物。マーガレットの本を狙っている

Style

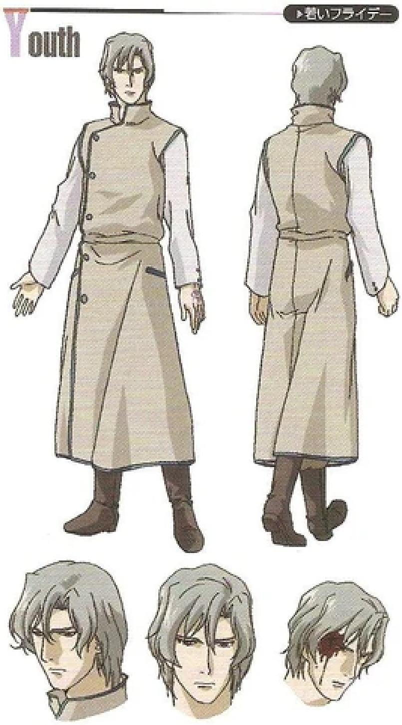
▸全身

いかにも浮世離れしている、ただならない風情のフライデー。左手の甲には何やら模様が



Youth

▸若いフライデー



12年前にバートン大佐と対峙した時のフライデー。まだ若々しさに溢れている。二枚目

Face

▸顔



顔の右側面を覆うマスクが実に不気味。目からも、鬱屈とした鈍い輝きを感じる



Right Eye

▸目



かつて、対峙したバートン大佐によって撃たれた傷跡が残るフライデーの右目尻

本質を求める者



“純粋” な世界

“本質” を求める者・フライデー。彼の言う所の本質とは、人が様々なルールによって制している本能的な衝動を指していると思われる。彼の目指すものは、そういった衝動が剥き出しで存在する “純粋な世界” の構築であり、人類の景色を塗り替える革命だ。彼は、上辺であったり建て前だったりモラルであったり、そういう “殻”、または “ストッパー” を激しく嫌う。彼自身が純粋な衝動によって突き動かされている存在なのだ。そして、その結果表出したのは、無差別な殺人が横行する秩序の崩れた世界。普通に考えれば、まさしく “悪” と言って差し支えのない行為だ。

だが、それはモラルという観点から見た結論であり、内在していた本質が浮き出たことに起因する結果であれば、それはごく自然なことであると言える。一概に、フライデーを悪であると断定できない所に、複雑で奥深い本作の魅力がある。

そもそも、フライデーとは何者なのか？　人間なのか？　それとも別の存在なのか？　まだまだ彼の本質を探究する余地がある。

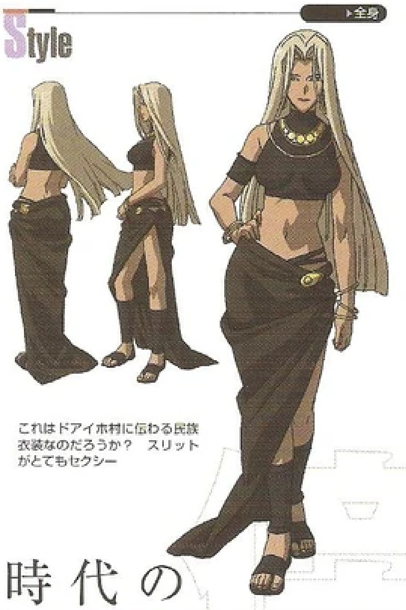
Character Guide #10

クアンジッタ

フルネームはクアンジッタ・マリスン。ガザッソニカにあるドアイホ村で3冊目の本・サースタリを守りながら、時代の変遷を見守る美女

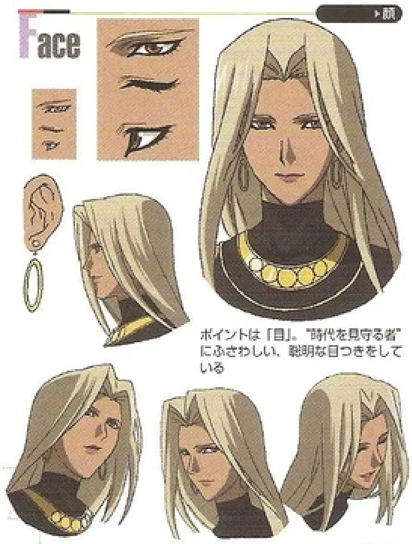
時代の傍観者

Style ▸全身



これはドアイホ村に伝わる民族衣装なのだろうか？　スリットがとてもセクシー

Face ▸顔



ポイントは「目」。"時代を見守る者"にふさわしい、聡明な目つきをしている

不確かな存在

「扉」へ導くキーパーソンであるクアンジッタは、直接的にマドラックスやマーガレットに干渉するのではなく、あくまでも傍観者として劇中に存在する。事の推移、帰結を見つめるという役目を、彼女は冷静に務めている。扉を開く者が、世界の破滅を願っているとしても、ただ見守るしかないというその立場は、生半可なものではない。だが、彼女はそれを粛々と受け止めている。

その彼女の傍観者としての立場は、代々受け継がれてきているもの。彼女の先代たちが見つめてきた時代とは、果たして一体どういうものであったのだろうか……。



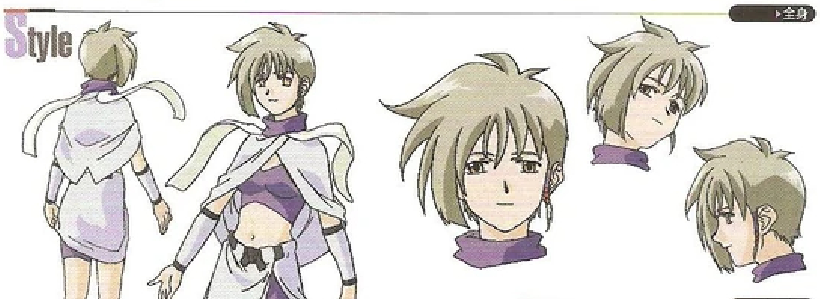
Character Guide #11

ナハル

クアンジッタに仕えるナイフ使いの女性。今回の本を巡る一連の動きを、陰から監視している。その戦闘力は、マドラックスにも比肩する高さ

疾風のナイフ使い

Style ▸全身



いかにも動きやすそうなナハルの服装。目には、どことなく憂いを漂わせている

Knife ▸ナイフ



ナハルの武器。これだけで銃を持っている相手と渡り合う。手持ち、手投げ両方OK

陰からの視線

クアンジッタの命により、マドラックスやマーガレット、カロッスアを監視するナハル。彼女もまた、一傍観者であるべき立場なのだが、実際には、マドラックスのフォローをし、物語の展開に一役買うこととなる。それは、彼女の中にある「このまま、ただこの流れを見つめ続けるだけでいいのか？」という葛藤から生まれた行動で、本来の役目からすれば逸脱したことだ。

だが、クアンジッタはそれを見越した上でナハルに仕事を委ねたのかもしれない。大局から見れば、彼女もまた時代のうねりの中にある、起爆剤のひとつとも考えられる。



『MADLAX』で描かれる"家族"

『MADLAX』に登場する多くのキャラクターは、その行動の根底に"家族"というファクターが存在する。各家庭、抱えている事情もそれぞれだが、いずれの家庭も物語と密接な関係を持っている。ここでは、その家族に焦点を当てて考えてみたいと思う。"家族"とは一体何か？

Father
▶マドラックスの父

マドラックスが追い求めている父親は、マーガレットの父親でもあるバートン大佐



Child Age
▶マドラックスの幼少時代

幼い頃のマドラックスには、本の１ページと父親の認識章だけが残された



Mother
▶マーガレットの母



夫に会う為に幼いマーガレットと飛行機に乗るが、事故により他界してしまう

Child Age
▶マーガレットの幼少時代

飛行機事故では何とか生き残るも、その後、過酷な運命を背負うことに……



Father
▶リメルダの父



物語では詳細不明のリメルダの父親。外見からはごくごく普通の中年といった感じだ

Grand Father
▶エリノアの祖父



バートン家一筋のエリノアの祖父。マーガレットのことをエリノアに託して逝去

「家族」というものの有り様

まず、マドラックスの父親、すなわち、マーガレットの父親であるバートン大佐から。彼は、貴族の家柄でありながら、軍人として生活しており、フライデーからは「マドラックス」と呼ばれている（「マドラックス」は戦士としての通り名だと思われる）。事故に見舞われたマーガレット（母親はこの事故で死亡）を救出すべく現場へ向かうが、フライデーの繰り出す「目覚め」「本質」「真実」の言霊により、娘を殺そうとしてしまう。結果的に生き残ろうとしたマーガレットによって、逆に殺されてしまうが、このことによりマーガレットからマドラックス、レティシアが生まれることになる。マーガレットは、銃の引き金と共に、一連の物語の引き金も引いたというわけだ。このエピソードは、非常に重要な位置を占めている。

また、エリノア、ヴァネッサ共に、生き方の下地には、家族が根ざしている。また、2人にはもうひとつ、家族の喪失感という共通項目もあり、自己の精神的復元という題目もシンクロしてくる。

また、物語では明確に描かれていないが、リメルダもまた、戦争の中で家族を失っていると推測される（第18話の冒頭、リメルダの回想シーンを参照）。このことが、彼女を軍に入隊させた大きなきっかけになっているのかもしれない。

美しく、激しく

第1話「銃舞　－dance－」

政府の王国軍と、反政府勢力のガルザが内戦を続ける国、カザッソニカ。その国の密林にひとりの少女が潜り込む。少女は凄腕のエージェントで、消息を絶ったガルザの部隊が持っている、王国軍の秘密データを回収するのが今回の任務だった。

その消息を絶ったガルザの部隊の一員で、ただひとり王国軍から逃げ延びたピートは、古い坑道内に隠れていた。すると自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。仲間だと思い、ピートは出て行こうとするが、その場に現われたエージェントの少女がそれを制止する。ピートの仲間は、王国軍に協力してピートを売ることにしたのだ。

ピートを導いて坑道を脱出した少女は、そのまま2人で逃げようとする。だがピートは少女に秘密データの入ったディスクを渡すと、仲間を助けにひとりで戻っていく。彼は自分が敵に売られたことを知りつつ、それでも仲間を見捨てられなかったのだ。だがピートの仲間は既に殺されていて、しかもそこには、王国軍の増援が迫っていた。

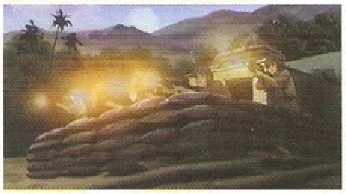
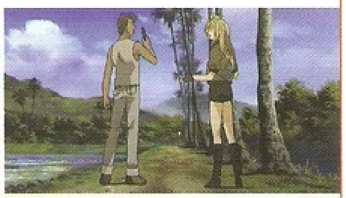
その王国軍増援部隊の前に、ドレス姿の少女が現われた。あのエージェントの少女だ。彼女は踊るように華麗に銃を操って王国の兵士を次々と倒し、ついには部隊を全滅させてしまった。そして彼女はピートが向かった王国軍の基地へ向かい、負傷したピートを救出する。しかし彼の傷は深く、戦場から遠ざかる途中で息絶えてしまった。

でも、こんなことは戦場では珍しくもないこと。そして、それがこの少女、マドラックスの日常でもあった。






「帰ったらパスタにしよう。
うん…パスタ」

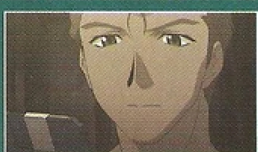








COLUMN

裏切られても



マドラックスが出会ったガルザの青年兵士・ピート。彼は、3年前に政府軍によって両親を殺されている。そのため、自らを拾い上げてくれた恩人であり、軍では上官であるナイマン少尉を「おやっさん」と呼び、親しんでいた。しかし、ピートはナイマンに裏切られてしまうことになるが、そのことを承知していても、ナイマンのことを"家族"と呼んでいる。ピートは家族を失うことよりも、最後まで家族を信じることを貫いた。また、それこそが、寄る辺なき身の上の、大事な"家"だったのだろう。内戦という狂乱が生み出した悲しい家族の姿である。

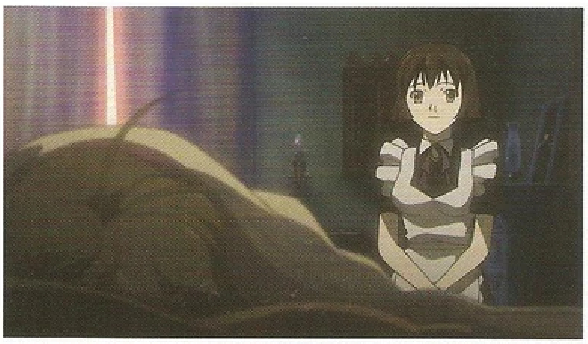
雨が降る

第2話「紅月　－crimson－」

経済大国ナフレスに、マーガレットという少女が暮らしていた。名家の娘である彼女は、メイドとして彼女に尽くすエリノアと2人で暮らしていた。

ある日、街で彼女は、隣に住んでいるヴァネッサに声をかけられる。ヴァネッサは、巨大商社ブッグワルドの社員で、仕事で参加していた美術品のオークションから戻る途中でマーガレットを見つけたのだ。彼女はマーガレットの家の隣に住んでいて、かつてマーガレットの家庭教師をしていたこともある。だがしばらく海外勤務をしていたため、長いことマーガレットと会っていなかったのだ。

再会を喜んだヴァネッサは、彼女を自分のオフィスへと招待する。だが、ヴァネッサが目を離している間に、マーガレットはひとりでブッグワルド社内をさまよい出してしまった。そこで彼女は、見知らぬ男性と出会う。彼は、ヴァネッサがオークションで落札しようとしていた美術品を、何者かの指示により巨額な資金で落札した人物だった。その男性・カロッスアは、何気なくマーガレットに話しかけるが、マーガレットはなぜか彼に怯えて逃げ出してしまう。そんな彼女を見つけたヴァネッサは、そのままマーガレットを家まで送り届けることにする。ついでに彼女の家でエリノアの料理をごちそうになったヴァネッサは、プレゼントとして買っておいた赤い靴をマーガレットに渡した。すると靴を見たマーガレットは、なぜか唐突に部屋で捜し物を始める。そして1冊の古ぼけた絵本を引っ張り出した。かつて父親がプレゼントしてくれたという、血に汚れた絵本を……。



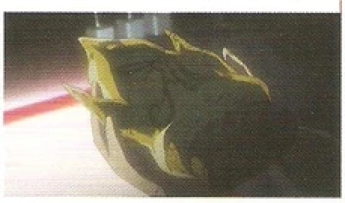








「お父様のプレゼント、
血が滲んだ絵本…赤い、絵本」

COLUMN

赤い靴



マーガレットが街で見かけた赤い靴は、単に普通の赤い靴でしかない。しかし、記号としての赤い靴が、封印されていた過去の記憶（12年前の事件で赤い靴を履いていた）と一致し、物置からセカンダリを掘り出してくる結果となった。つまり、赤い靴が記憶をよみがえらせる装置となったわけだ。この赤い靴のエピソードは、終盤になってようやくハッキリと判明する、非常に長い伏線となっている。ここら辺りは、実に巧妙に用意された演出だ。

また、この赤という色が、セカンダリに付着していた血を連想してしまう……というのはやや深読みか？

標的は依頼者

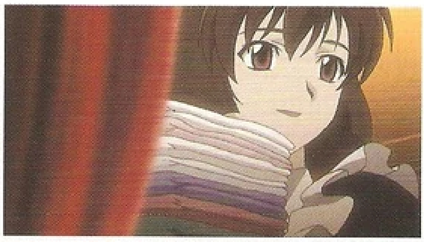
第3話「蒼月　－moon－」

マドラックスは、ガザッソニカ陸軍司令官グエン・マクニコルを、軍の式典中に暗殺するよう依頼された。だが奇妙なことに、この依頼はグエン本人からのものだというのだ。

式典の前日、軍の公邸にいたグエンの前にマドラックスが姿を現わした。彼女は、「あなたの依頼を受け、あなたを狙撃する者です」と告げる。マドラックスは、自分自身の暗殺を依頼してきたグエンに興味を持ち、危険を冒してわざわざ公邸に潜り込んだのだ。グエンは陸軍司令官という地位にあるものの、自分が何者かに操られているような感覚を抱き続けていた。自分の妻をガルザの爆弾テロで殺されたため、ガルザと戦い続けてきたグエンだが、その妻の死も、自分をガルザと戦わせるための策略だったのではないかと疑うようになっていた。そんな日々に疲れ果てた彼は、欺瞞に満ちた人生に自ら終止符を打つため、自分の暗殺を依頼したのだという。

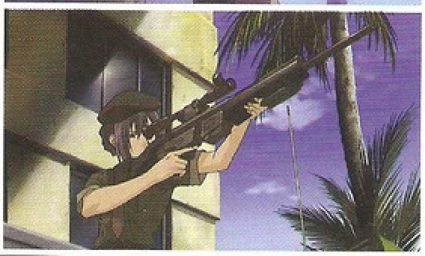
そして翌日。式典中にマドラックスのライフルから発射された弾丸は、正確にグエンを貫き彼の命を奪った。会場を警備していた軍の女性スナイパーであるリメルダは、自分のライフルのスコープ越しに逃走しようとするマドラックスの姿を発見。前日に会場の下見をした際に、旅行者に扮したマドラックスと出会っていたリメルダは、彼女が暗殺者であったことに驚く。そのせいもあって、結局はマドラックスを逃がしてしまった。

一方、ガザッソニカ中が大騒ぎをするこの事件を冷静に見つめる者がいた。その男、カロッスアは「代わりの者はいくらでもいます」と、何者かに報告していた。

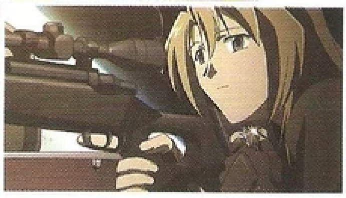
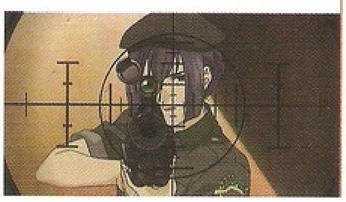







「教えて。何もない人間は、
何をしたらいいの？」

COLUMN

操られた人生



「私は、何か見えない大きな力で、この身を動かされていたのだ。まるで操り人形のように……」。グエン・マクニコルが、何故自殺ではなく、マドラックスによる射殺を選んだのか。それは、アンファンに対する自らの意思表示の為だ。彼は、自分を戦争へと狂奔させた原因である妻の死すら、仕組まれていたのかもしれないと推測している。そこまで踊らされ続けてきた自分ではあるが、死ぬことだけでも自分の采配で行いたいという最後の抵抗。そこまで追い詰められてしまう程の絶望感、忸怩たる思いは、察するに余りある。疲れきった彼の、何とも悲しい末路だ。

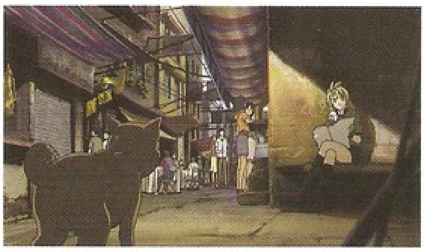
事件の裏の暗闇

第4話「誘惑　－ask－」

ナフレスの地方議員ピエデリカ・モレイが殺害された。犯人はピエデリカの娘で、マーガレットと同じ学校に通うアンヌ。だが彼女は、父を殺した直後に自殺していた。

なぜアンヌがそんな行動に走ったのか。事件の担当になった刑事のマクレーは、どうしてもその答えに辿り着けない。アンヌとピエデリカの親子関係は決して悪くなく、事件直前までのアンヌの挙動にも不審な点がまるでないのだ。だがマクレーは捜査を進める中で、アンヌのコンピュータに入っていた情報の一部が、国際犯罪組織アンファンによって消されていることを知る。さらに、ピエデリカがガザッソニカと繋がりがあったことも突き止める。しかしそんな折、マクレーは警察上層部からの圧力でこの事件の担当を外されてしまった。これに納得がいかないマクレーは、独自に捜査を続けようとするが、彼の周囲に奇怪なことが起こり始める。彼の持っているクレジットカードは突然使えなくなり、自室の電気も水道も止められる。こうして彼の存在は、情報を自在に操るアンファンによって徐々に社会的に抹殺されていく……。

後日、マーガレットはマクレーに偶然出会う。死んだアンヌに花を捧げようとした時、マーガレットはアンヌの家の近辺で調査をしていたマクレーに会ったことがあった。だがマクレーはその時のことはおろか、自分の名前すらも覚えていなかった。アンファンに魅入られたマクレーはそれまでの人生を奪われ、これからはアンファンの人間として生きることになる。そんなマクレーの陰には、カロッスアの姿があった。



「花言葉は“誘惑”よ」










C O L U M N

消去される恐怖



マクレーは、外見からして、いかにもな正義感溢れる刑事だ。その実も、アンヌ・モレイによる親殺し事件の裏で、巨大犯罪組織・アンファンが関わっていることを突き止めるや、果敢に捜査へと突き進む。

だが、そのことにより、彼は自分に関する情報を次々と削除されていく。現代社会というのは、自分を証明する情報を、外部、もしくは第三者からの情報に頼っている。いくら自分が誰それだと叫んでも、現実としてはなかなかに認められない。ジリジリと存在が削除されていく恐怖……アンファンの恐ろしさを、まじまじと見せつけられる物語である。

父を訪ねた果てに

第5話「無在 －zero－」



ナフレスの市民団体から、ガルザに輸送されたある物資を回収するという任務を受けたマドラックス。だがその物資は、アンファンも狙っているという。マドラックスは物資の行方を探るため、その物資の搬入が行なわれていた港を調べるが、そこでクリスという少年と出会う。彼はガルザに所属している自分の父親を探すためガザッソニカに密入国してきたのだという。なりゆきでしばらく行動をともにすることになった2人だが、マドラックスと別れた後、クリスは武装した男たちに取り囲まれる。だがそこにマドラックスが助けに現われた。マドラックスが回収することになっていた“ある物資”とは、実はクリスのことだったのだ。クリスの父親はガルザの指導者ミン・デュルク。政治的価値の高いクリスの身柄を確保すべく、アンファンは彼を狙っていたのだ。

そのままガルザの支配地域へ向けて移動を続けるクリスとマドラックスだが、行く手には彼らを追うカロッスアと、カロッスアに依頼されたリメルダが先回りしていた。だが、クリスを囮にして不意をつくことで、マドラックスはリメルダたちを引き下がらせることに成功。再会することを約束してマドラックスと別れたクリスは、ミン・デュルクがいるという建物に辿り着いた。だが、そこにはミン・デュルクはおらず、代わりに謎の仮面の男、フライデーが姿を現わすのだった。……そしてマドラックスとの再会を約束したクリスが、再びマドラックスの前に姿を現わすことはなかった。



「3日後に、あの部屋で待ってる」

COLUMN

垣間見える事情



このエピソードの最後、クリスはガルザの本拠地へと連れて行かれるが、そこには父親であるはずのミン・デュルクはいなかった。それ以前に、ガルザの本拠地としての呈すら見られない廃墟だった。そしてフライデーはクリスに対し、「12年前の事件で歪められた者なのだ」と告げる。マドラックスやレティシア、カロッスアのことを考えると、クリスもまた、12年前の事件現場に、何らかの形で関わっていた者（もしくは物）なのだろうか？　であるとするならば、一体、彼は何故この世に現れてしまったのだろうか？　物語が終わっても、まだ謎は隠されている。

マーガレットの傍に

第6話「遺言 –leave–」

エリノアは、マーガレットについて医師と相談していた。実はマーガレットは12年前に飛行機事故に遭い、行方不明になったことがあった。程なく彼女はなぜかひとりで帰って来たが、その時には過去の全ての記憶を失ってしまっていたのだ。それから月日は流れたが、未だに彼女の記憶は戻っていない。しかしマーガレットは、そんな事故など嘘だったかのように平穏に日々を過ごしている。だがエリノアは一抹の不安を感じるのだった。

そのマーガレットは、ある日クラスメイトのキアラからホームパーティに誘われる。あまり気が進まなかったマーガレットだが、彼女に気がある男子生徒のロペスが、どうしてもマーガレットを誘い出すよう、キアラに頼んでいた。この話を聞いたマーガレットは、ロペスの真意をよく理解していないながらも、パーティに行くことにした。パーティ会場でロペスに話しかけられたマーガレットは、やはり彼の真意を理解できないまま外に連れ出される。そこで、マーガレットがカバンに入れていた絵本の中を見た時、ロペスの様子が変わった。彼は突然強引にマーガレットに迫り始めたのだ。そこに、マーガレットを迎えに来たエリノアとヴァネッサがやって来る。彼女たちを前にしたロペスはナイフまで持ち出すが、エリノアの蹴りが炸裂してダウンさせられる。かつてエリノアは、バートン家の執事だった祖父に、マーガレットを守ると誓った。その誓言を今でも胸に抱き続けているエリノアは、マーガレットを無事に救うことに成功したのだった。















「私、お嬢様を守る。絶対に守る」









COLUMN

同級生たちの内心



マーガレットを親しげにパーティへ誘うキアラだが、どうもここに悪意を感じてしまう。ロペスに頼まれてパーティへ誘ったという経緯は明らかなのだが、日頃から、その素行に対して評判がよくないロペスの頼みを聞くという所に、実はマーガレットを、あえてロペスに引き合わせて、無茶苦茶にしてやろうと考えていたのではなかろうか？ 実際、ロペスがマーガレットに接近しようとした際、それを見つけたキアラは、ニコリと微笑んでいる。大富豪の娘に対する嫉妬か、それとも、マイペースに生きているマーガレットへの腹立ちからか、いずれにせよ、引っ掛かる所ではある。

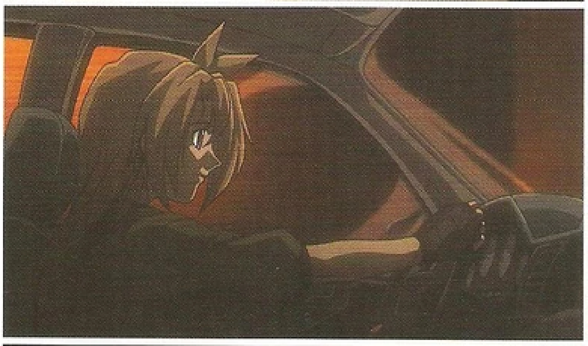
命懸けの仕事

#7 nature

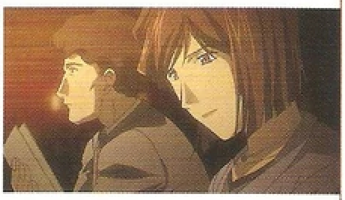
第7話「絵本 －nature－」

マーガレットが持っている絵本は、ページの一部が破り取られていた。そのため彼女は、この絵本の完全な状態のものを欲しがっていたが、絵本はどこの国の言葉ともわからない謎の文字で書かれており、タイトルすらも読めない。この話をマーガレットから聞いたヴァネッサは、書籍専門の探偵「ビブリオ・ディテクティブ」に依頼してみてはどうかと提案し、エリック・ジランという男を紹介する。マーガレットが提示した巨額な報酬に面食らいながらも、純真な彼女の期待に応えようと、エリックは依頼を引き受ける。絵本のコピーを取ったエリックは、知人の言語学者を訪ね、絵本の文字を調べることから始めた。言語学者ルシールによると、絵本の文字はガザッソニカの古代の文字だという。そこでエリックはガザッソニカへ入国、ドアイホという村に、この文字が読める人間がいることを突き止めた。



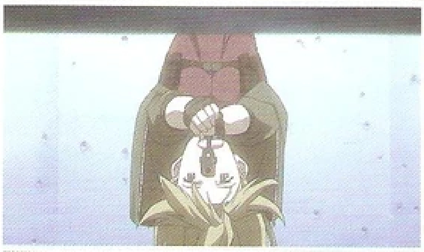



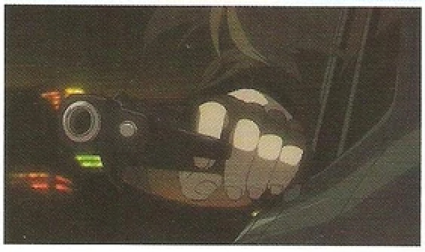

「信じられちまったんだよ。かわいらしい、お嬢ちゃんにな」



ところが彼は、なぜかいきなり何者かの襲撃を受ける。そんなエリックを助けたのが、彼のボディガードになったマドラックスだった。彼女は襲撃者を撃退して脱出。なぜ自分が襲われるのか、何者が襲ってきたのか理解できないエリックに対し、襲ってきたのはアンファンの手の者だとマドラックスは告げる。

一方、エリックが探している本についての報告をカロッスアから受け取ったフライデーは、その本──セカンダリ──の情報を、いかなる手段を使ってでも集めるように命ずる。






COLUMN

本を見つけ出す仕事



本を探す探偵「ビブリオ・ディティクティヴ」を生業とするエリック・ジラン。探偵といえば、小説の世界では難解な殺人事件を解決する知性的なヒーローであり、我々が生きている世界では、浮気の裏付けや人探しなどの業務が一般的。それだけに、この設定は実にユニークだ。

実際、古本には非常に希少価値があるものも存在する。これはある意味、古美術の範疇と考えてもいい。物語の世界は、パソコンやネットワークも発達している社会として描かれているだけに、相当な好事家を相手に商売をしているのだろう。何にせよ、奇特な仕事だ。

壁画に書かれた文字

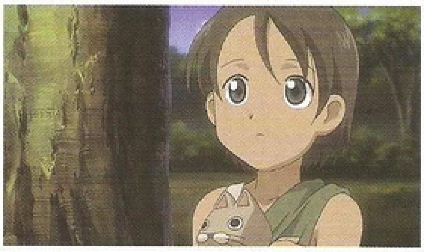
第8話「魂言　－soul－」

エリックはマドラックスに伴われ、ガザッソニカの密林へと入っていく。そして幾度となく戦火にさらされながらも、2人は絵本の文字、エリエス文字が読める人物がいるドアイホの村に到着した。そこで彼らは、クアンジッタという女性に会う。マーガレットの絵本のコピーをエリックが見せると、クアンジッタはその文字を“サークス・サーク”と読んだ。さらに彼女は、エリエス文字で描かれた壁画が、村の近くの洞窟に残されているという。エリックはその場所まで案内してもらうことにした。

洞窟の壁面にはエリエス文字で“エルダ・タルータ”と書かれていた。クアンジッタが去った後、魅入られたように壁面の文字を見つめていたエリック。その時彼は何かの気配を感じて後ろを振り返ると、そこには男の子と女の子が立っていた。女の子はレティシアと名乗り、「どうしてここに来てしまったの？」とエリックに尋ねる。その時、今まで封じられていた、エリックの凄惨な過去の記憶がよみがえってしまった。かつて自分の妹を殺され、その復讐に自分も犯人の男たちを皆殺しにしたことを……。

一方ドアイホには、アンファンの追っ手が迫っていた。だがマドラックスは彼らを全滅させ、エリックと合流する。だがその時にエリックの様子はすっかり変わってしまっていた。彼はマドラックスに、本を探せなかったことをわびる内容のマーガレット宛ての手紙を託す。そして自ら命を絶つのだった。








「あなたが立っている場所は、
普通の端っこなの」




COLUMN

縛られた記憶



エリックは、脳内の分泌物質・カンナビノイドにより、自らの記憶を封鎖していた。そこに閉じ込められていた記憶は、詳しく描かれてはいないが、まず、妹に関すること（おそらく暴行を受けたと思われる）、そして、その妹に関する事件で、犯人に対して復讐をし、その結果、自分の内なる殺人嗜好に気づいてしまったということだ。

記憶が封じ込められた最大の原因は、後者にある。その為に彼は「普通の世界」で生きていくことに諦観し、崖から身を投げてしまう。そうすることこそ、自分が自分である為の残された手段だったのかもしれないが、切なすぎる最期だ……。

最後の標的

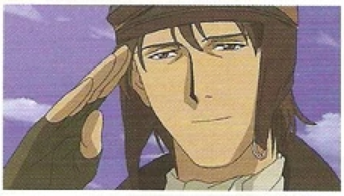
第9話「残香 －scent－」

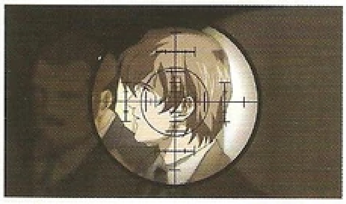


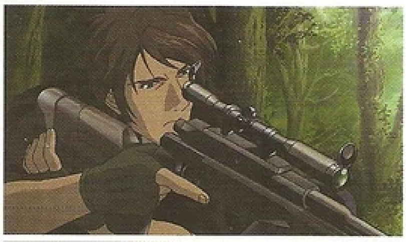



マーガレットとエリノアは、ヴァネッサに誘われて、ブッグワルド直営のホテルにバカンスに行くことにした。ところがホテルに向かう途中、一行を乗せた車が故障してしまう。そこへルチアーノという男がバイクで通りかかり、車を修理してくれた。無事にホテルに到着した後、マーガレットはホテル近くの山道を散歩する。そこで彼女は、偶然ルチアーノに再会した。「ここは平和だよ、嫌になるくらい」。そう語るルチアーノは、実はかつてガザッソニカで、マドラックスと同様の仕事を生業としてきた男だった。彼はガザッソニカを離れれば、平穏な生き方が出来ると信じていたのだが、平和な毎日は彼にとって耐えられないものだった。一方、散歩から戻ってこないマーガレットを捜していたヴァネッサは、同じホテルにいたブッグワルドの重役とカロッスアを見つける。そして2人がガザッソニカに兵器を流す相談をしているのを立ち聞きしてしまった。

「でも君は俺をホッとさせる。
なぜだろうね」






翌日、最後の仕事として、ルチアーノはカロッスアを狙撃しようとする。しかしカロッスアが、たまたま通りがかったマーガレットが持つ絵本に驚愕して歩みを止めたために、弾を外してしまう。そのすぐ後、カロッスアの護衛として潜んでいたリメルダの弾丸が、逆にルチアーノを貫いた。

マーガレットは帰途につく前に、先日の山道でもう一度ルチアーノの姿を捜す。だがリメルダの狙撃で倒れたルチアーノを見つけることはできなかった。一方のルチアーノも、倒れこんだ草むらからマーガレットの姿を見つけるものの、そのまま事切れてしまった……。

COLUMN

辿り着いた先は



ルチアーノは、違う自分になれることを信じて、ガザッソニカを出て行った。血で血を洗う凄惨な国情こそが、自分を今の境遇に落とし込んだと信じていた。しかし、彼は外界があまりにも普通すぎる世界であったことに、強烈な違和感を感じる。

彼がマーガレットを癒される存在として認識するのは、無意識的にマーガレットからマドラックスの存在を感じ取り、ガザッソニカの匂いを感じ取っていたからだろう（プロゆえの敏感さか）。全てはルーツに帰結する。何もかも捨て去って出て行った故郷の先に待っていたのは、結局の所、故郷であった。

アンファンへの侵入

#10 dive

第10話「浸触　－dive－」

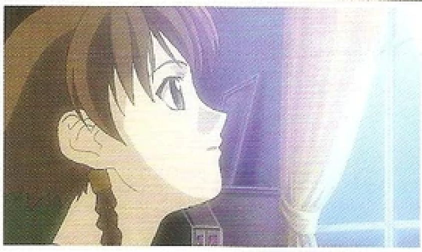
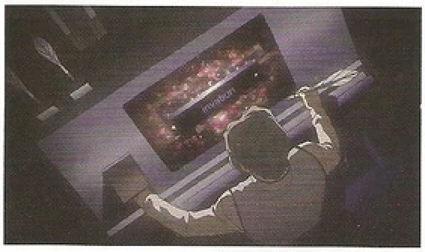
自分の会社がガザッソニカの内戦に荷担している、しかもそれにアンファンまでもが絡んでいるらしい……。ヴァネッサは、先日のホテルで聞いたカロッスアたちの会話のことが忘れられず、会社の資料を調査する。しかし何ら不審な点は見つけられない。

こうなればブッグワルドのホストコンピュータに進入し、ガザッソニカに関する証拠を捜すしかない。それもアンファンに自分たちの身元を悟られないように。この難題に挑むため、ヴァネッサは学生時代の友人であるバッジスの協力を得ることにする。バッジスは自前のスーパーコンピュータで、ブッグワルドのホストコンピュータにハッキングを開始。見事侵入に成功し、ガザッソニカに関するデータを取り出し始めた。だがすぐにフライデーがこの行為に気づいてしまった。バッジスはどうにかフライデーに逆探知される前に回線を切断したが、ガザッソニカに関するデータは、誰ともわからない人間のコンピュータに転送されてしまった。ただそのコンピュータがある国だけは判明した。ヴァネッサはデータを回収するため、その国、ガザッソニカへと直接向かうことにする。

一方カロッスアは、自分が絵本──セカンダリ──を目撃したことをフライデーに伏せたまま、独自にマーガレットとヴァネッサの調査をしていた。そしてマーガレットの家を訪れる直前、フライデーから連絡が入る。ガザッソニカにある、盗まれたデータが入ったコンピュータを回収せよ、と……。

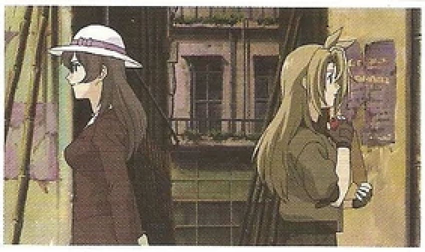




「私には、そうするだけの理由があるの」





COLUMN

電脳の戦い



市販のパソコン2300台で構築したスーパーコンピュータ「トゥルー・クラスター」。262.4テラフロップの速度で演算するという、世界で4番目に相当する速度を持つマシンだ。バッジスは、このマシンを購入するために、手持ちの特許を全て売り払ってしまったというから、一体、どれくらいの金額なのかは想像がつかない。

だが、このトゥルー・クラスターを持ってしても、ブッグワルド、ひいてはアンファンを打ち破ることはできなかった。さすが情報を武器とする犯罪組織だ。フライデーのマシンは、少なくとも世界で4番目以上の速度か？

目的はデータ回収

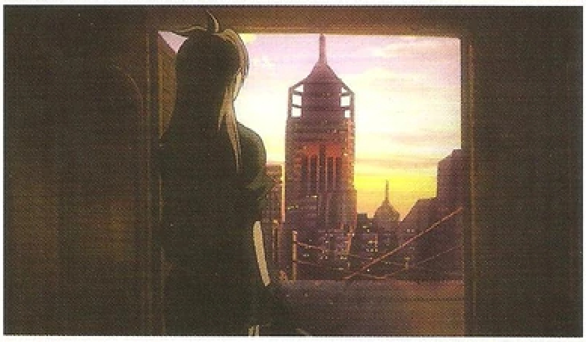
第11話「異国　－object－」

バッジスは、データが転送されたコンピュータが、ガザッソニカのどこの商店で販売されたものかまでを突き止めた。だが早くこのデータを回収しないと、アンファンの手が伸びてくるだろう。

ガザッソニカに入国したヴァネッサは、コンピュータメーカーの人間になりすまし、コンピュータの販売店を尋ねた。彼女は「故障機器を回収する」という名目で、誰が問題のコンピュータを買ったかを探る。そして問題の端末の所持者である少年、アインスに接触した。ヴァネッサはアインスの端末からデータを取り出すことに成功するが、その時ヴァネッサとアインスを、アンファンの手先の男たちが取り囲んだ。彼らはヴァネッサたちを脅迫し、データを渡すように要求。だが彼女がそれを拒否したために、男たちは銃をヴァネッサたちに向ける。しかしその時鳴り響いた銃声は、男たちのものではなかった。ヴァネッサの護衛として雇われたマドラックスの銃が、男たちを倒したのだ。

一方、ブッグワルドから盗まれたデータを追ううちにヴァネッサを発見し、ずっと彼女を監視していたカロッスアは、あることを考えていた。もしフライデーがヴァネッサのことを知ると、ヴァネッサの知人であるマーガレットがセカンダリを持っていることに、フライデーが気がつく可能性がある。そこで彼は、アンファン内におけるヴァネッサの目撃者を自らの手で殺し、データを持ち去ったのはマドラックスだと、虚偽の報告をするのだった。








「ここはガザッソニカ。
命の値段が一番安い国よ」




COLUMN

巻き込まれた少年



どうにか持ち出したブッグワルドの一部のデータは、ガザッソニカの少年・アインスのPCへと落とし込まれた。このアインス、もう「巻き添えを食った」としか言いようがないくらい気の毒だ。

折角買った新しいマシンに、自分が与り知らぬ所から、とんでもない"厄介ごと"を詰め込まれ、店で知り合った美女・ヴァネッサと、（やや一方的だが）何やらいい感じでトークをするも、突如としてアンファンの構成員たちに襲撃され、挙句には「今日のことは忘れた方がいい」などと言われ、まるで天災に見舞われてしまったかのような不幸っぷりだ。合掌……。

前進への決意

第12話「消意　－close－」

データを奪回するようフライデーから命じられたカロッスアは、リメルダにマドラックスを倒させることにする。リメルダ自身、以前に2度マドラックスを取り逃がしていたため、個人的にマドラックスと勝負をしたがっていたのだ。

その頃ヴァネッサは、マドラックスとともにガザッソニカに潜伏を続けていた。彼女は回収したデータを確認しようとするが、パスワードがかかっており、中を見ることはできなかった。マドラックスは、もしそのデータを公表したならば大勢の人間が死ぬことになり、その上アンファンは必ずヴァネッサを狙おうとするだろうと警告する。その一方でマドラックスは、王国軍の人間がなぜか自分を捜しているという情報を得て、それを迎え撃つことにする。彼女はヴァネッサを置いてひとりで外に出ると、その相手、リメルダを見つける。マドラックスとリメルダは一進一退の戦いを繰り広げるが、その決着はつかないまま終わった。

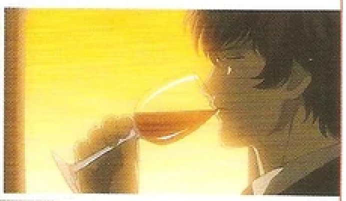
だが戦いの中で交わしたリメルダとの話でマドラックスは、データを持ち出したのがヴァネッサではなく自分であると、アンファンが勘違いしていることに気づく。そこでマドラックスはヴァネッサに、自分が彼女の代わりに狙われることによって、ヴァネッサは安全に帰国することができると語る。だがヴァネッサは帰国を拒否。あくまでデータを守り抜き、世の中に公表しようとする。

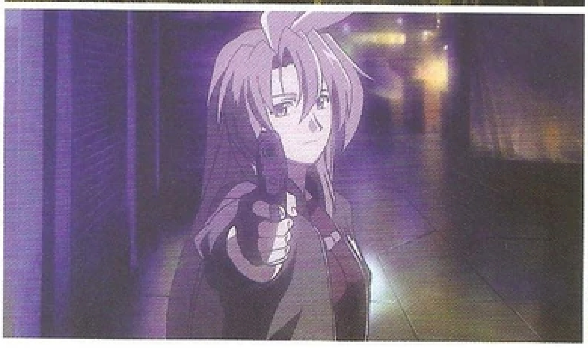
そしてその頃ナフレスでは、カロッスアがマーガレットのもとを訪ねていた。

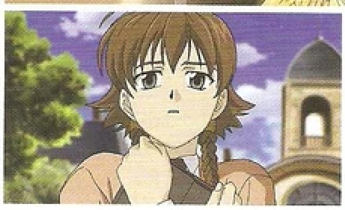





「あの中には真実があるから」



COLUMN

死の重さ



この第12話は、ヴァネッサとマドラックスが、正面から対峙する。そこでは、ナフレスで身についたヴァネッサの道徳観と、ガザッソニカで身についたマドラックスの道徳観がぶつかり合う。マドラックスがヴァネッサを守り続ける限り、人が大量に死ぬということを、マドラックス本人の口から聞き、「何でそういうことを、さらりと言えるの？」と衝撃を受けるヴァネッサ。この時点で、両者の間にある深い溝が浮き彫りになる。だが、ヴァネッサはこれでマドラックスを拒絶するわけではなく、むしろ理解しようとして対話を続ける。ここに、ヴァネッサの持ち味が出ている。

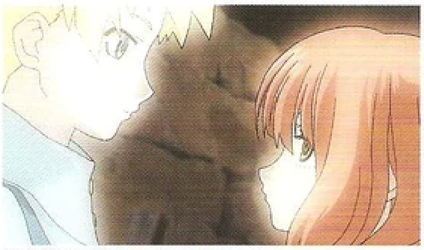
隠されていた罠

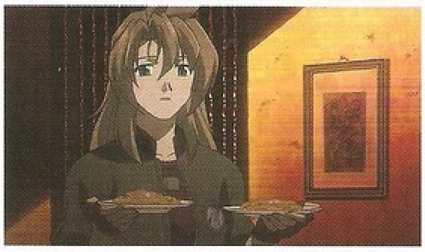
#13 awake

第13話「覚鳴　－awake－」

命を懸けてでも、データの公表をしようとするヴァネッサ。その理由を不思議に思ったマドラックスに対し、ヴァネッサは自分の過去を語り始めた。彼女の父は、ガザッソニカを担当するナフレスの外交官だった。そしてガザッソニカで内戦が発生すると、彼が内戦を誘発したとして、身柄がガザッソニカの軍部に拘束されてしまい、今は生死すらわからない。だからこそ彼女は、ガザッソニカの真実を知りたかったのだ。

一方、ナフレスでマーガレットのもとを訪れたカロッスアは、自分は「ビブリオ・ディテクティブ」のエリック・ジランに頼まれてやってきたと偽って自己紹介する。カロッスアは、自分が例の絵本を見れば何かわかるかもしれないとマーガレットに話し、本を見せてもらうことに成功する。そして、絵本が血に汚れていること、そしてページの一部が破られていることを知った。実はその血は、かつてのカロッスア自身の血だったのだ。






カロッスアは絵本をマーガレットに返すとそのまま帰っていった。だがその夜、クアンジッタに仕えている少女、ナハルがマーガレットの部屋に侵入し、絵本に手を伸ばす。するとマーガレットは眠ったままナハルの腕を掴み、こう言った。「もし持っていったら、あなたを殺すわ」。

その頃ヴァネッサはデータのパスワードを探っていたが、突然データが勝手に開かれる。そして画面に現われた文字"エルダ・タルータ"をマドラックスが見た時、彼女の様子が一変する……。





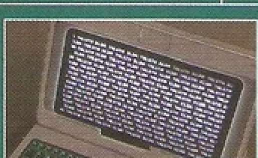




「ミステリアスだよ。君は」

COLUMN

エルダ・タルータ



フライデーにより、ヴァネッサが持ち出したデータに仕掛けられた"言響"のトラップ「エルダ・タルータ」。これは、第4話で既に登場している（ピエデリカを殺したアンヌが口走っている）。作中で、エルダ・タルータは「目覚めの言葉」という定義となっている。つまり、内に秘めた衝動を顕在化させる言葉だ。

ちなみに、第8話でエリックがクアンジッタから聞いた「サークス・サーク」は本質の言葉。これにより、エリックは自分の本質を思い出してしまう。

このことからも、エリエス文字とは不可思議な力を持つ言語であるといえる。

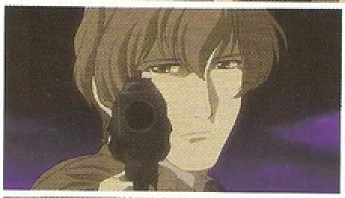
忘我からの覚醒

第14話「忘想　―memory―」

“エルダ・タルータ”の文字を見て錯乱した後、平静を取り戻したかのように見えたマドラックス。しかし彼女は幼い少女のような言動でヴァネッサを困惑させ、しかもエージェントとして生きてきた記憶を失っているようだった。そしてヴァネッサが眠っている間にひとりで夜の町にさまよい出てしまう。ヴァネッサはどうにかマドラックスを探し出したが、そこで2人の前にリメルダが現われた。リメルダは「マドラックスは死んだか、あるいは生きていたとしても以前の彼女ではなくなっている」とカロッスアから告げられ、マドラックス捜索中止を告げられていた。しかしそれに納得できず、こうして確認しにきたのだ。リメルダはマドラックスに銃を向けた。ヴァネッサは怯えるマドラックスを庇い、彼女を守ろうとする。その姿がマドラックスの中で、かつての自分の父の姿に重なる……。その時突如マドラックスは正気に戻った。自分を取り戻した彼女は、機敏な動きでリメルダの銃を奪う。だが彼女を殺すことはせず、そのままリメルダを逃がした。

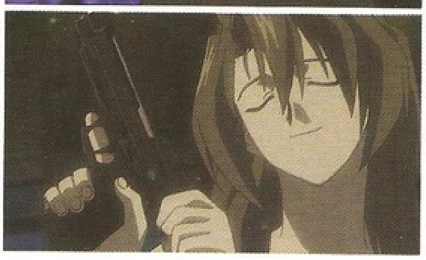





「赤い靴、どこかにいっちゃった」

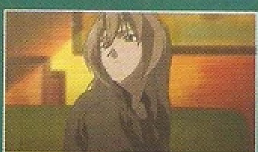


一方ナフレスでは、カロッスアが再びマーガレットに会っていた。彼は、本を狙っている者がいるから危険だと警告する。だがマーガレットは本を手放すことを拒否する。そこでカロッスアは、自分が何とかしようとマーガレットに言う。エリノアはそんなカロッスアのことを疑っていたが、本を狙う人物は確かにいた。しかしその人物、ナハルは、マーガレットのことを「資質がある」として、本を狙うことを放棄する。

COLUMN

マドラックスの内面？



目覚めの言葉である「エルダ・タルータ」により、異変をきたしたマドラックスだが、暴力的な行為に及んだりするというわけではなく、むしろ大人しくなってしまった。これは、マドラックスの内面には、こういう女の子っぽい一面が隠されていたということなのだろうか？　もう一歩踏み込んで考えると、これにはマーガレットとの関係性もあるかもしれない。

それにしても、このマドラックスの甘えっぷり。今までのマドラックスから考えると、相当なギャップであり、なかなかに新鮮な姿だ。本人は「ありえない」と言っているが、これはこれでアリかも？

暴かれる事実

#15 camouflage

第15話「偽争 −camouflage−」

アンファンにはヴァネッサのことを知られたくなかったカロッスアだったが、リメルダの報告を通し、フライデーにヴァネッサのことが知られてしまった。だがフライデーは、ヴァネッサよりもマドラックスに興味を抱く。彼女がフライデーのしかけた、第一の絵本ファーースタリによる攻撃“エルダ・タルータ”をしのいだからだ。フライデーは、マドラックスがセカンダリのありかを知っていると考えるようになった。

そのマドラックスには幼いころの記憶がなかった。だが彼女は、“エルダ・タルータ”という言葉の洗礼を受けた時、断片的にだが過去の記憶がよみがえっていた。そこでマドラックスは自分の過去を知るため、あえてもう一度“エルダ・タルータ”の洗礼を受けることを決意する。彼女はヴァネッサの制止も聞かず、例のファイルを開いた。







「そう…全ては、偽り」








“エルダ・タルータ”が見せる混濁とした幻覚の中で、少女レティシアに会い、不思議な感覚に陥るマドラックス。そして彼女が現実世界に引き戻された時には、ヴァネッサがブッグワルドのホストコンピュータから入手したファイルを調べていた。ファイルに仕掛けられていたパスワードが自然と解除されたのだ。

一方、ナフレスでは、カロッスアの言葉を警戒したエリノアに守られながら、マーガレットは無事に生活していた。しかしマドラックスが倒れたその時、マーガレットも突然倒れてしまい、不思議な幻覚を見た。

COLUMN

過去の断層



再び「エルダ・タルータ」を受け止めて、自分が何者なのかを知ろうとするマドラックス。ここでマドラックスの眼前にレティシアが現れる。レティシアは、マドラックスが迷い込んだ場所を「普通の場所」「ここにはね、真実があるの」と説明する。

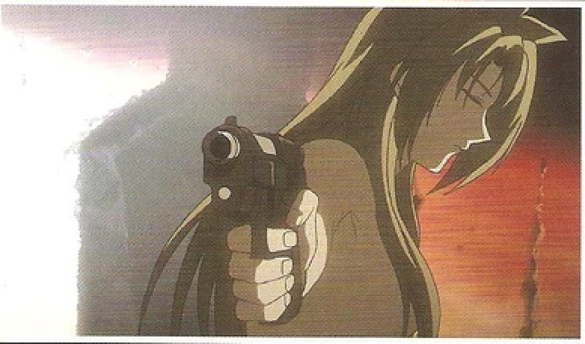
これは、12年前の事件があった場所を意味するものだと思われるが、正確にトレースされた場所というよりかは、むしろ抽象的な描き方をしている。それはやはり、まだマドラックスの記憶が、断片的な繋がりしか持っていないからだろうか？　そしてマーガレットもまた、マドラックスと近い感じ方をしている。

狭まる包囲網

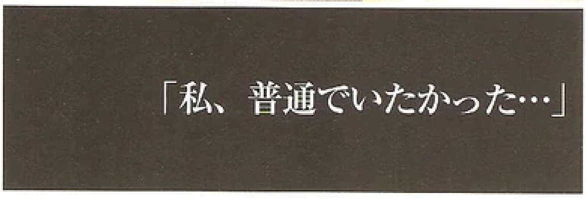
第16話「銃韻 －moment－」












ブッグワルドのファイルには、ガザッソニカ内戦のからくりが秘められていた。この資料によると、アンファンは王国軍とガルザの双方に武器を流していた。だが驚いたことに、武器売買で利益を得ようというのではなく、なぜか双方に無償で提供をしているのだ。なぜアンファンはそんなことをしてまで、内戦を続けさせるのか？　それには何か理由があるはずだ、とヴァネッサは考える。

一方マドラックスは、もしこの話が本当なら、今までガザッソニカで戦ってきた自分の人生は何なのかと考え始めた。そこで彼女は、ナフレスの情報機関にこのデータを渡すことを提案。ヴァネッサも賛成し、情報員と会いに行くマドラックスについて行く。ところがそこにはアンファンの罠が仕掛けられており、マドラックスたちは捕らえられてしまう。マドラックスはフライデーの前に連れて行かれ、セカンダリの場所を尋ねられるが、彼女はそれに答えない。失望したフライデーが去った後、マドラックスとヴァネッサにアンファンの兵士が襲い掛かる。しかし、マドラックスは華麗に反撃を開始し、ヴァネッサも、彼女を援護するために銃の引き金を引いた。

一方、ナフレスではマーガレットがカロッスアに会いに行っていた。そして、自分が見る不思議な夢について彼に相談する。以前マーガレットから、自分は過去の記憶がないと知らされていたカロッスアは、夢はその失われた記憶ではないかと話す。だがそうは言いながらも、カロッスアは、その夢はセカンダリの影響に違いないと考えていた。

COLUMN

仕組まれた内戦



前回のマドラックスによる試みにより、データの中身が表出し、ガザッソニカで行われている内戦が、アンファンによって仕組まれたものだということがハッキリとする。それによると、アンファンは政府軍、ガルザ双方に武器を無償提供しているばかりか、人員まで送り込んでいる。まず驚かされるのが、アンファンの資金力。武器を買いつけて、それをタダでばら撒く行為は余程の金がなければ到底無理。また、双方の主だった高官ポストを押さえられるということは、人材の層も厚い。改めて、アンファンという犯罪組織が、ただの犯罪組織ではないことがわかる。

そして舞台に役者は集い

#17 reunion

第17話「殺那 －reunion－」

アンファンの罠からいったん逃れたマドラックスとヴァネッサ。彼らは非武装地帯に抜けようとするが、王国兵士に呼び止められて尋問を受ける。そしてその時、自分たちに王族殺しの嫌疑がかけられていることを知る。そこから逃れ、一度自分のアジトに戻ったマドラックスは、幼い頃から持っていた絵本の切れ端を回収し、さらに逃亡を図ろうとする。しかし検問突破に失敗し、まさに捕らえられようとしていたその時、意外な人物がマドラックスを助けた。リメルダだ。「あなたを殺すのは私だもの」。そういうリメルダに対し、マドラックスは、ガザッソニカの内戦はアンファンに仕組まれたものだと説明し、彼女に例のブッグワルド社のデータを渡した。

一方、マーガレットも、ヴァネッサが置かれている状況をテレビのニュースで知る。そこへバッジスが訪ねてきた。バッジスは、ヴァネッサは自分の会社の不正を暴こうとしていたが、会社がアンファンと繋がっていたため、罠にはめられて王族殺しの犯人にされたのだろうと話す。そこでマーガレットは、ガザッソニカに行ってヴァネッサを救出することを決意。エリノアも彼女と行動をともにすることに。さっそく旅支度をして出かけていく彼女たちは、空港で待ち受けていたカロッスアと会う。カロッスアは、2人と同じ飛行機に乗り、いっしょにガザッソニカまで向かう。

そして3人はガザッソニカに入国。到着して間もなく、マーガレットたちの車と、マドラックスたちの車がすれ違っていく。だがこの時は、お互い相手に気づくことはなかった……。











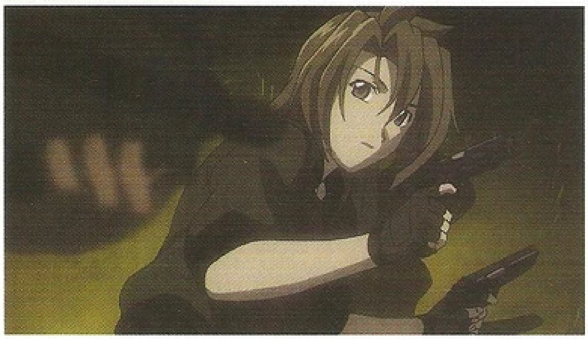


「人が死ぬのは、
生きるのに失敗したから」











COLUMN

ドライなプロ精神



「命が惜しいのでね」。孤児であったマドラックスを引き取り、施設で様々な技術を叩きこんだSSS（スリースピード）だが、いざ自分に危害が及びそうになると、アッサリとマドラックスを切り捨ててしまう。危険な仕事をこなす人間の冷徹な計算であり、情を挟むことが命取りだということを理解しているからこその行為だ。

だが、マドラックスも、そんなSSSの言葉を平然と受け止める。彼女もまた、その点は暗黙の内に了解していること。そして、「また君と仕事がしたいな……死ぬな」というSSSの言葉も、単なる慰めではなく、本音の部分なのだろう。

対面する2人

第18話「双離　－duo－」

マドラックスから渡されたデータを見て、この内戦に大きな疑念を抱いたリメルダは、迷った末に軍の上官にこのことを打ち明ける。だがその上官はすでにこの事実を知っていた。それどころか、そのまま命令に従って生きていけばいいとリメルダに語る。そんな上官を、リメルダは射殺する。その後、リメルダはカロッスアの前に姿を現わした。彼がアンファンの人間だということに気がついたからだ。リメルダは、アンファンの目的をカロッスアに問いつめるが、カロッスアは答えようとしない。そんなカロッスアに銃を向けるリメルダだったが、まだ情を残していたために、結局は殺さずにその場を立ち去った。

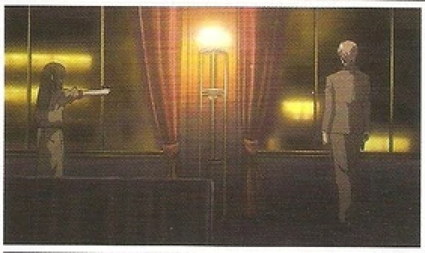
そして今度は、マドラックスを探し始める。リメルダにとって、もはや信じられるものは何もない。ただマドラックスという好敵手の存在だけが確かなものなのだ。だから自分の手で、マドラックスを殺す。彼女はそう考えたのだ。

そのマドラックスは、自分が持っている絵本のページに書かれた文字について調べていた。図書館に忍び込んだマドラックスはエリエス文字の資料を発見するが、そこにナハルが現われた。彼女は、マドラックスには「資質がない」として彼女を攻撃し、追いつめる。だがその場に偶然マーガレットが現わると、ナハルはその場を去っていく。そこでマーガレットは、ヴァネッサとともに指名手配されていた人物が、このマドラックスだということに気がついた。









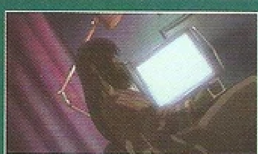




「私はこれ以上踊らされたくないの。
この国にも…あなたにも」

COLUMN

周囲の景色の崩壊



もし、あなたが当たり前だと思っていた生活が、一瞬の内にまやかしだと知ってしまったらどうなるか？　あったはずのものが無かった、無かったはずのものがあった。この劇的なまでの状況変化に、リメルダも戸惑い、悩んだ。

だが彼女は、自分が自分であるということを、マドラックスによって見出す。マドラックスと戦う時こそ、この世に自分が存在する証であるということを。

ここからリメルダは、よりピュアな動機によってマドラックスを追跡することになる。その姿は、執拗と言うよりも、むしろ健気ですらある。

再びドアイホ村へ

第19話「獲本 －holy－」

マドラックスに案内され、ついにマーガレットとエリノアは、ヴァネッサとの再会を果たした。ヴァネッサは、自分は真実のために戦い続けるので、自分のそばにいれば危険だとマーガレットに告げる。そうして彼女をナフスに帰らせようとするが、マーガレットはこれを拒んだ。この時マドラックスは、ヴァネッサとマーガレットの会話から、アンファンが狙う本をマーガレットが持っていることに気がついた。そこで彼女は、なぜアンファンが本を狙っているのかを探るため、以前彼女がエリックと行ったドアイホ村で、本について調べることを提案。マーガレットたちもそれに同行する。だがそんな彼女たちを傭兵が追跡してきた。マドラックスはマーガレットたちを置いて迎撃に向かうが、そのすきにマーガレットたちに敵の手が迫る。マドラックスは必死に駆け戻るが、間に合わない……！　だが、マーガレットたちは、そこに現れたナハルに助けられた。ナハルによって一行はクアンジッタの元に案内され、マーガレットの本についての説明を受ける。彼女によると“ファースタリ”“セカンダリ”“サースタリ”の3冊の本があり、マーガレットが持っているのはセカンダリである。そしてアンファンがファースタリを持っており、クアンジッタ自身はサースタリを持っている。この3冊が揃えば“扉”を開くことができ、そこには人間の本質が存在するというのだ。

そしてその頃、カロッスアはフライデーを撃ち、ファースタリを手に入れていた……。











「あなたは来るわ。
自分が誰かを知るために」




COLUMN

扉の向こう側



遂に3冊の本が揃い、扉を開く準備が整った。その先に待っているのは、本質の世界だという。何故この扉が存在するのかということについては、不明ということになっているが、少なくとも、本質を求めようとした結果の末に生まれたということは確かだろう。

この「本質を求める」という行為。これが是か非かは議論の分かれる所だと思う。本来の自分を取り戻すということは、実に自然な成り行きであるとは思う。しかし一方で、それを欲していない人間にとっては、単なるエゴでしかない。本質というものは、単純な物差しでは測れないものだ。

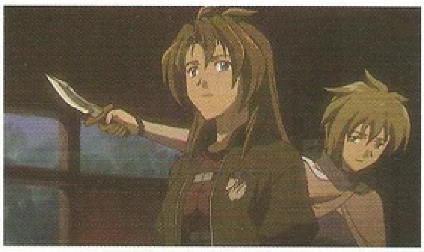
揃った3冊の本

第20話「真争 －wish－」

クアンジッタによると、12年前、フライデーは3冊の本を集めて扉を開いた。それによってガザッソニカの内戦は始まったという。ヴァネッサは、フライデーが何を求めて扉を開けたのか疑問に思う一方で、自分の父親に何があったかを知るため、扉の向こう側を見てみたいと考える。マーガレットも、自分の失われた過去を取り戻すため、ファースタリを手に入れて扉を開くことを決意した。

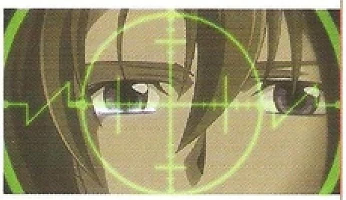
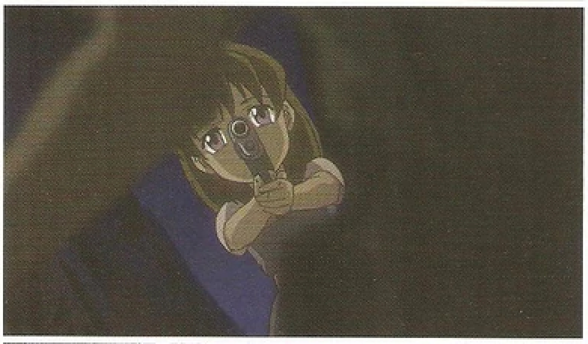
その夜、マドラックスはクアンジッタに頼み、サースタリの中を見せてもらう。それと同じころ、別の場所でマーガレットがセカンダリを開くと、マドラックスとマーガレットには共通したひとつのイメージが流れ込んできた。そのイメージの中には、マドラックスとマーガレットの2人が同じく「お父さん」と呼ぶ人物がいた。そしてその人物は、幼いマーガレットの目の前で、幼いマドラックスに撃ち殺されるのだった……。



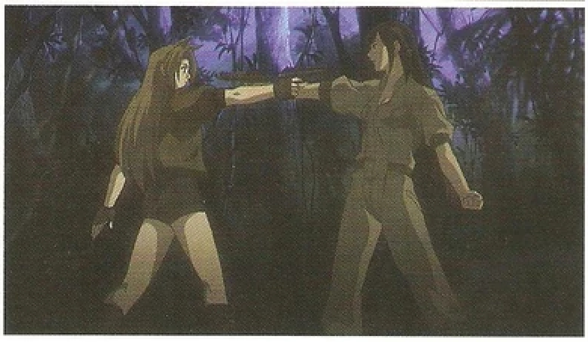



その時、現実世界に引き戻されたマドラックスを、リメルダが襲ってきた。それによってマドラックスは負傷してしまうが、マドラックスを助けに現われたヴァネッサの銃弾で、リメルダ自身も負傷して一時引き上げていく。

「優しい人…あなたは優しい人殺し」

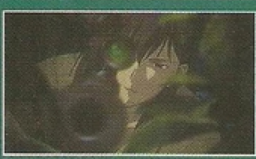

一方マーガレットの前には、ファースタリを持ったカロッスアが現われた。彼は、12年前に失った自分の記憶と真実を取り戻したいと語り、ファースタリをマーガレットに託した。これを使って扉を開き、自分を連れて行ってほしいというのだ。


ここに、ついに3冊の本が揃った。そしてマーガレットは、クアンジッタに扉を開くように頼む。

COLUMN

自分を感じるために



自らをマドラックスによってどうにか繋ぎ止めたリメルダは、マドラックスの足跡を辿り、遂には再び対決することになる。このエピソードでリメルダが語る「それでこそあなた、だからこそ私」という台詞。これはまさにリメルダがマドラックスのことを、アイデンティティとして取り入れたことを表している。

同時に、(以前からだが) 彼女のことを高く評価し、それに追いすがろうとする自分もまた高みへと登ろうという意識も感じられる。ターゲットとなった相手からすればはた迷惑な話だが、こうすることだけが、リメルダに残された生き方だった。

カロッスアとプゥペ

第21話「告薄 －guilty－」

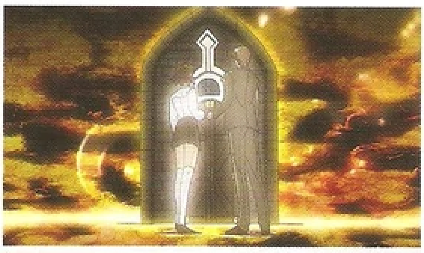
ともに12年前に失われた自分の過去を知りたいと望み、真実の扉を抜けて進んで行くマーガレットとカロッスア。その行く手に現われた扉を開けようとするカロッスアだが、レティシアの制止を感じ取ったマーガレットはそれを止めようとする。しかしカロッスアはその制止を振り切り、扉を開ける。

そこに広がっていたのは12年前のイメージだった。その時、幼いプゥペとマーガレットは同じ飛行機に乗っていた。だがフライデーが使った3冊の本の力に巻き込まれ、飛行機は墜落してしまう。その事故で生き残ったのはプゥペとマーガレットだけだった。

プゥペはマーガレットを連れて安全な人里まで逃れようとするが、内戦が勃発したために、2人は戦禍の中をさまよい歩く。そして放浪の中、とある場所で、マーガレットは、父の姿を発見した。だがその時、マーガレットの父は、フライデーに銃を向けていた。マーガレットが父親の元に駆け寄っていこうとする時銃声が響き、マーガレットをかばったプゥペに命中した……。

カロッスアは12年前に死んだプゥペの生み出した存在、それが真実だったのだ。本の力で現在までこの世に存在できたカロッスアだが、彼が真実を知ったことにより、それも終わりを告げた。だがカロッスアは満足そうに、傍らで眠る現在のマーガレットに寄り添い、事切れた。

その2人と、かたわらに散らばる3冊の本を、カロッスアに殺されたはずのフライデーが見下ろしていた。










「たとえ命を落としても、
僕は君を守りたかった…」

COLUMN

結合する因果



ここでようやくプゥペ、そしてカロッスアというキャラクターが何者なのかがハッキリと描かれる。カロッスアは、プゥペの「マーガレットを守りたい」という意識が生んだ存在だったわけだ。

このプゥペという少年。今までは単に「どんよりとした表情のキャラクター」程度にしか見えなかったが、このエピソードでその認識が一変してしまう。レティシアの前からは姿を消すことになるが、カロッスアを通して、改めて自分の気持ちに正直になれたことは、幸福だったと思われる。それは、カロッスアが見せた最後の穏やかな表情からも感じる。

ヴァネッサとの別離

第22話「撃情　－rage－」

扉を抜けた後、どこか見知らぬ場所にマーガレットは倒れていた。彼女のそばに落ちていた3冊の本は、そこにやって来たフライデーの手に落ちてしまう。そして起きあがったマーガレットは、ふらふらとガザッソニカの森林の中をさまよう。









リメルダに撃たれた傷から回復したマドラックスは、マーガレットの存在を感じ取って、エリノアとヴァネッサを連れて出発する。マドラックスが王国軍とガルザの双方と戦っている間に、マーガレットを捜すエリノアとヴァネッサだが、森の中ではぐれてしまう。その時、ヴァネッサの前にフライデーが現われた。ヴァネッサは、なぜこの内戦を起こしたのかとフライデーに問いかける。すると彼は、人々の純粋な衝動がこの内戦を生み出したのであり、ヴァネッサの親は愚かにもその衝動に抵抗したのだと答えた。フライデーが自分の両親を殺したと知ったヴァネッサは逆上し、フライデーに銃を向ける。その場にマドラックスもやってくるが、その時、マドラックスを狙うリメルダの銃弾が飛んできた。ヴァネッサはマドラックスを守るために応射、リメルダはその銃弾を受けて谷に落ちていった。だがヴァネッサもリメルダの銃弾を受け、倒れてしまう。そしてその光景を、マーガレットが見てしまった。ヴァネッサも自分の父も、ともにマドラックスが殺したのだと思い込んだマーガレットは、ヴァネッサの銃を手に取り、マドラックスへ向けて引き金を引いた。







「死なないでね。
マーガレットの事、頼むわね」









COLUMN

友を想う気持ち



前のエピソードでカロッスアがいなくなり、このエピソードでヴァネッサも舞台から姿を消してしまう。それも、マドラックスを庇って、命を落としてしまうという、他者を慮るヴァネッサらしい最期だ。

そして、死んだ後でも、マーガレットやエリノア、そしてマドラックスを思いやるヴァネッサ。ここに、彼女の深い優しさが表れている。

ヴァネッサは、一貫して自己犠牲の精神を持っていた。実質的には関係の無いガザッソニカの内戦を止めようとしたのは、両親のこともあるが、心底に秘められていた温かい気持ちによる所も大きいと思われる。

激戦地を越えて

第23話「迷心 －doubt－」

ヴァネッサの遺体を発見し、悲嘆に暮れるエリノア。彼女がその遺体を葬った所に、マーガレットに撃たれたはずなのになぜか傷ひとつないマドラックスが現われた。マドラックスは、マーガレットがフライデーに連れ去られたことをナハルから聞いていた。マーガレットを守ることをヴァネッサに約束していたマドラックスは、マーガレット救出に向かい、エリノアもついて行くことにする。2人は王国軍の攻撃を受けながらも、巡視艇を奪って川を進む。マーガレットを救出するため必死なエリノアも、巡視艇の機関銃で応射して戦った。

上陸してから夜に入って休息中、エリノアはマドラックスの名の由来を彼女に尋ねた。するとマドラックスは、記憶をなくした時、唯一彼女が覚えていたのが“マドラックス”という言葉だったと答える。マーガレットも12年前に飛行機事故から生還した時、“マドラックス”という言葉だけを覚えていた。マドラックスとマーガレットにはどんな関係があるのか？

一方、巡視艇が奪われたという報告を無線所で聞いていた兵士の元に、リメルダが現われた。ヴァネッサに撃たれたリメルダだが、まだ死んではいなかったのだ。彼女は自分の銃を、無線所の兵士たちへ向ける。

そしてそのころマーガレットは、なぜかフライデーの元で、彼のことを「お父様」と呼ぶようになっていた。そして、マドラックスを待つフライデーに、「その子のこと嫌いなの。だから殺しちゃっていいよね？」と尋ねるのだった。

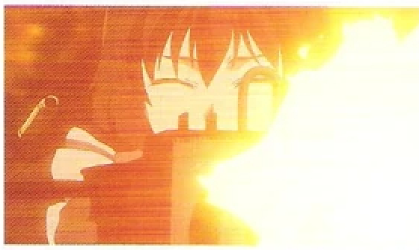






「私の意志で選んだ、私だけの真実」








COLUMN

狂気と慈愛



レティシアがマドラックスを指して「あなたは狂気の中にある慈愛……優しい〝人殺し〟……」と表現する。殺伐とした響きのある「狂気」という言葉だが、そんな狂気の中にも、慈愛というものは存在する。それはまさに、自分が大切に思っている人を守るマドラックスの姿に他ならない。

それがあらゆる状況下で通る論理とは言わない。大切なものを守る為なら、何でもアリかと問われれば、確かにそれは素直に頷けない。だが、少なくとも当の本人にとっては、善悪では測れない、決して譲れないものがある。故に、「狂気の中でこそ発露する慈愛」なのかもしれない。

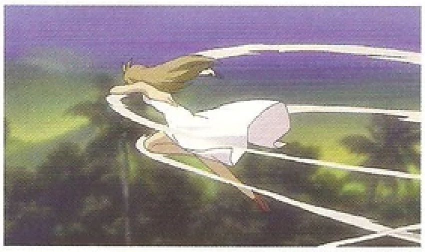
愛を示す

第24話「献心　－hearts－」

エリノアと別行動を取り、王国の部隊との戦闘に向かうマドラックス。彼女はたったひとりで王国軍の部隊を壊滅させるが、そこに新たな敵が姿を現わす。リメルダだ。お互いの銃を交換し、決闘のように向き合って撃ち合うマドラックスとリメルダだが、双方の弾丸は一発も当たらない。リメルダはこの戦いで自分を殺してほしかったのだが、マドラックスは自分を記憶していてくれる存在がほしかった。だからマドラックスは、リメルダに「私を忘れないで」と言うと、その場を立ち去った。

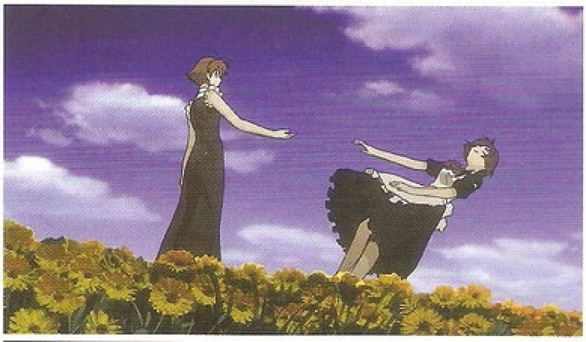
一方エリノアにも兵士の追っ手が迫っていた。逃げる彼女だったが、追い詰められた末に、撃たれて崖から落ちてしまった。それでも、ボロボロになりながら、エリノアはマーガレットのいる花畑へと辿り着く。彼女は、ナフレスへ帰ろうとマーガレットに語りかける。たとえ記憶が戻らなくても、2人で平穏な暮らしができればそれでいいと言う。だが、そんな生活に意味はないとマーガレットは答えた。そしてそこにフライデーが現われた。マーガレットを返すようフライデーに要求するエリノアだが、逆に“目覚めの言葉”の洗礼を受けてしまう。エリノアは自分を見失いかけるが、なんとかそれを乗り越える。その姿を見たマーガレットは正気に戻り、エリノアに応えて手を伸ばすが、その手が届かないうちにエリノアは倒れた。彼女は、ここに着くまでに死に至るような深手を負っていたのだ。

後から遅れてマドラックスはその場に辿り着く。しかしその時、エリノアの命の灯は既に消えてしまっていた。








「それが私の、願いですから」




COLUMN

家族



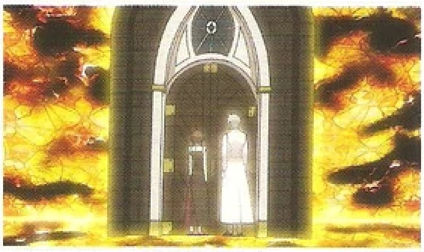
『MADLAX』ファンの中でも、「感動した」という声の非常に高いこのエピソード。傷ついても、ただひたすら戦地を駆け抜けたエリノアが、フライデーによって押さえ込んでいたマーガレットに対する複雑な感情を引き出されても、マーガレットに「あなたは私の家族です」と告げてこの世を去るという、「献心」というサブタイトルに相応しい内容だ。

親が子を殺し、子が親を殺すということも罷り通る人間社会。血の繋がりだけが、果たして家族と言えるのだろうか？　マーガレットとエリノアのように、絆で結ばれた家族というのも存在すると信じたい。

本質の世界

第25話「聖血 －saint－」



フライデーに銃を向けたマドラックスだが、そのマドラックスにマーガレットが銃をかまえる。彼女は何度も何度も引き金を引き、マドラックスは倒れる。フライデーは彼女からセカンダリのページを回収すると、マーガレットを連れて去った。

フライデーはついに3冊の本を揃え、マーガレットとともに真実の扉を開いた。そこでマーガレットは、12年前の真実を知った。飛行機事故のためにガザッソニカをさまよった時、自分の父を見つけてからのことを……。

プゥペが倒れた後、マーガレットは父との再会を果たした。だがその時、フライデーが"エルダ・タルータ"の言葉を使ったのだ。その言葉を聞いて錯乱した父は、マーガレットに銃を向けて迫ってきた。それに怯えて倒れたマーガレットの手が、落ちていた拳銃に触れた。自分の身を守りたいという本能と、自分の父親を撃ちたくないという理性。この2つの相反する感情に揺さぶられたマーガレットは、ついには本の力によって、その存在が2人に分かれてしまった。そこで生まれたもうひとりのマーガレットがマドラックスだ。さらにその2人の分かれ目としてレティシアが誕生した。これが真実だったのだ。




「12年前から停まっていた
私の時間が、遂に動き出した！」







その後フライデーは、本の力を解放する。空には赤い月と蒼い月、2つの月が浮かび、本能と衝動に駆られた人々は互いに殺戮を始めた。狂喜するフライデーの前に、マドラックスが現われた。

COLUMN

目の前にいる自分



扉を開いてしまったマーガレットは、そこで12年前の真相を知ることになる。マドラックスは、マーガレットが父親を殺したという事実を忘れる為に生まれた存在であり、その分岐点に立つ存在として、当時持っていた人形がレティシアへと変化した（レティシアは、12年前に打ち込まれた楔のような存在）。ここでマーガレットは、過去の自分と向き合うことになる。

真実というものは、時として残酷な結果を見せつけることになる。だが、その真実を受け入れてこそ、前へ進むということもある。マーガレットは、突きつけられた真実によって大きく揺れ、そして……。

全てはひとつへ

第26話「欠片　－pupil－」

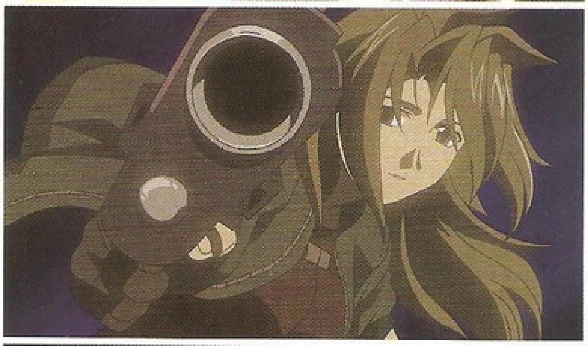
マドラックスは、自分とレティシアを受け入れるか、それとも消すかを選ぶようマーガレットに話しかける。それに対して、マーガレットが選んだのは前者だった。自分が真実から逃げたせいで、ヴァネッサもエリノアも死ぬことになってしまった。だからもう真実から逃げることはしない。マドラックスだけに罪を押しつけることはしない、と。





マドラックス、レティシアと融合し、ひとつの存在になったマーガレットは、フライデーに銃を向けた。フライデーは、人間が本能や悪意をむき出しにした世界こそ純粋な世界であり、罪という概念は偽物だと考えていた。だがマーガレットは、フライデーに対する殺意を、自分自身――マドラックスではなくマーガレット・バートン――の罪として背負っていくとし、銃の引き金を引く。





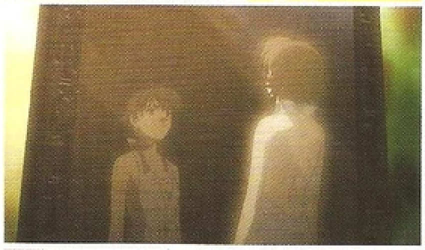


その瞬間、フライデーは真実の扉の前から、現実世界に引き戻された。そこに、マーガレットと融合したはずのマドラックスが現れ、そして今度こそ、フライデーを撃ち抜いた。





ひとつになったはずのマーガレットたちだが、ふたたびマドラックス、レティシアの存在に分かれたのだ。マーガレットは、ひとつになる必要はないとマドラックスに言った。マドラックスとして生きてきた12年は、マドラックスだけのものなのだから。そして、12年間真実のはざまに孤独に生き続けてきたレティシアを、自分の妹として連れて行くことにする。善意と悪意を自分の中に抱えたまま、この歪んだ世界で生きて行こうと、彼女は決意したのだった。









「だって、
あなたの中に私がいるから」

COLUMN

人と人の繋がり



マドラックス、マーガレット、レティシアは、お互いを受け入れ、「12年前にできなかったこと」を成し遂げた。そして物語の最後、マーガレットとレティシアに別れを告げ、「歪んだ世界」で生きる決心をしたマドラックスは、リメルダと共に旅へ出る。そして、SSSから依頼の電話がかかり、こう彼に語る。「だって、あなたの中に私がいるから」。人はひとりで生きているわけではない。この世界には多くの他者がいる。集団の中にあっての個人なのだ。生きるということ、それは、他者を自分の中に受け入れるということでもある。そうやって人は人と繋がる。

ガザッソニカ王国年次報告書

～明るい未来の為に～

作成・国土情報省

1・我が国の概況

本報告書は、ガザッソニカ王国国民に我が国の現状を広く周知し、国家繁栄の一助とすべく作成されたものである。

我が国の正式名称はガザッソニカ・コースラン王国と云い、現在の国家元首は国王コースラン四世である。政体としてはいわゆる立憲君主制を採用しており、国王及び国民の地位はガザッソニカ王国憲法により規定される。

国教は存在せず、国民には憲法の規定に基づき信仰の自由が認められている。国軍としては陸・海・空の3軍が設置されているが、総兵力の大半は陸軍が占めている。また、3軍とは別に王室直轄の親衛隊があり、首都ダマン及び要人の警備にあたっている。

諸外国との関係はおおむね良好であり、近隣国との国境紛争等は発生していない。ただし、現在我が国は非合法の武装勢力による破壊活動にさらされており、このため友好国からの軍事的な指導・支援を受けている。

主要な産業は観光及び農業・水産業であり、経済全体に占める第2次産業の割合は極めて少ない。近年では優遇税制を背景にした外国からの投資が急増しており、第４の主要産業として金融業の発展が期待されている。

正式名称	ガザッソニカ・コースラン王国
人口	2454万人
国土	南北長　1850km 東西幅　930km
国軍	約92500人 （陸・海・空軍、親衛隊総計）
国家元首	コースラン四世

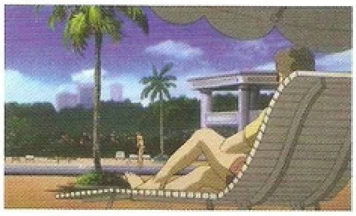
2・我が国の主要産業

a・観光事業

観光事業は我が国における最大の外貨獲得手段であり、政府としても最重点産業と認識して振興に努めている。

我が国は元来観光資源に恵まれているが、非合法武装勢力・通称ガルザ（以下、ガルザと呼ぶ）が武装蜂起して以降、外国からの観光客数は著しく減少した。これは外貨獲得手段を観光に頼る我が国にとって深刻な問題であり、経済全体を活性化させる上でも観光事業の立て直しが急務となっている。

観光事業の振興において最重要の課題は、観光客の安全確保である。これについては、首都ダマンにおけるガルザとの不戦協定が成立し、また協定が順守されていることから、近年において観光客数は回復傾向にある。





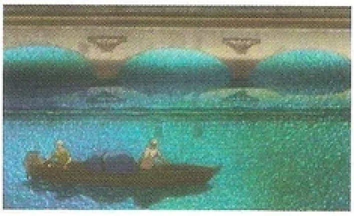
ダマン以外への観光客立ち入りは当面困難であることから、振興の大半は都市滞在型リゾートの整備に向けられている。その中心となるのは高級リゾートホテルの建設で、安全快適な「常夏の楽園」として外国客の誘致に努めている。また、ホテル内でのカジノ営業や、ドッグ・レースの開催を認めており、これらの収益が外貨獲得に大きく貢献している。

b・農業および水産業

農業と水産業は現在でも我が国の主要産業であり、ダマン以外の地域において農業は最大の産業となっている。

我が国における農業は、その大半が手作業による伝統的な稲作・畑作であり、機械化された近代的農法は普及していない。収穫量の大半は国内で消費されており、輸出される農作物はごく一部である。

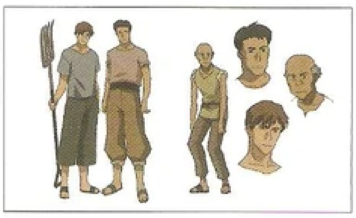
近年、近隣アジア諸国の一部が食糧輸出国から輸入国に転じており、世界的に見た食糧事情は非常にタイト化している。農業の重要性は増しており、大規模な輸



出をにらんだ農作業の近代化・収穫量の増大が望まれている。しかし、農村地帯ではガルザとの戦闘が激しく、当面近代化の推進は困難な状況である。

一方、我が国は長い海岸線を有することもあり、水産業も主要産業の地位を占めている。その中心はエビの養殖であり、大半が日本に輸出されて、観光に次ぐ外貨獲得手段となっている。

漁業については小型船による沿岸漁業が中心であり、漁獲量の多くは水揚げ地周辺で消費される。一部は、ダマンに水揚げされ、ダマン居住者及び滞在観光客向けに取引されている。



3 我が国の抱える課題

a・内戦の早期解決





ガルザとの内戦は13年に及んでおり、我が国最大の懸案事項となっている。この間、和平のため数度の話し合いが行われたが、ガルザ側が強硬な姿勢を崩さないこともあり、合意には至っていない。昨年には陸軍司令官グエン・マクニコルがガルザの狙撃により命を落としており、こうしたガルザの行為が我が国の平和と発展を阻害していることは明らかである。

政府としてはガルザ側の不法行為を決して容認するものではなく、ナフレスをはじめとする友好国の協力を得ながら、ガルザ鎮圧に全力を注ぐ基本姿勢に変わりはない。しかし、内戦の早期解決が我が国の発展に不可欠であることも認識しており、安易な合意は避けつつも、今後も和平に向けた交渉をねばり強く続けていく方針である。

b.インフラの整備



内戦の影響により我が国のインフラ整備は大幅に立ち後れており、政府では首都ダマンを対象にしたインフラの重点整備に努めている。

ダマン中心部においては、建築物の近代化、及び道路・港湾等の整備が急ピッチで進められている。現在、都心部の整備はほぼ完了し、残る周辺部の整備が課題となっている。



産業振興の上でも市民生活を営む上でも、情報通信環境の整備は必要不可欠であることから、この分野への投資は最重点で行われた。現在ではダマン市全域で広帯域無線通信システムが稼働しており、市内のいかなる場所においても、パソコン、携帯電話等を使った高速大容量の通信が可能となっている。今後はダマン市以外のエリアの整備が課題である。

c・地域間格差の解消

首都ダマンの整備が進む一方で深刻化しているのが、地域格差の拡大である。ひとつにはダマンとその他の地域における格差の拡大であり、農村地帯のインフラ整備は手つかずの状態となっている。この地帯でのインフラ整備には全面的な停戦が不可欠であり、目下のところ内戦問題の解決を待つしかない状況である。さらに深刻なのはダマン市内での地域格差であり、整備の進んだ都心部と、スラム化しつつある周辺部の格差が急速に拡大している。スラム化した周辺部の住環境は良好とは言い難く、治安の悪化やストリートチルドレンの発生が、深刻な社会問題となりつつある。

こうした問題は、ダマンの観光業に深刻な打撃を与えかねず、政府としても早急な対応策を検討しているところである。





4 ガザッソニカ再生へ向けて

我が国は自然豊かな国土に恵まれ、慈愛あふれる国王の治世の元、勤勉な国民が暮らす美しい国であった。しかし、ガルザの無法な行為により国土は蹂躙され、国民は窮乏しているのが現状である。

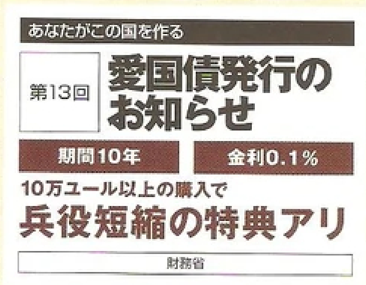
内戦により荒廃した国土をダマンだけでなく再建するには、国民ひとりひとりの力が必要になることは言うまでもない。ガルザの諸君もガザッソニカの国民であり、国を愛しているはずだ。ガルザの主義主張が真に「国民のため」であるならば、ただちに戦闘行為を停止し国家再建に協力すべきである。

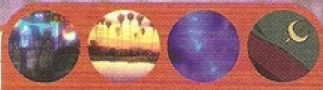
今こそ全国民が和解し、国王の元に集うべきである。国民一丸となったガザッソニカは、かつてない繁栄の時を迎えることだろう。その未来は、すぐそこまで来ていると信じるものである。











LIFE STYLE IN

GAZTH-SONIKA

Here Is GAZTH-SONIKA!

東南アジアの王国ガザッソニカ。内戦を伝えるニュースで国の名前を聞いたことはあっても、どんな国かを知っている人はあまりいないのでは？　今そのガザッソニカが、リゾートの穴場としてひそかに人気を集めています。

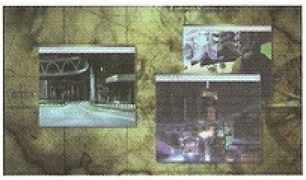
「内戦やってるし危険なのでは？」と思うかもしれませんが、観光拠点となる首都ダマンはとても安全。リゾートホテルや、ショッピングセンターが建ち並び、とても内戦が行われている国とは思えない程です。「だったら今度の長期休暇はガザッソニカで！」と思ったそこのあなた！　いくらなんでも、ガザッソニカのことを何も知らないまま行くのは無謀というものです。

まず渡航条件ですが、日本国民の場合有効期間が30日以上残っているパスポートがあれば、ビザなしで30日まで滞在できます。気候は熱帯気候で、5～10月は雨期です。通貨はユールで、1ユールはだいたい100円になります。第一公用語はフランス語です。

次のコーナーからは、リゾート生活に役立つ具体的な情報を紹介していきます。読み終わる頃には、あなたもガザッソニカ通！









Place Of Interest

リゾートの拠点となる首都ダマン（そもそもダマン以外への立ち入りは厳しく制限されていますが）は、世界でも有数の美しい都市として知られています。季節や時刻によって見せる表情は様々で、訪れた観光客の目を楽しませています。





その中でも“目玉”となるのは、やはりダマンの夜景でしょう。七色の色彩を放つ幻想的な夜景は、香港の夜景に勝るとも劣らないアジアの宝石です。

昼間のダマンは、南国の明るい日射しの下、異国情緒あふれる表情を見せます。熱帯雨林のジャングルに囲まれて、エスニックな建物と近代建築のビルが並立する様は、異国に来たということを実感させてくれます。

ダマンの景色を堪能したら、次は市内を回ってみましょう。その際、ガザッソニカ風の人力車を利用するのもオススメです。ゆったりとした速度で、街の景色を楽しめます。

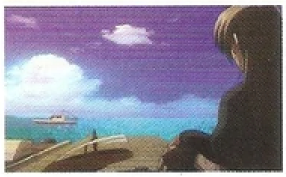
Play Spot

常夏の国ガザッソニカで遊ぶとなれば、当然メインとなるのはマリンリゾート。ダマン市内の主要なリゾートホテルにはプールが完備されていて、海に出るまでもなくリゾートを満喫することができます。

「せっかく外国まで来たのにホテルで過ごすんじゃもったいない！」と思うかもしれませんが、それもまた考えよう。デッキチェアに寝そべりながらトロピカルカクテルを飲み、気が向いたらプールで泳ぐというのがガザッソニカ流のリゾート。一生懸命泳いでくたくたになっていては、何をしに来たのかわかりません。この際ケチくさいことは考えずに、思い切り贅沢に過ごしてみましょう。

「それでも海へ行きたい！」というあなたには、ヨットやクルージングがオススメ。ホテルのフロントに頼めば、手配をしてくれるはずです。





ただボーッと海を見たいという人は、埠頭まで行ってみましょう。透き通った青い海が広がる水平線の彼方に、真っ白な雲が浮かぶ景色を見れば、小さな悩みなど吹き飛ぶことでしょう。

Shopping

買い物は海外旅行の大きな楽しみのひとつ。中には、それが一番の目当てという人もいるのではないでしょうか？
そんな買い物中毒の人にとって、ダマンはまさにパラダイス。タックス・ヘブンとしても有名なダマンでは、世界の一流ブランド品が格安で売られており、両手いっぱいの荷物を持った旅行者の姿もよく見かけます。しかし、高級ブランド品よりもダマンでしか買えない珍しいものが欲しいという人ももちろんいるでしょう。そんな方は、少し足を伸ばしてダウンタウン地区まで行くと、掘り出し物が見つかるかもしれません。ダウンタウンには、どこの国のものともしれないあやしげな商品が山のように売られており、さながら無国籍商店街の様相を呈しています。相応の眼力があれば価値ある買い物もできますが、ぼったくられても自己責任なのでご注意を。

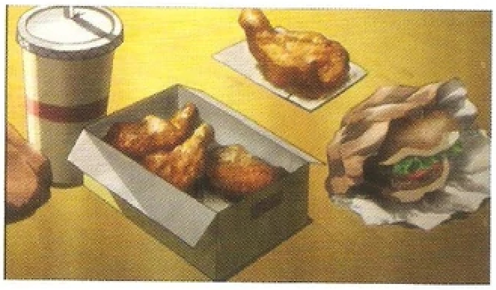




Food

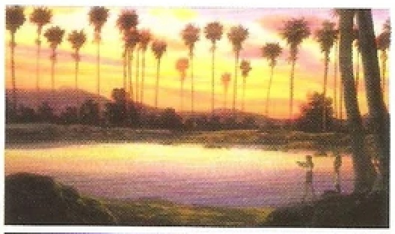


外国での食事は楽しみであると同時に、口に合わないという不安もあります。でも、ダマンの滞在中にそんな心配は一切無用。世界の食材が集まるダマンでは、ハンバーガーからフランス料理のフルコース、焼肉から満漢全席に至るまで、あらゆる食事を楽しむことができます。１週間もダマンに滞在すれば、料理で世界一周ができるでしょう。
「庶民的な地元料理を食べたい」というあなたは、やはりダウンタウンに行くのがよいでしょう。夜のダウンタウンにはたくさんの屋台が建ち並び、地元の人たちで賑わっています。酒の一杯もおごれば、地元の人たちから面白い話を聞けるかもしれません。
ただし、衛生状態が必ずしも良好でないことと、都心部に比べ治安が悪いことには十分留意しておきましょう。時には、いきなり銃の撃ち合いが始まることもある土地柄ですから、注意しすぎということはありません。危険を感じたら迷わず逃げましょう。



Other Place

現在、ガザッソニカではダマン以外への外国人の立ち入りが、厳しく制限されています。観光目的の場合、訪れることが可能なのは事実上ダマンのみです。そのため、ここまでダマンでの過ごし方を中心に紹介してきましたが、もちろんガザッソニカはダマンだけではありません。ダマン市の外には鬱蒼とした熱帯雨林が広がっており、何千年も前からの姿をそのまま残しています。夜のとばりが降りれば無数の星が空に瞬き、星明かりでうっすらと地面を照らす程です。ほぼ手つかずで残されたジャングルには何万種という動植物が息づき、悠久の時の中で生と死のドラマを繰り返しています。ダマンとはまったく異なる、もうひとつのガザッソニカの姿がそこにはあります。
このように素晴らしい自然環境に恵まれたガザッソニカですが、残念ながら森林地帯を訪れることは出来ません。中には、大金でガイドを雇い、無許可でジャングルに入る者もいるという噂ですが、命を落とす危険が大きくオススメ出来ません。少しでも早く内戦が終結し、多くの人がガザッソニカの自然に触れる日が来ることを願うばかりです。





Country

▼村落

森林地帯にはところどころに村が点在しており、人々が昔ながらの生活をしています。エリエス文字が発見された洞窟にほど近いドアイホ村では、独特の民族衣装が今も使われており、古代文明の末裔ではないかとも言われています。





Traffic

▼交通網

現在、ガザッソニカに入国可能な正規のルートは、ダマンへの空路のみです。海路は主に物資の輸出入に使用され、陸路は軍により国境付近で封鎖されています。国内での交通手段は自動車がほぼ唯一で、ほかは二輪車や徒歩となります。

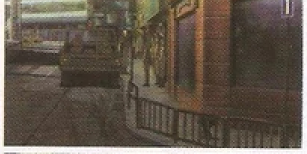




Warning

▼注意事項

首都ダマンは不戦地帯となっていますが、軍によるパトロールは頻繁に行われています。パスポートの提示を求められることがありますので、滞在中は必ずパスポートを携帯してください。不審な行動を取ると射殺される可能性もあります。







Illustrated by SATOSHI OHSAWA
Finished by SAYURI YOSHIDA
Background by PRODUCTION AI
Composed by AYUMI KAMO
初出：月刊ホビージャパン 2004年9月号





Illustrated by SATOSHI OHSAWA
Finished by MAKIKO KOJIMA
Composed by AYUMI KAMO
初出：月刊ニュータイプ 2004年7月号





Illustrated by SATOSHI OHSAWA
Finished by MAKIKO KOJIMA
Composed by AYUMI KAMO
初出：月刊ニュータイプ 2004年9月号





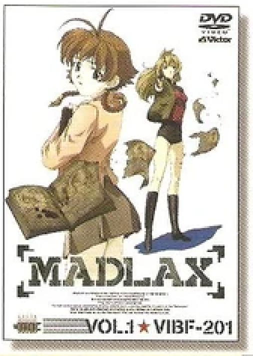
Illustrated by SATOSHI OHSAWA
Finished by MAKIKO KOJIMA
Background by PRODUCTION AI
Composed by AYUMI KAMO
初出：月刊ニュータイプ 2004年3月号



ITEM OF MADLAX

DVD

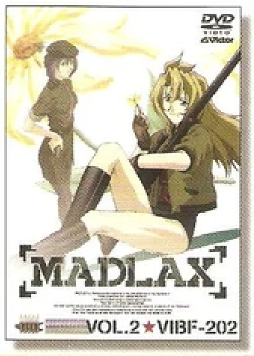
VOL.1



¥6,090(税込)

第1話 「銃舞 -dance-」
第2話 「紅月 -crimson-」

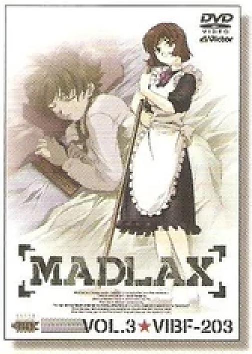
VOL.2



¥6,090(税込)

第3話 「蒼月 -moon-」
第4話 「誘惑 -ask-」

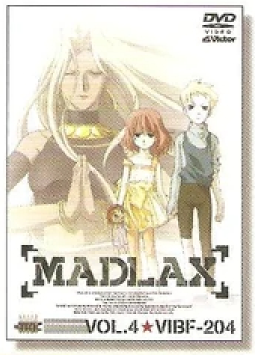
VOL.3



¥6,090(税込)

第5話 「無在 -zero-」
第6話 「遺言 -leave-」

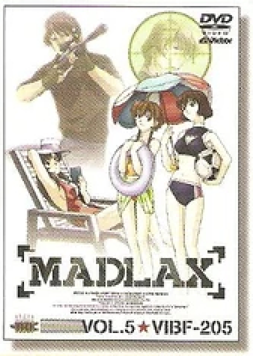
VOL.4



¥6,090(税込)

第7話 「繪本 -nature-」
第8話 「暁言 -soul-」

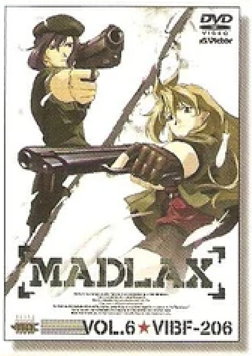
VOL.5



¥6,090(税込)

第９話 「残香 -scent-」
第10話 「侵触 -dive-」

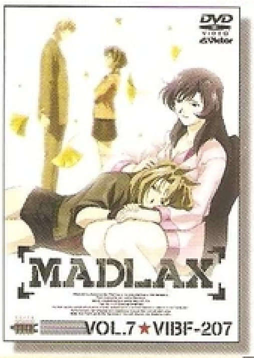
VOL.6



¥6,090(税込)

第11話 「異国 -object-」
第12話 「消意 -close-」

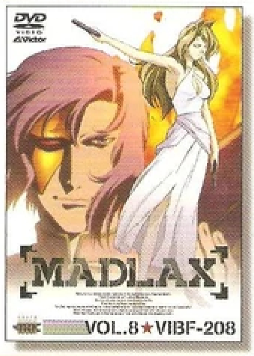
VOL.7



¥6,090(税込)

第13話 「覚鳴 -awake-」
第14話 「忘想 -memory-」

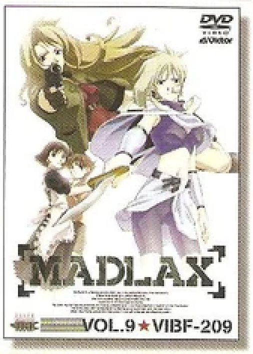
VOL.8



¥6,090(税込)

第15話 「偽争 -camouflage-」
第16話 「銃顔 -moment-」

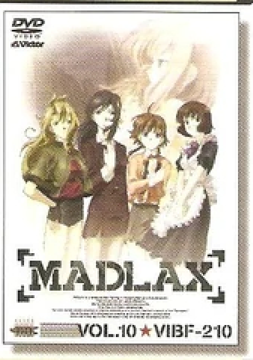
VOL.9



¥6,090(税込)

第17話 「殺邪 -reunion-」
第18話 「双離 -duo-」

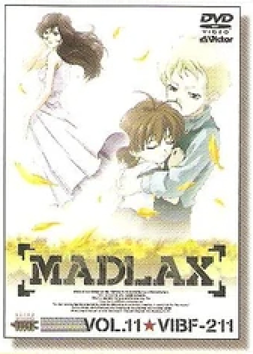
VOL.10



¥6,090(税込)

第19話 「聖本 -holy-」
第20話 「真争 -wish-」

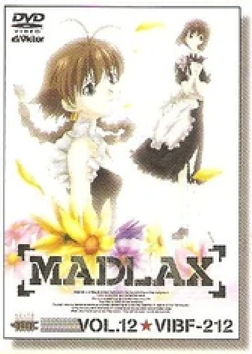
VOL.11



¥6,090(税込)

第21話 「告薄 -guilty-」
第22話 「撃情 -rage-」

VOL.12



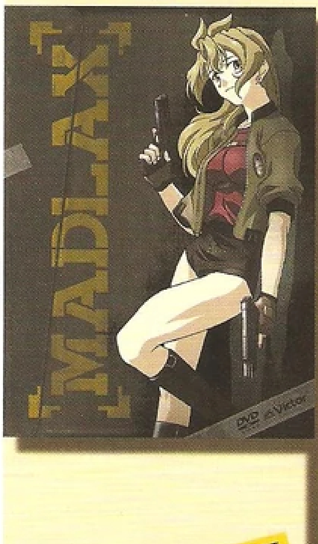
¥6,090(税込)

第23話 「迷心 -doubt-」
第24話 「献心 -hearts-」

'05年6月22日発売予定

DVD-BOX

ITEM OF MADLAX

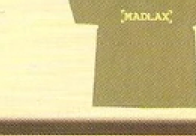


DVD VOL.8 初回生産版

(BOX付)
¥6,090 (税込)

DVD VOL.1 初回生産版

(BOX＋Tシャツ付)
¥6,090 (税込)



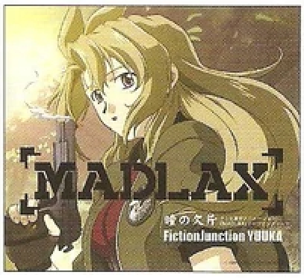


『MADLAX』に関連するマストなグッズを、一挙紹介するこのコーナー。
DVD、CD、フィギュアとこれさえ揃えれば、いつでも『MADLAX』を身近に感じられる筈だ。
また、金田朋子自らが作ったアノ人形も特別に掲載！

CD

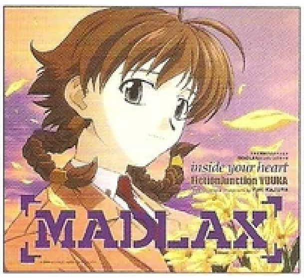
ITEM OF MADLAX

オープニングテーマ



『瞳の欠片/CW nowhere』
FictionJunction YUUKA
¥1,155（税込）

エンディングテーマ



『inside your heart/CW I'm here』
FictionJunction YUUKA
¥1,155（税込）

サウンドトラック



『MADLAX O.S.T.』
梶浦由記
¥3,045（税込）

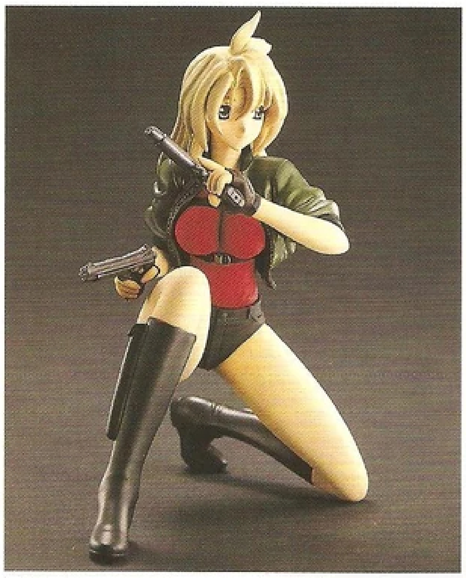
サウンドトラック2

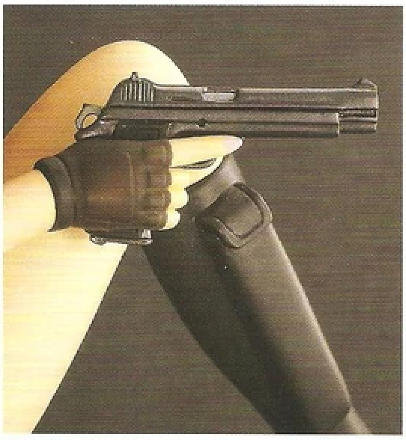


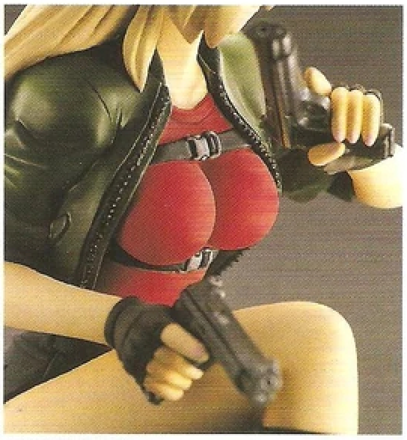
『MADLAX O.S.T.2』
梶浦由記
¥3,045（税込）

Figure

ITEM OF MADLAX





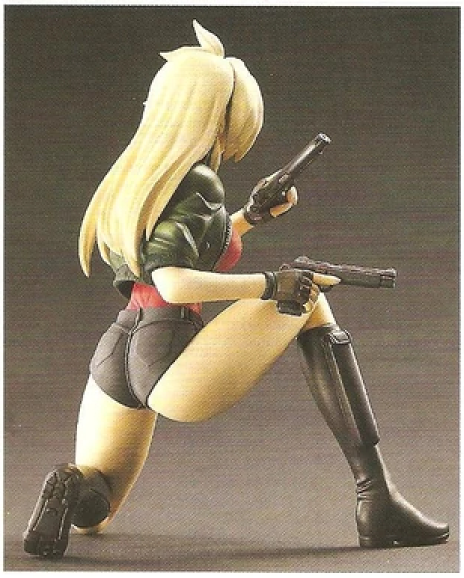


1：7 Scale Scratch Built『MADLAX』

Sculpted By YOZO OGAWA

ウェーブからワンダーフェスティバルの限定キットとして発売され、開場後数分で100体を完売したフィギュア。好評を受けてキャラアニ・ドット・コムで限定販売された（現在は予約終了）。

初出：ホビージャパン2004年12月号



Special　金田朋子謹製「レティシアの人形」





公式サイトの特別企画で、レティシア役の金田朋子が自ら製作したレティシアの人形。製作の過程を撮ったムービーもアップされ、その奮闘ぶりが見られる。この人形は、『MADLAX』の打ち上げ会場において真下監督に贈呈され、現在はBeeTrain社内に飾られている。

DESIGN WORKS

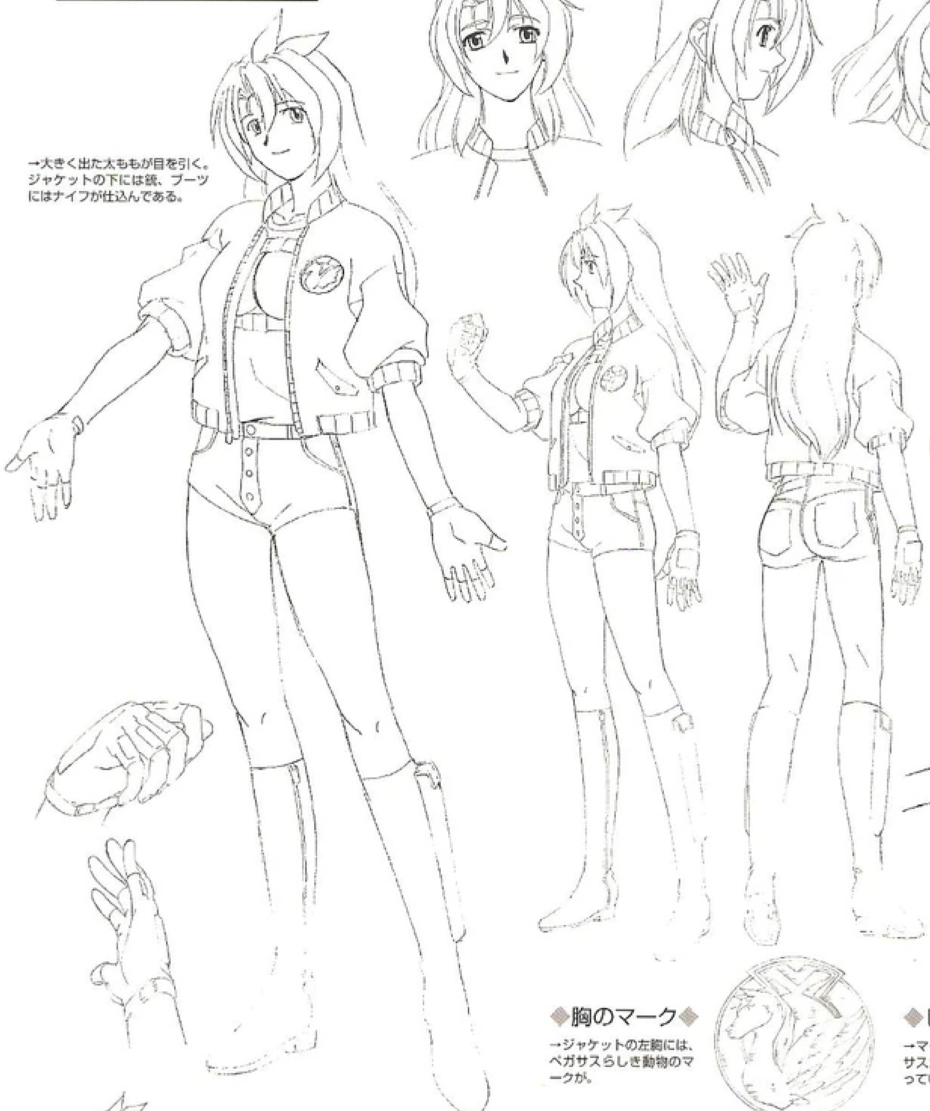
マドラックス

Character Voice：小林沙苗

◆表情◆



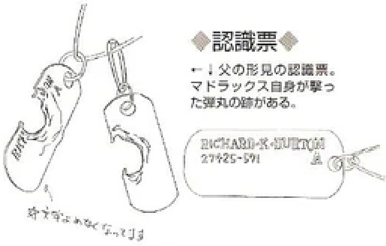
↑戦いの中を生きているわりには、人なつっこい感じを見せることもある「優しい人殺し」の表情だ。



→大きく出た太ももが目を引く。ジャケットの下には銃、ブーツにはナイフが仕込んである。

◆認識票◆

←↓父の形見の認識票。マドラックス自身が撃った弾丸の跡がある。



◆ホルスター◆

←↓ホルスターは左右の両脇につるすタイプとなっている。



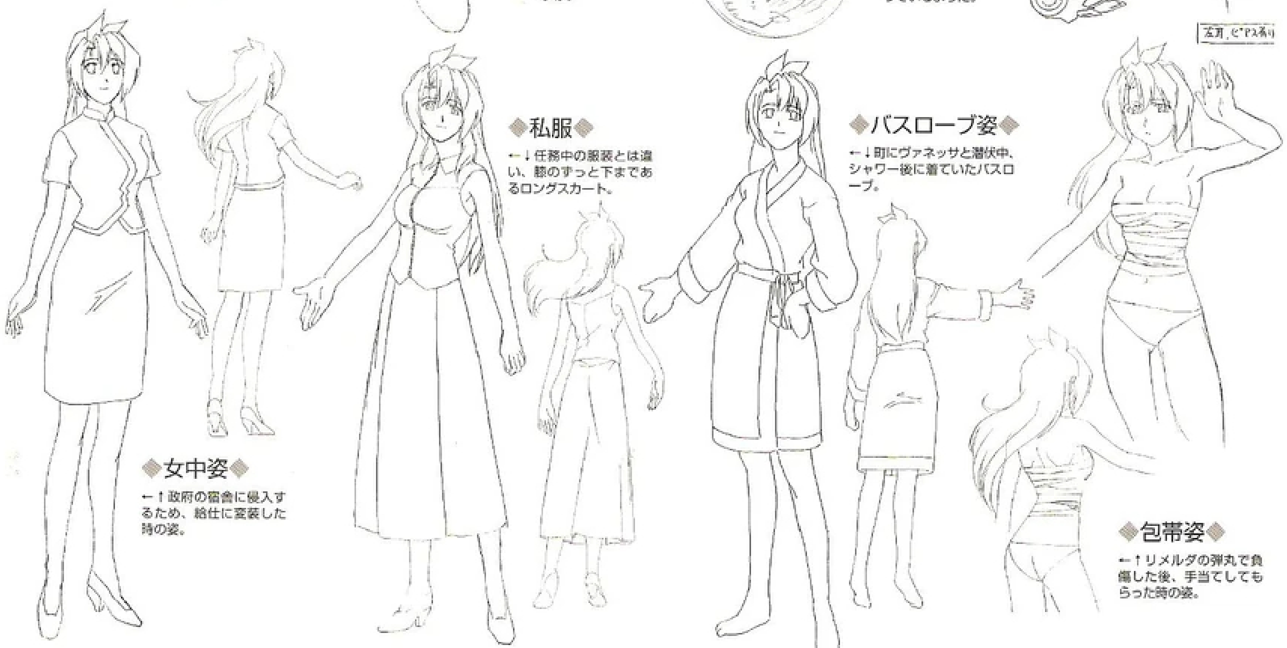
◆胸のマーク◆

→ジャケットの左胸には、ペガサスらしき動物のマークが。

◆ピアス◆

→マーク同様、ペガサスがモチーフになっているようだ。





◆私服◆

←↓任務中の服装とは違い、膝のずっと下まであるロングスカート。

◆バスローブ姿◆

←↓町にヴァネッサと潜伏中、シャワー後に着ていたバスローブ。

◆女中姿◆

←↑政府の宿舎に侵入するため、給仕に変装した時の姿。

◆包帯姿◆

←↑リメルダの弾丸で負傷した後、手当てしてもらった時の姿。

設定資料集

こちらでは、「マドラックス」アニメ本編の作画を行なう時、アニメーターが参照するために作成された設定資料を紹介する。

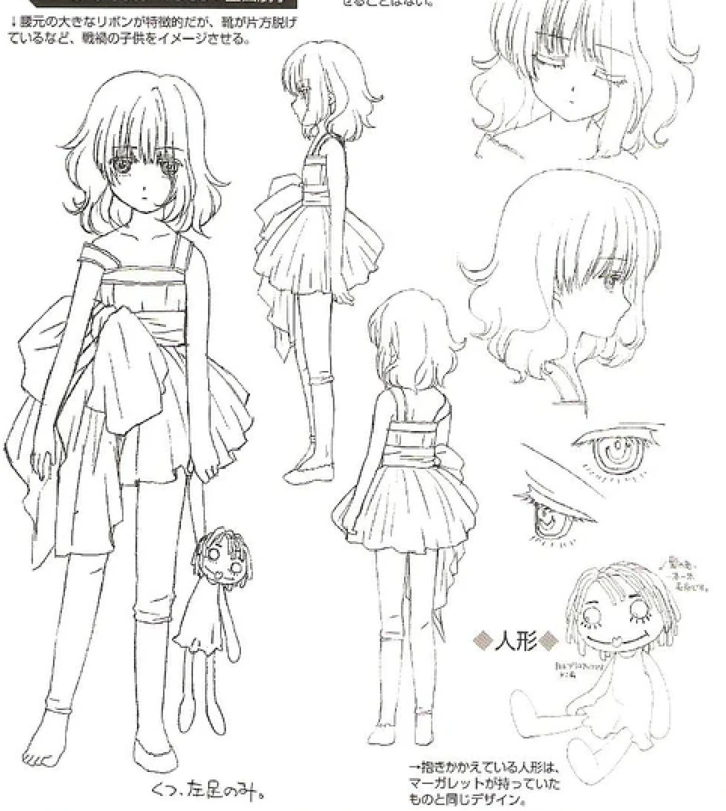
レティシア

Character Voice：金田朋子

↓腰元の大きなリボンが特徴的だが、靴が片方脱げているなど、戦禍の子供をイメージさせる。

◆表情＆目◆

→非常に空虚な目をした彼女。表情もほとんど見せることはない。



◆人形◆

→抱きかかえている人形は、マーガレットが持っていたものと同じデザイン。

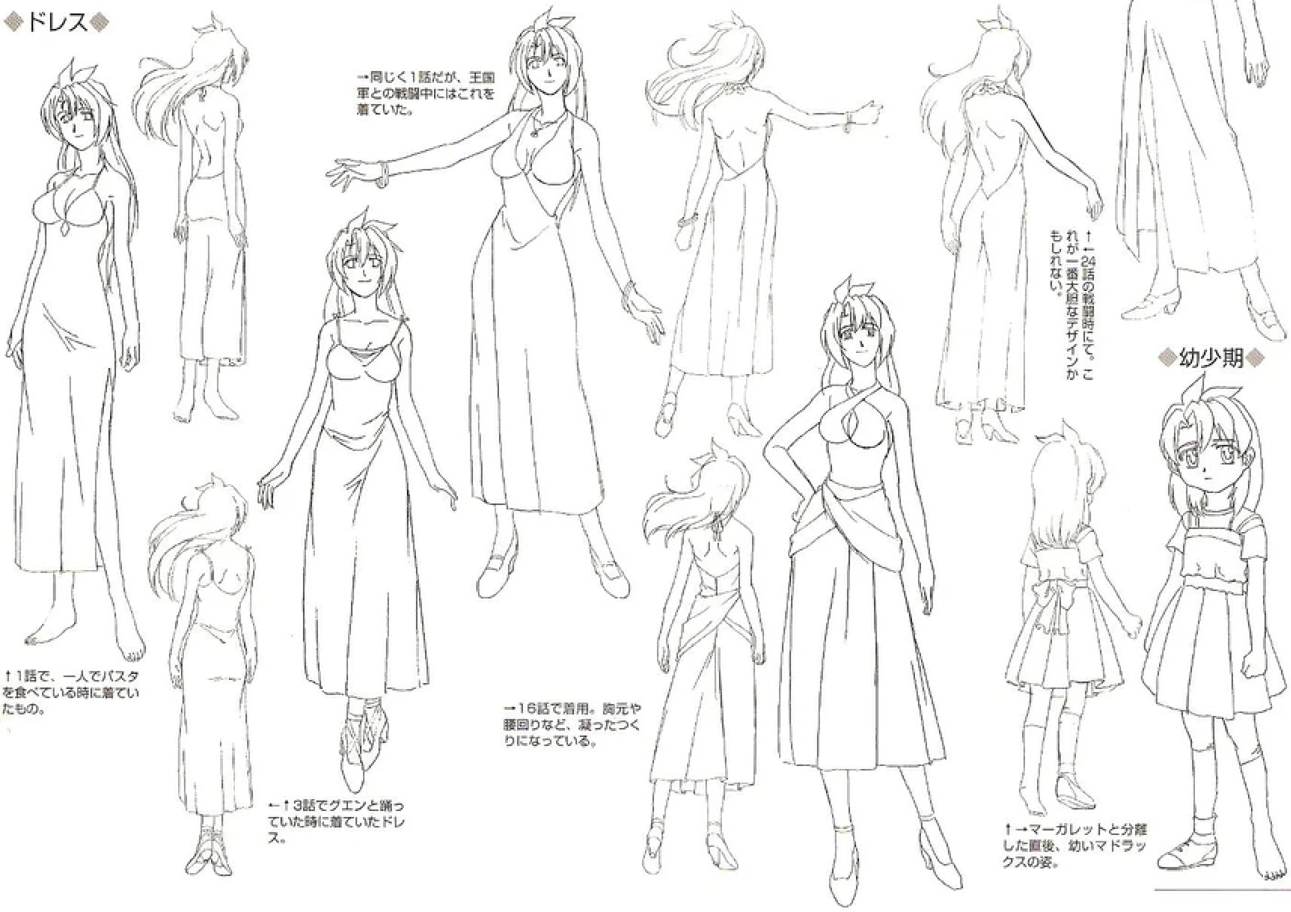
プゥペ

Character Voice：？？？

↓カロッスアの幼い時の姿だが、その面影はほとんどない。レティシア同様、表情や感情が欠落している。



◆ドレス◆



↑1話で、一人でパスタを食べている時に着ていたもの。

←↑3話でグエンと踊っていた時に着ていたドレス。

→同じく1話だが、王国軍との戦闘中にはこれを着ていた。

→16話で着用。胸元や腰回りなど、凝ったつくりになっている。

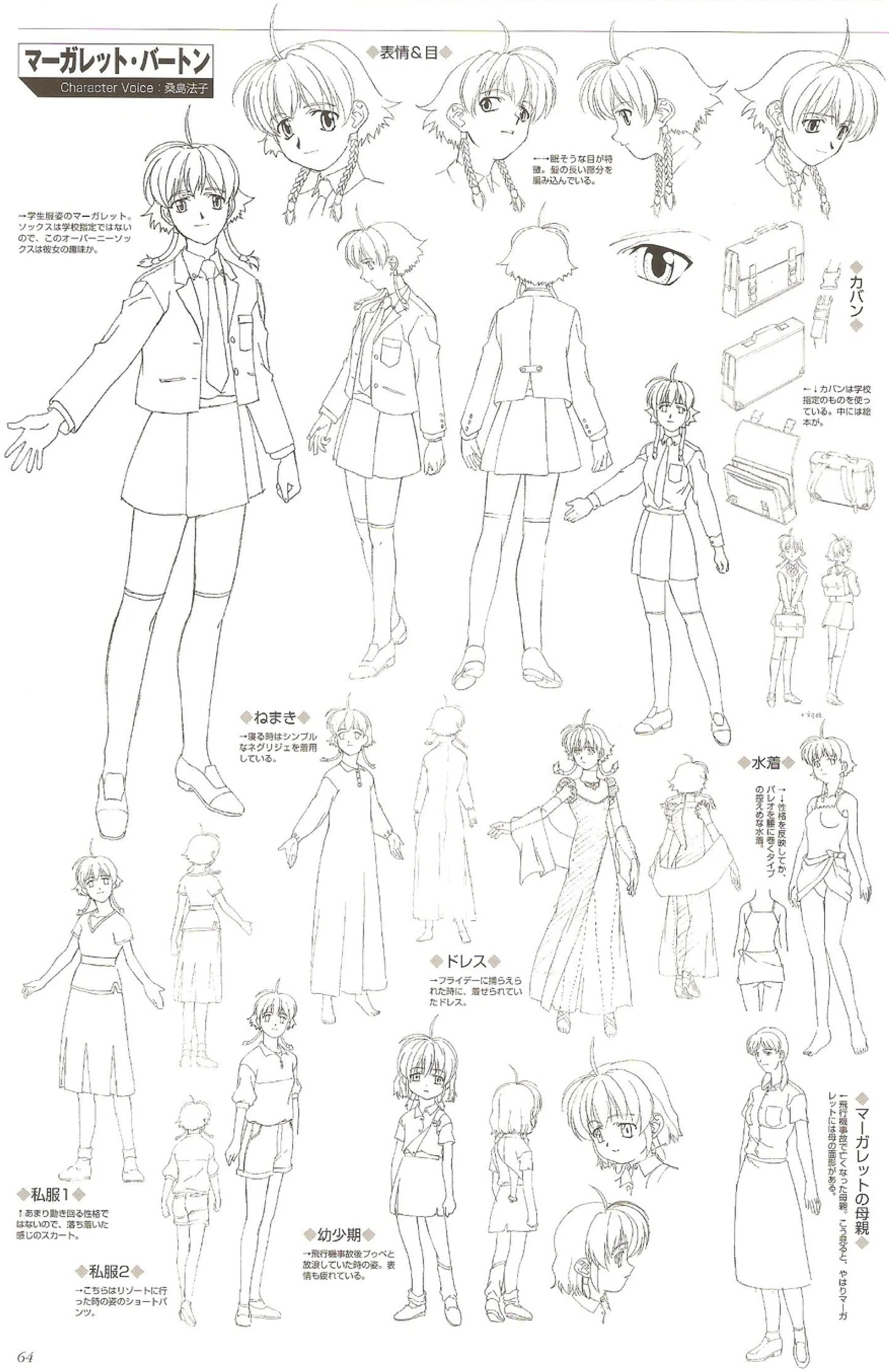
↑←24話の戦闘時にて。これが一番大胆なデザインかもしれない。

◆幼少期◆

↑→マーガレットと分離した直後、幼いマドラックスの姿。

マーガレット・バートン

Character Voice：桑島法子



◆表情＆目◆

←→眠そうな目が特徴。髪の長い部分を編み込んでいる。

→学生服姿のマーガレット。ソックスは学校指定ではないので、このオーバーニーソックスは彼女の趣味か。

◆カバン◆

←↓カバンは学校指定のものを使っている。中には絵本が。

◆ねまき◆

→寝る時はシンプルなネグリジェを着用している。

◆ドレス◆

→フライデーに捕らえられた時に、着せられていたドレス。

◆水着◆

→↓性格を反映してか、パレオを腰に巻くタイプの控えめな水着。

◆私服1◆

↑あまり動き回る性格ではないので、落ち着いた感じのスカート。

◆私服2◆

→こちらはリゾートに行った時の姿のショートパンツ。

◆幼少期◆

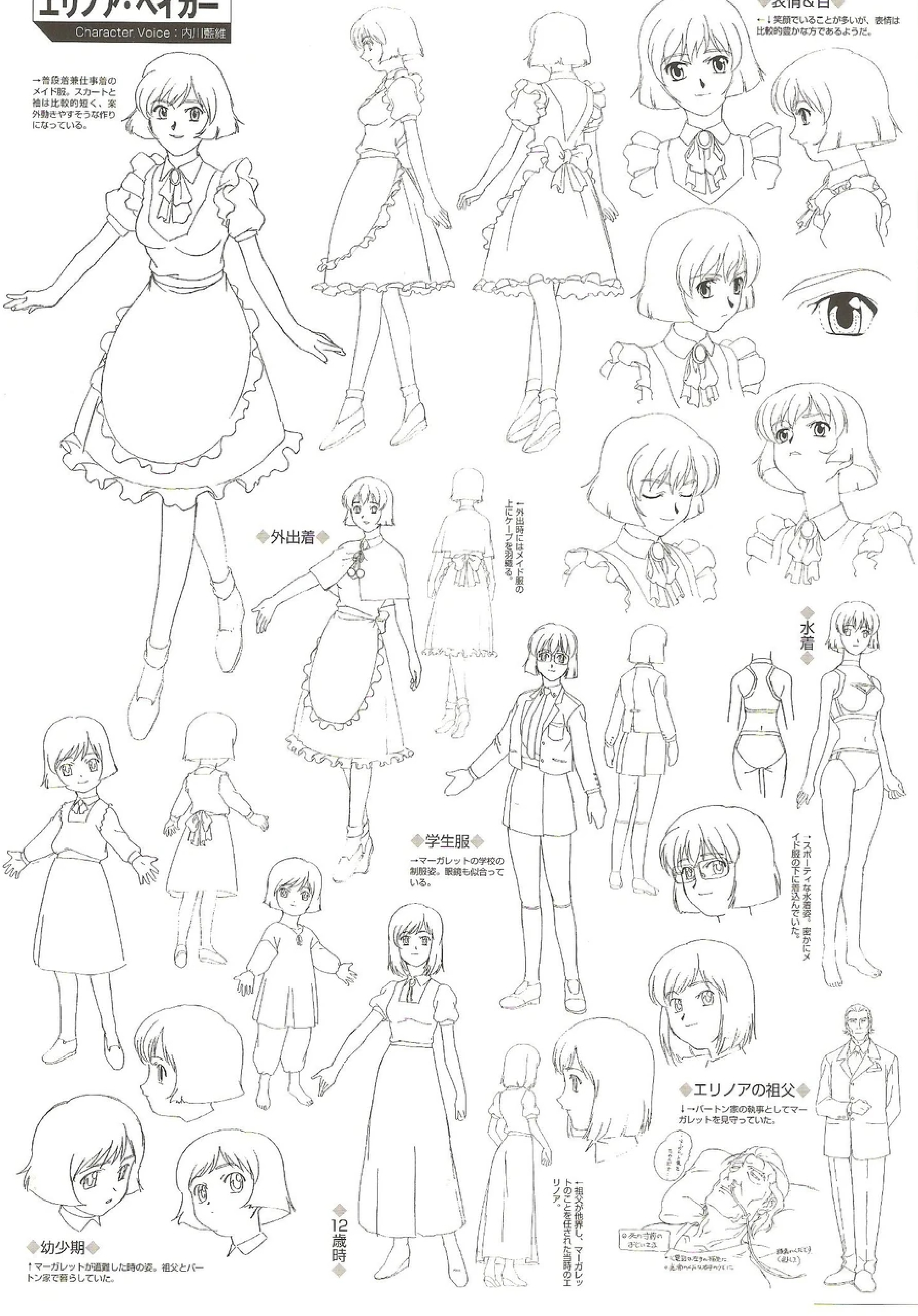
→飛行機事故後ブッべと放浪していた時の姿。表情も疲れている。

◆マーガレットの母親◆

←飛行機事故で亡くなった母親。こう見ると、やはりマーガレットには母の面影がある。

エリノア・ベイカー

Character Voice：内川藍維



→普段着兼仕事着のメイド服。スカートと袖は比較的短く、案外動きやすそうな作りになっている。

◆表情&目◆

←↓笑顔でいることが多いが、表情は比較的豊かな方であるようだ。

◆外出着◆

←外出時にはメイド服の上にケープを羽織る。

◆学生服◆

→マーガレットの学校の制服姿。眼鏡も似合っている。

◆水着◆

↑→スポーティな水着姿。密かにメイド服の下に着込んでいた。

◆幼少期◆

↑マーガレットが遭難した時の姿。祖父とバートン家で暮らしていた。

◆12歳時◆

←祖父が他界し、マーガレットのことを任された当時のエリノア。

◆エリノアの祖父◆

↓→バートン家の執事としてマーガレットを見守っていた。

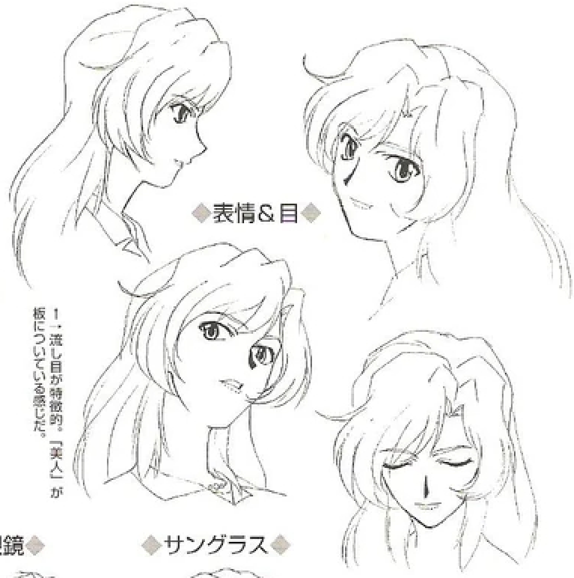
ヴァネッサ・レネ

Character Voice：雪野五月

↓キャリアウーマンらしいタイトスカート姿のヴァネッサ。ブラウスもシンプルなものになっている。







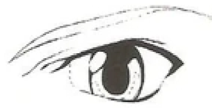
◆表情&目◆

↑→流し目が特徴的。「美人」が板についている感じだ。

◆眼鏡◆

◆サングラス◆





↑PCに向かう時など、時々眼鏡をかけることもある。

◆カバン◆





◆私服◆



↑撃たれた時、マドラックスのイメージの中で着ていた服。

◆Tシャツ姿◆



→マドラックスの隠れ家にて。くつろいだ格好だ。

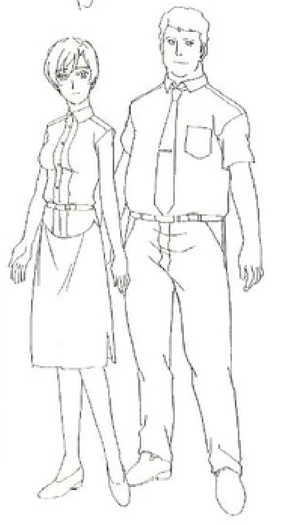
◆水着◆



←↓マーガレットたちとのリゾートで着ていた大胆な水着。

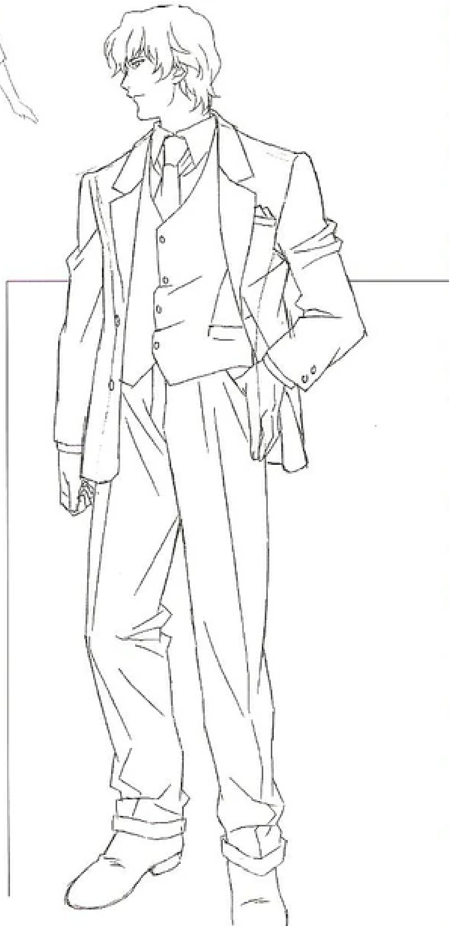






◆幼少期&両親◆

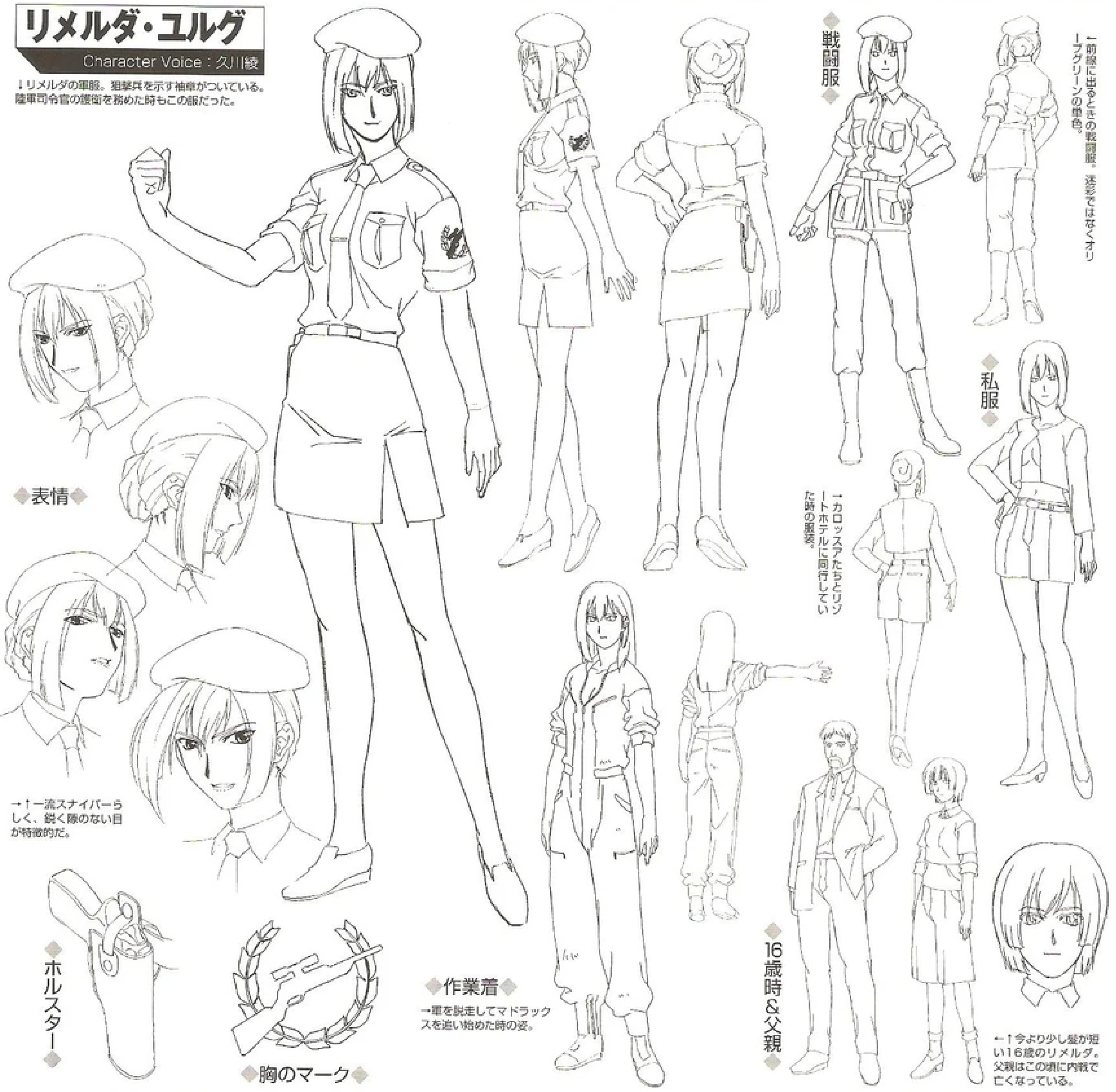
↑→幼い頃のヴァネッサと、行方不明になった両親。左はヴァネッサのオフィスに飾られていた写真。



リメルダ・ユルグ

Character Voice：久川綾

↓リメルダの軍服。狙撃兵を示す袖章がついている。陸軍司令官の護衛を務めた時もこの服だった。



←前線に出るときの戦闘服。迷彩ではなくオリーブグリーンの単色。

→カロッスアたちとリゾートホテルに同行していた時の服装。

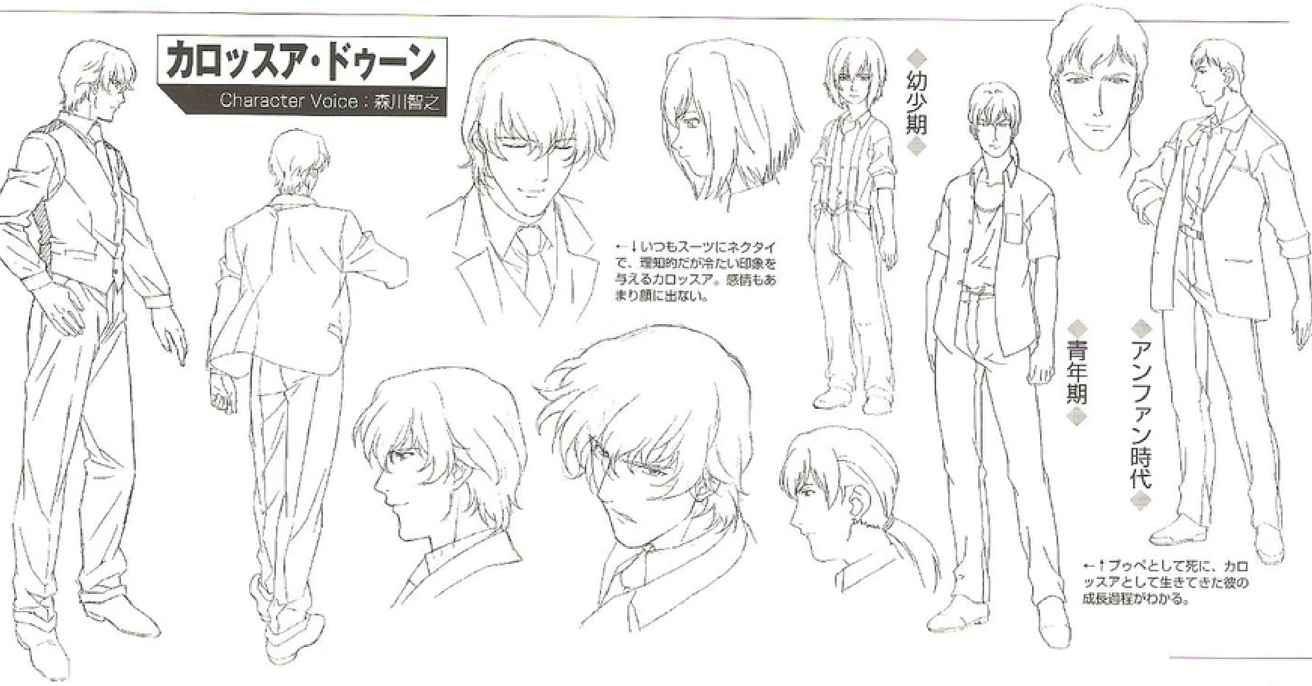
→↑一流スナイパーらしく、鋭く隙のない目が特徴的だ。

→軍を脱走してマドラックスを追い始めた時の姿。

←↑今より少し髪が短い16歳のリメルダ。父親はこの頃に内戦で亡くなっている。

カロッスア・ドゥーン

Character Voice：森川智之



←↓いつもスーツにネクタイで、理知的だが冷たい印象を与えるカロッスア。感情もあまり顔に出ない。

←↑プッペとして死に、カロッスアとして生きてきた彼の成長過程がわかる。

フライデー・マンデー

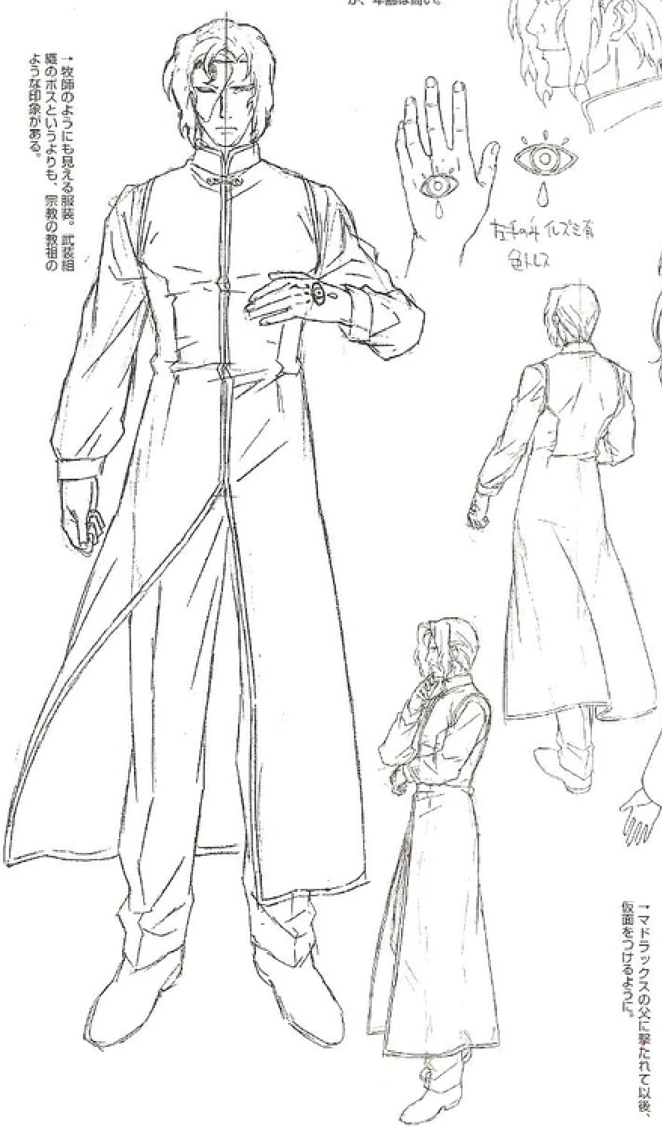
Character Voice：江原正士

◆表情◆

→狂気が秘められたフライデーの表情。髪型と仮面のせいでわかりにくいが、年齢は高い。



→牧師のようにも見える服装。武装組織のボスというよりも、宗教の教祖のような印象がある。





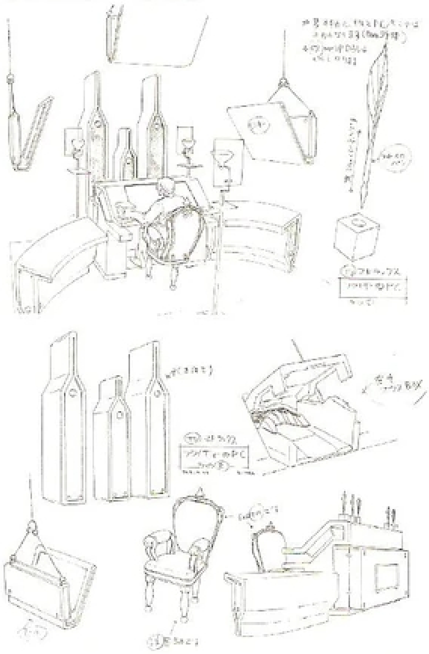
◆仮面の下の傷◆

◆12年前◆

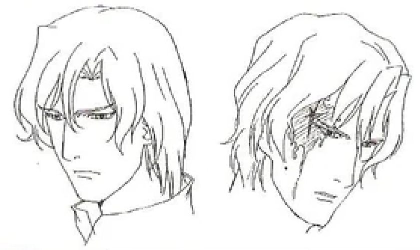


→マドラックスの父に撃たれて以後、仮面をつけるように。

◆フライデーのPC◆

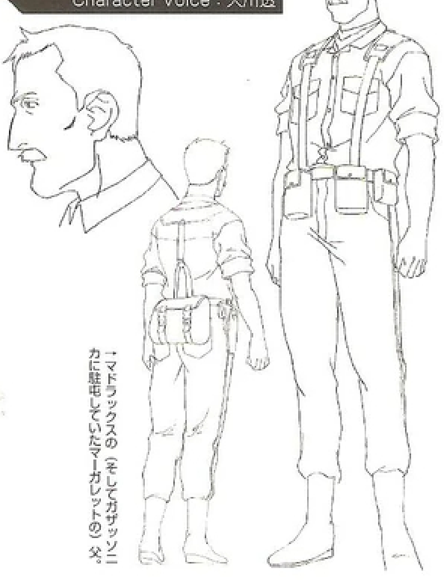


↑フライデーの部屋に置かれた巨大な端末。バッジスのハッキングに直ちに対処できる程の能力を持つ。



マドラックスの父

Character Voice：大川透



→マドラックスの（そしてガザッソニカに駐屯していたマーガレットの）父。

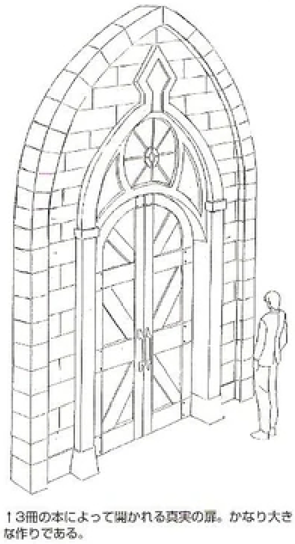
親衛隊隊長

Character Voice：田中完



→リメルダの上官。たくましい体つきでいかにも軍人といった風情だ。

真実の扉

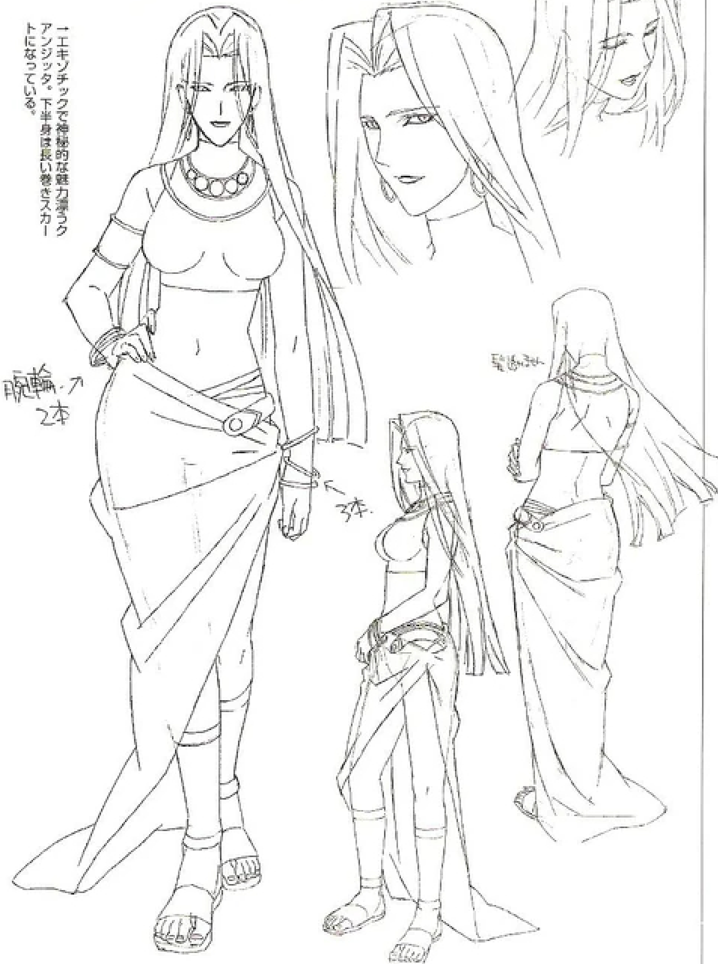


↑3冊の本によって開かれる真実の扉。かなり大きな作りである。

クアンジッタ

Character Voice：兵藤まこ

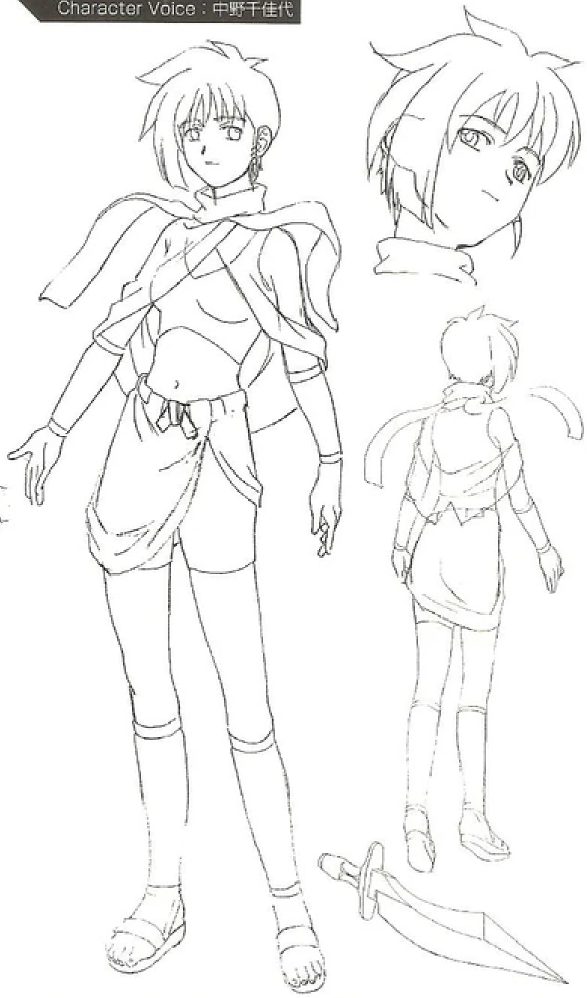
→エキゾチックで神秘的な魅力漂うクアンジッタ。下半身は長い巻きスカートになっている。



ナハル

Character Voice：中野千佳代

↓クアンジッタと似た感じの服だが、彼女の手足として働くため、行動しやすいようになっている。



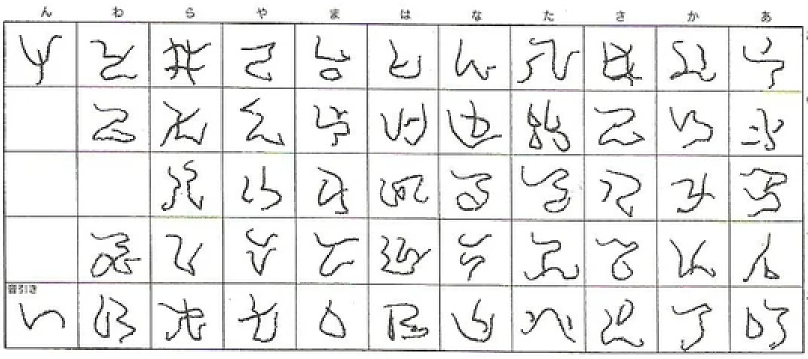
絵本

↓エリエス文字。設定では日本語の50音と対応している。筆で書かれた場合と、彫られた場合の2パターンある。

◆エリエス文字（描き文字）◆



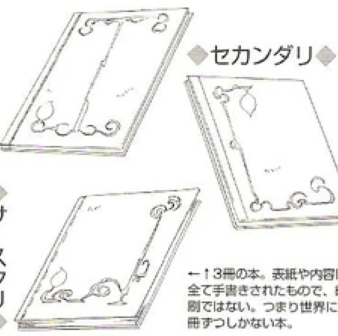
◆エリエス文字（篆刻文字）◆



◆ファースタリ◆

◆セカンダリ◆

◆サースタリ◆



←↑3冊の本。表紙や内容は全て手書きされたもので、印刷ではない。つまり世界に1冊ずつしかない本。

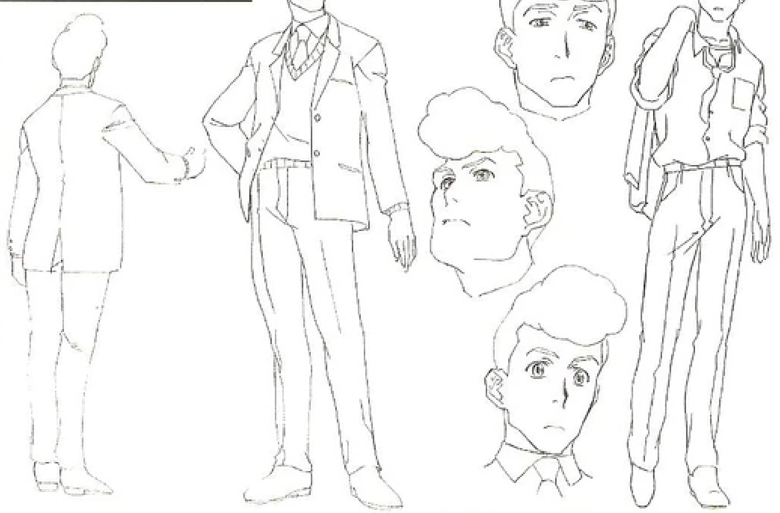
◆絵本の中◆



←セカンダリの中身。マドラックスが持っていたページは左上。

チャーリー

Character Voice：川島得愛

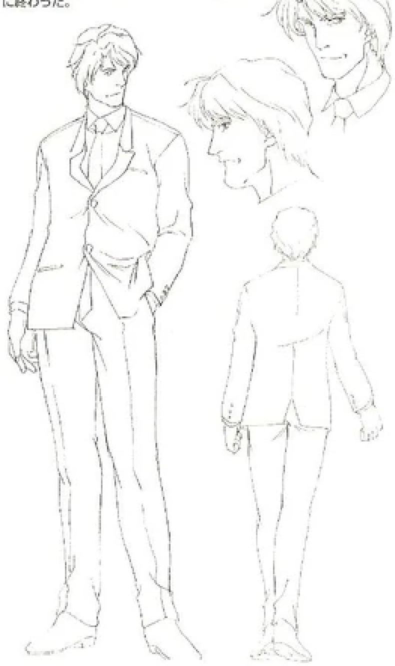


↑ヴァネッサの同僚。軽薄そうな外見のためか、マーガレットには本能的に避けられてしまった。

SSS

Character Voice：浦山迅

↓→劇中ではマドラックスと直接会わず電話でしか話していないので、全身像も登場せずに終わった。



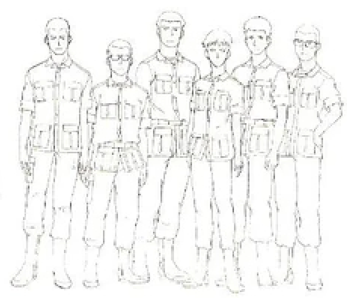
情報屋

Character Voice：園部啓一

→↓マドラックスがよく使う情報屋。普段は古物商に扮しているため、そちらの商売の服装をしている。



王国兵



↑正規兵なので、服装は制服姿になっている。

ガルザ兵

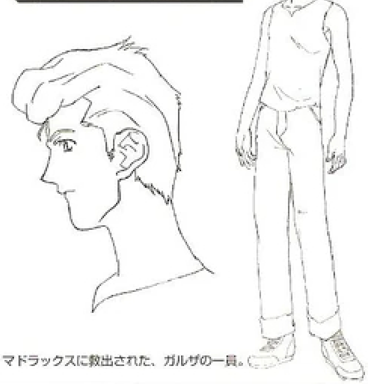


↑こちらは老若男女が混じり、服装も統一されていない。

ゲストキャラクター

ピート

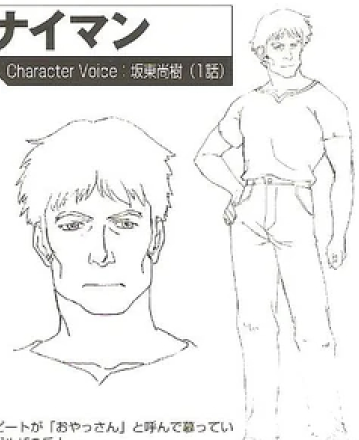
Character Voice：浪川大輔（1話）



↑マドラックスに救出された、ガルザの一員。

ナイマン

Character Voice：坂東尚樹（1話）



↑ピートが「おやっさん」と呼んで慕っていたガルザの兵士。

グエン・マクニコル

Character Voice：有本欽隆（3話）



↑マドラックスに自身の暗殺を依頼した陸軍司令官。

マクレー・マリーニ

Character Voice：寺杣昌紀（4話）



↑ナフレスの刑事で、ビエデリカ殺害事件を捜査していた。

ピエデリカ・モレイ

Character Voice：内田直哉（4話）



↑ガザッソニカに関係の深かった地方議員。自分の娘に殺される。

フェリック

Character Voice：宗矢樹頼（6話）



↑エリノアが相談していた、マーガレットの主治医。

ルシール

Character Voice：篠原恵美（7話）



↑エリックの知人で言語学者。彼の元恋人でもある。

アンヌ・モレイ

Character Voice：名塚佳織（4話）



↑マーガレットの同級生。父を殺し、自らも自殺した。

キアラ

Character Voice：千葉紗子（6話）



↑マーガレットのクラスメイト。彼女もお嬢様である。

ルチアーノ

Character Voice：水島裕（9話）



↑エージェントのひとりで、カロッスアを狙撃しようとした。

クリス

Character Voice：入野自由（5話）



↑父を捜すためガザッソニカに密入国してきた少年。

モーリス・ロペス

Character Voice：石田彰（6話）



↑マーガレットを口説こうとしていた男子生徒。

バッジス

Character Voice：佐々木望（10話）



↑ヴァネッサの友人の大学研究員。凄腕のハッカーでもある。

ミン・デュルク

Character Voice：???（5話）



↑クリスの父。表向きにはガルザ指導者とされていた。

エリック・ジラン

Character Voice：平田広明（7話）



↑書籍専門の探偵であるビブリオ・ディテクティブ。

アインス

Character Voice：福山潤（11話）

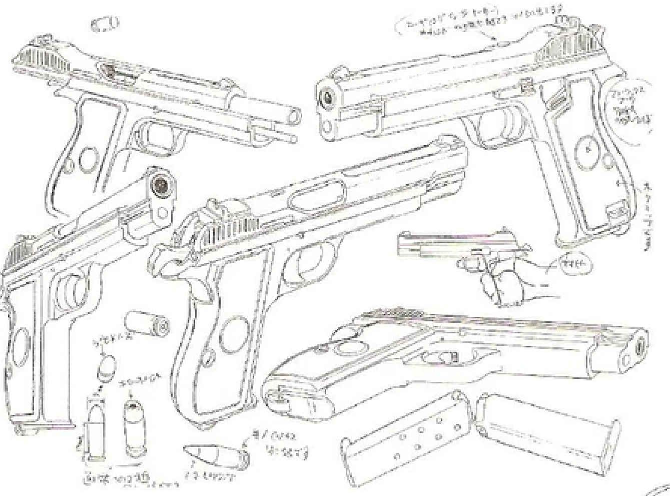


↑アンファンのデータが入ったPCを偶然買った少年。

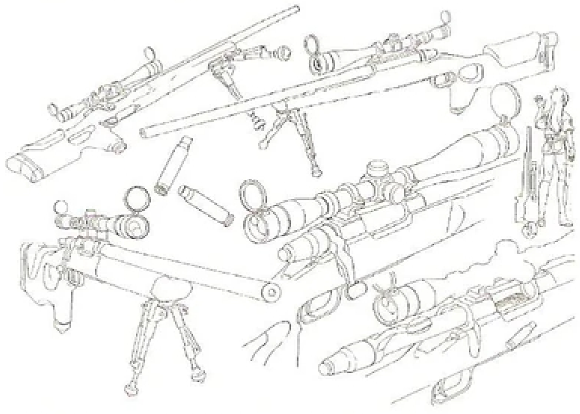
銃火器類

◆マドラックスの銃◆

↓SIG-P210。作中で一番登場した銃といえる。口径9ミリの半自動拳銃で、後継のP220の登場まで、スイス軍で使用されていた。



◆マドラックスのライフル◆



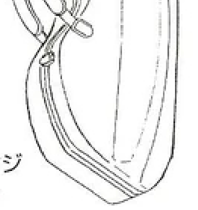
↑M24カスタム。アメリカ陸軍のボルトアクション式狙撃銃。通常のM24からグリップ・ストックが変更されている。

◆幼いマドラックスが手にした銃◆

←マドラックスが父を撃った銃。シングルアクション式の半自動拳銃、コルト380。

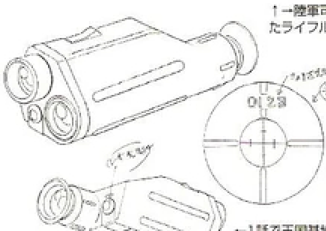






◆ライフルケース◆

↑→陸軍司令官を狙撃する時に使ったライフルケース。

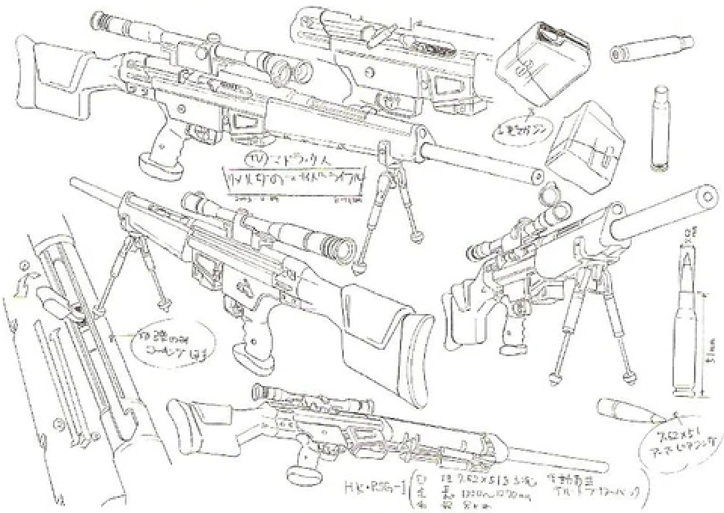


◆レーザーレンジファインダー◆

←1話で王国基地を偵察する時などに使っていたファインダー。

◆リメルダのスナイパーライフル◆

↓PSG-1。ドイツH&K社による、半自動のものとしては世界最高峰の狙撃銃。主に警察機関用の銃。



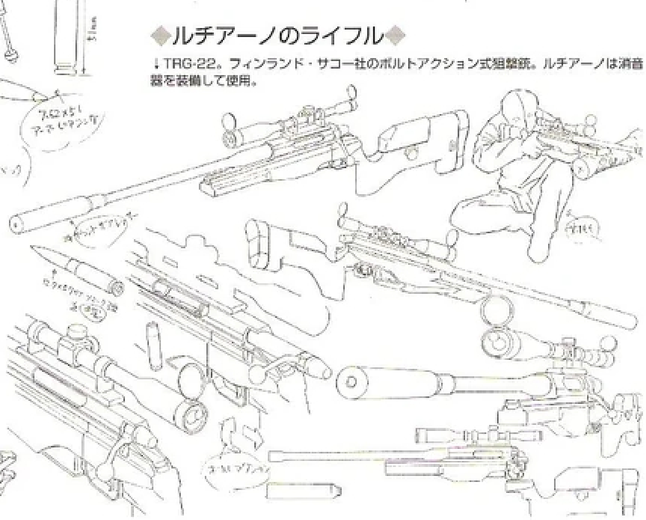
◆カロッスアの銃◆

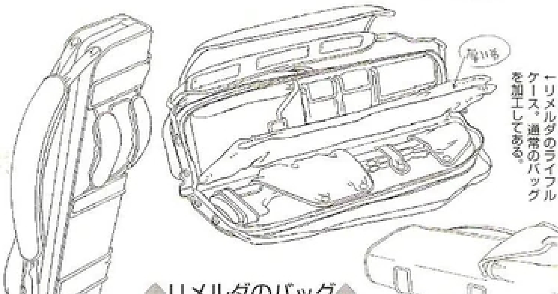
↓MR93。フランス・マニューリン社のダブルアクションリボルバー。357マグナム弾を使用する。



◆ルチアーノのライフル◆

↓TRG-22。フィンランド・サコー社のボルトアクション式狙撃銃。ルチアーノは消音器を装備して使用。





←リメルダのライフルケース。通常のバッグを加工してある。

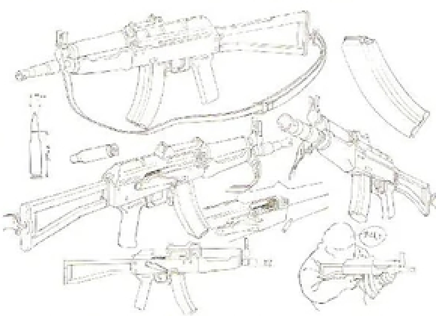
◆リメルダのバッグ◆

◆ガルザ兵の拳銃◆



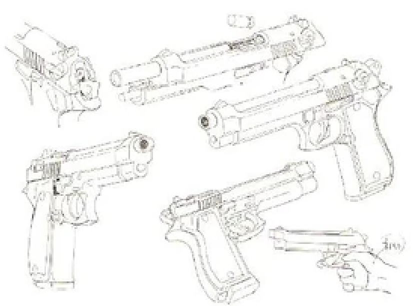
↑ノリンコM54。1話でビートとナイマンが使用していた。

◆ガルザ兵のアサルトカービン◆



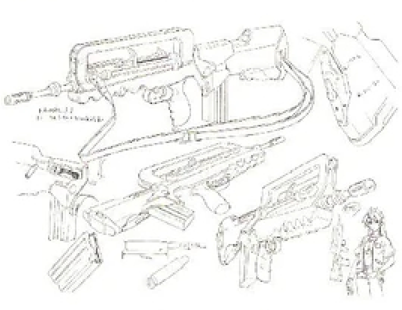
↑AKS-74U。バレルは短く、ストックは折りたたみ式にしてある。

◆ガザッソニカ軍の銃◆



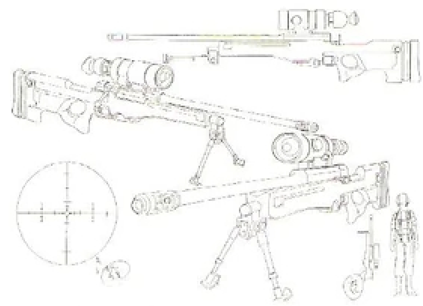
↑ベレッタ92F。アメリカ軍の正式拳銃として使用されている。

◆ガザッソニカ軍のアサルトライフル◆



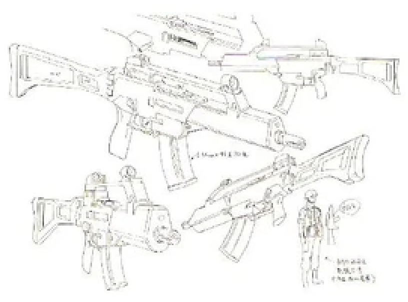
↑FA-MAS F1。フランス製のブルパップ式自動小銃。

◆傭兵の狙撃銃◆



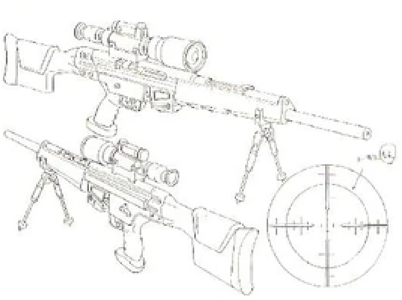
↑G22。イギリス製狙撃銃スーパーマグナムのドイツ採用型。

◆傭兵の銃◆



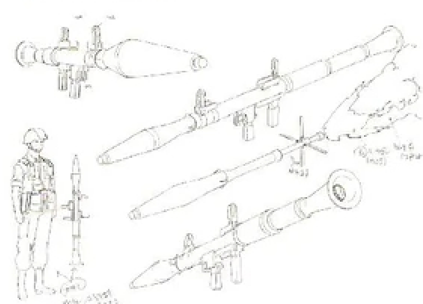
↑G36C。ドイツ軍の自動小銃を短くしたタイプのもの。

◆H&K PSG-1◆



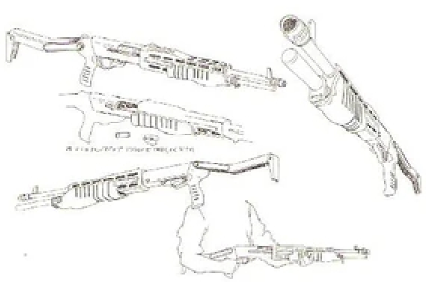
↑PSG-1。通常のスコープではなく赤外線暗視装置を装備。

◆ロケット砲◆



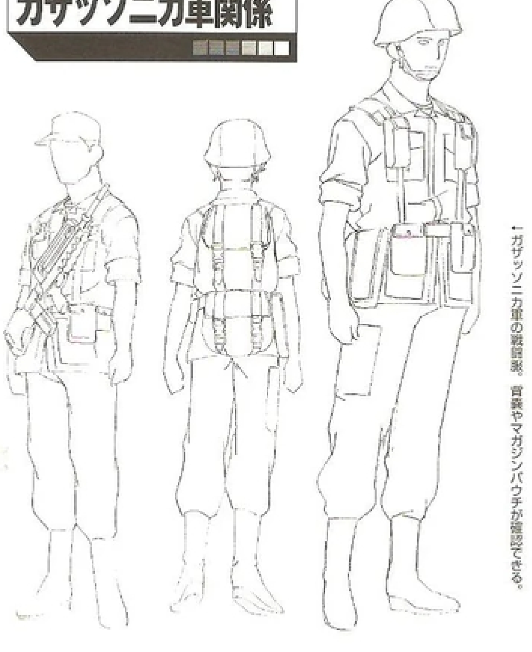
↑RPG-7。対戦車ロケット弾。ランチャーは使い捨て方式。

◆ショットガン◆



↑SPAS12。イタリア製のショットガン。自動装填射撃が可能。

ガザッソニカ軍関係

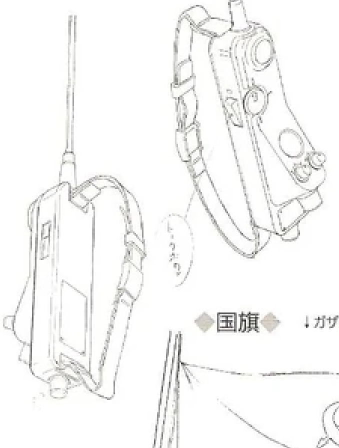


◆装備を装着した姿◆

↑ガザッソニカ軍の戦闘服。背嚢やマガジンパウチが確認できる。

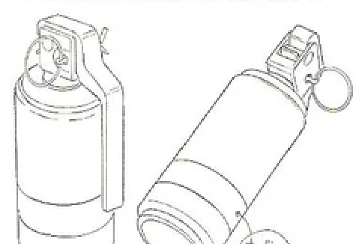
◆無線機◆

↓王国軍の無線機。マドラックスも奪って使っていた。



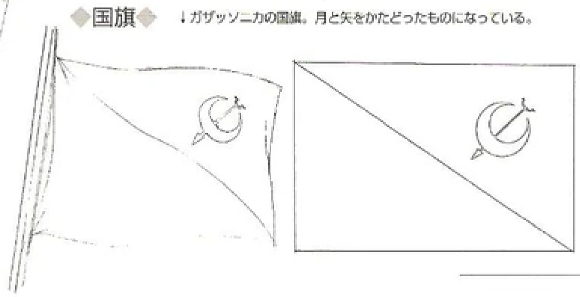
◆手榴弾◆

↓王国軍の手榴弾。安全把が外れてから5秒で爆発する。



◆国旗◆

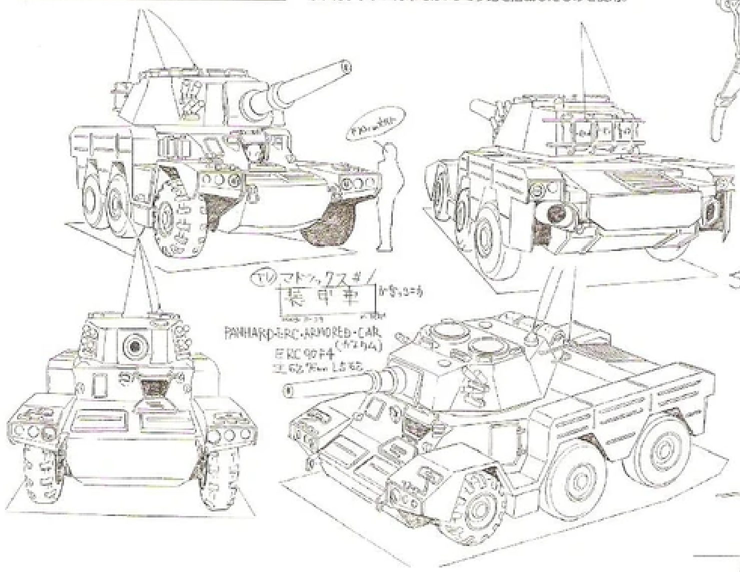
↓ガザッソニカの国旗。月と矢をかたどったものになっている。



車両ほか

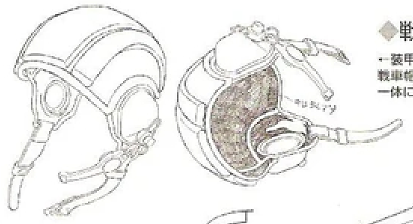
◆ガザッソニカ軍装甲車◆

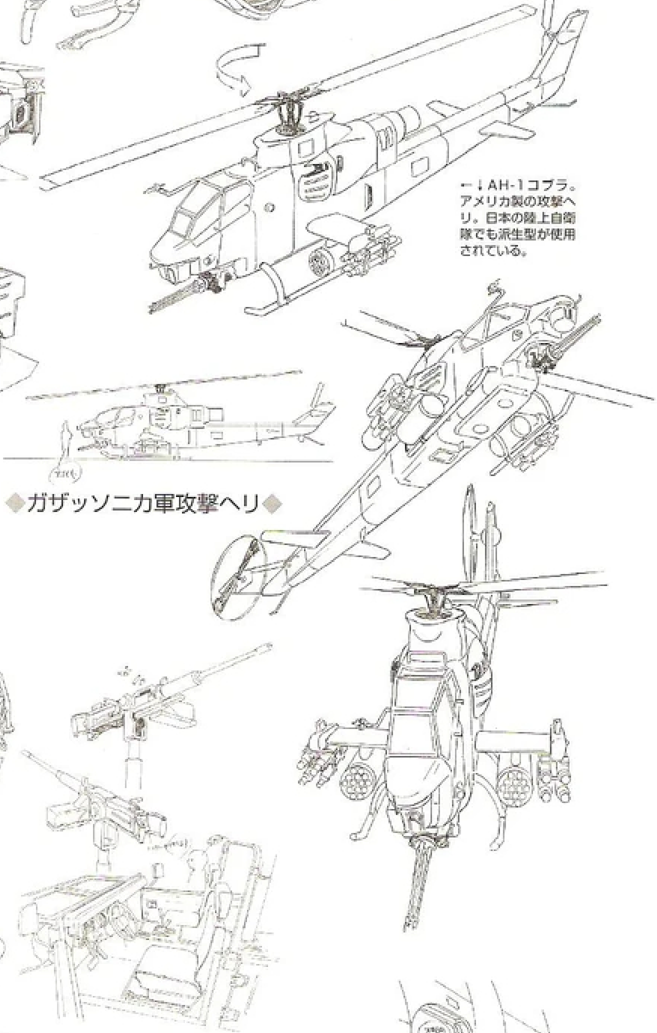
↓ERC90F4戦闘偵察車。通常は90ミリ砲を搭載するが、ガザッソニカ軍では75ミリ砲を搭載したものを使用。



◆戦車帽◆

←装甲車の兵士がかぶる戦車帽。ヘッドセットが一体になっている。



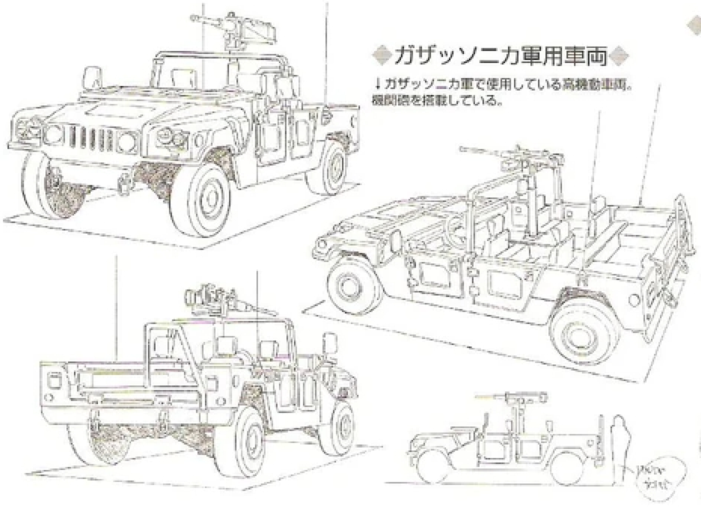


←↓AH-1コブラ。アメリカ製の攻撃ヘリ。日本の陸上自衛隊でも派生型が使用されている。

◆ガザッソニカ軍攻撃ヘリ◆

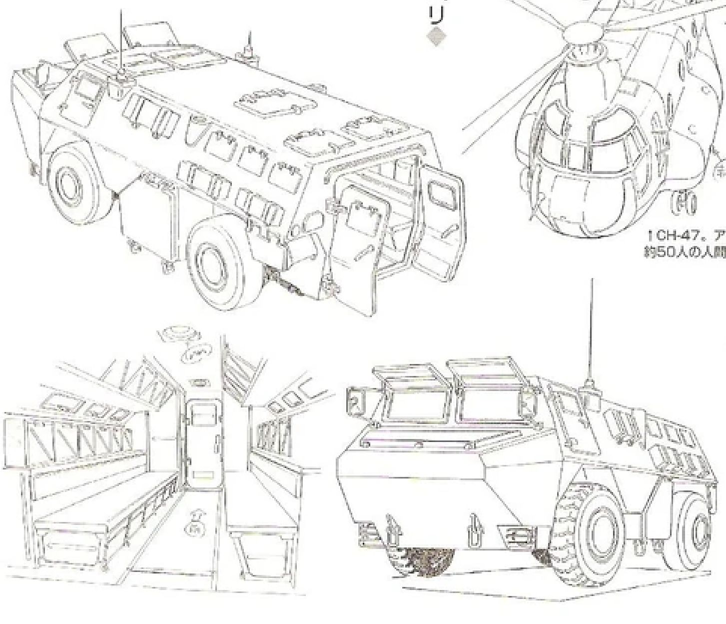
◆ガザッソニカ軍用車両◆

↓ガザッソニカ軍で使用している高機動車両。機関砲を搭載している。

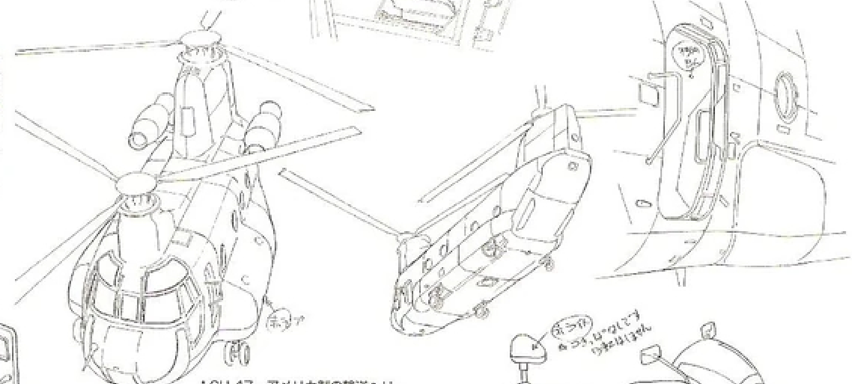


◆兵員輸送車◆

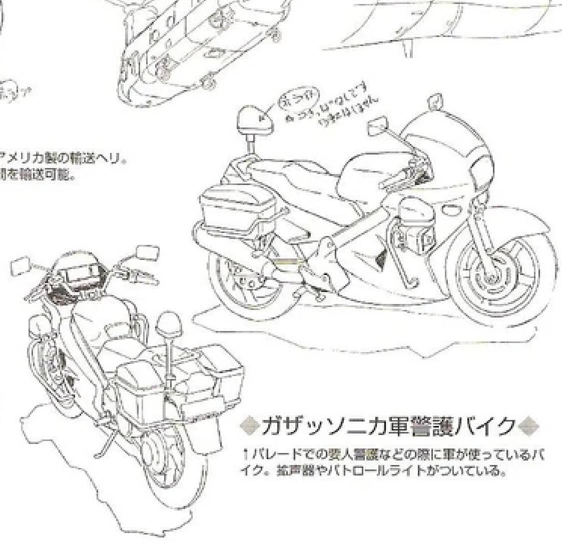
↓ガザッソニカ軍兵員輸送車。後部のドアから歩兵が展開する。



◆輸送用ヘリ◆



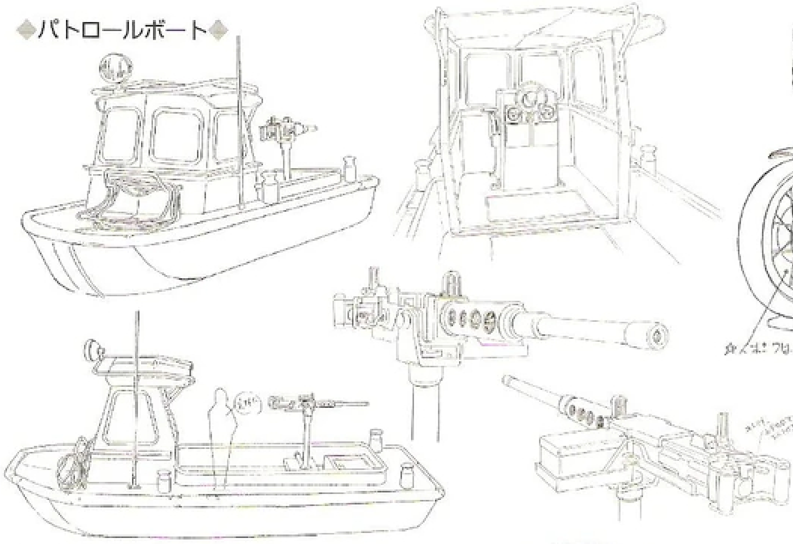
↑CH-47。アメリカ製の輸送ヘリ。約50人の人間を輸送可能。



◆ガザッソニカ軍警護バイク◆

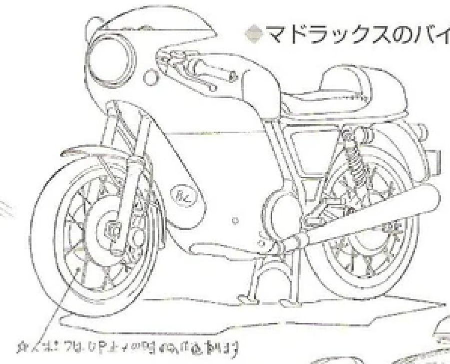
↑パレードでの要人警護などの際に軍が使っているバイク。拡声器やパトロールライトがついている。

◆パトロールボート◆

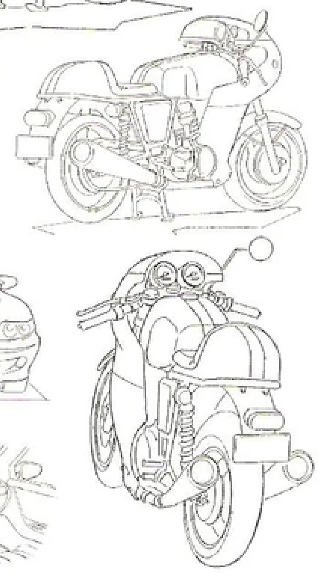


↑マドラックスとエリノアが乗ったパトロールボート。エリノアが乱射した機関砲は後部に搭載されている。

◆マドラックスのバイク◆

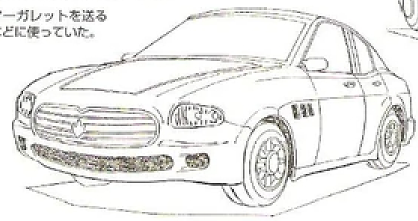


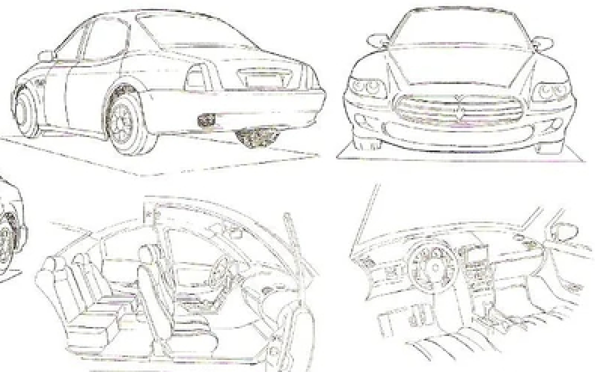
←マドラックスがクリスと出会った際、港まで乗ってきたバイク。



◆カロッスアの車◆

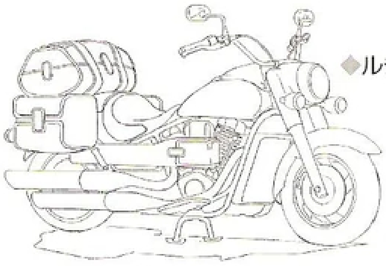
→マーガレットを送る時などに使っていた。

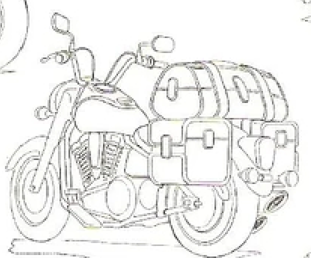


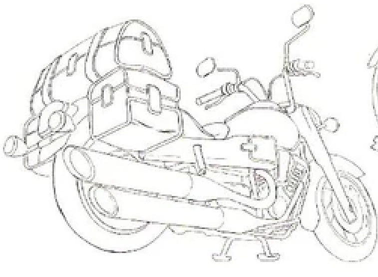


◆ルチアーノのバイク◆

←↓ライフルその他多くの荷物を搭載できる大型のバイク。

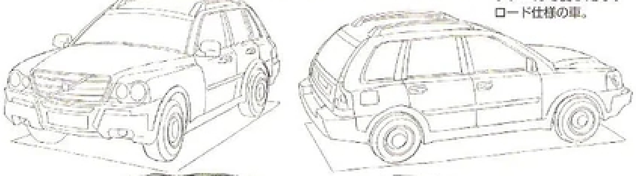


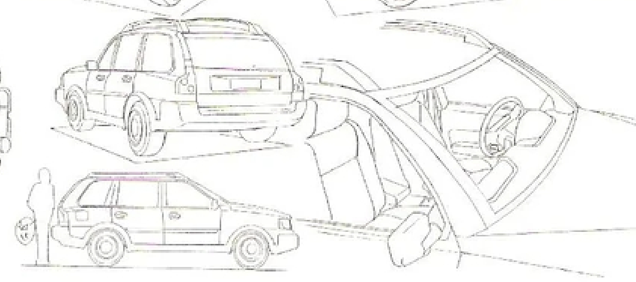




◆カロッスアの車2◆

←↓カロッスアがガザッソニカで使ったオフロード仕様の車。



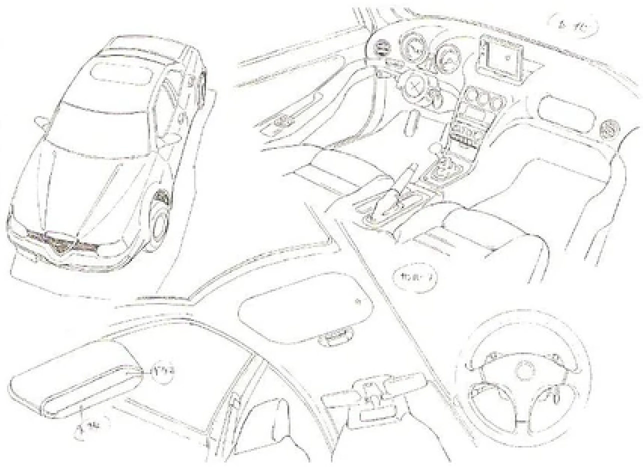


◆旅客機◆

↑→幼いマーガレットとプッペが乗っていた。

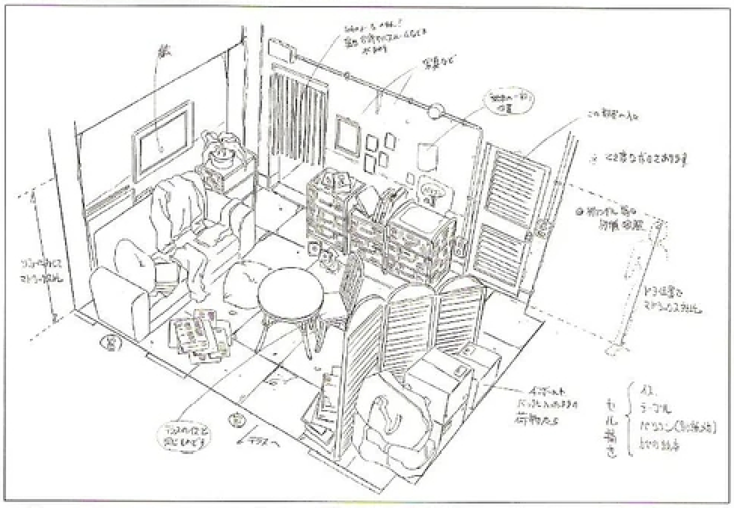


◆ヴァネッサの車◆

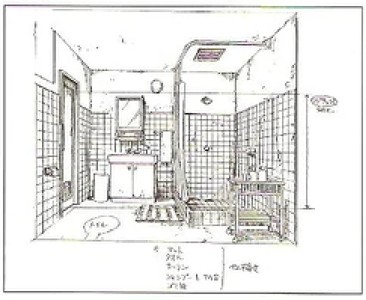


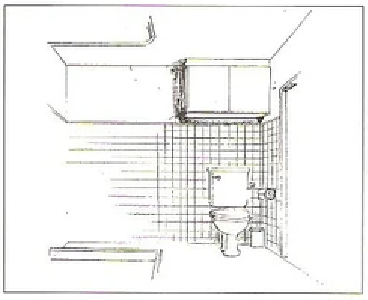
↑リゾートに出かけた時にマーガレットたちを乗せた車。

マドラックスのアパート

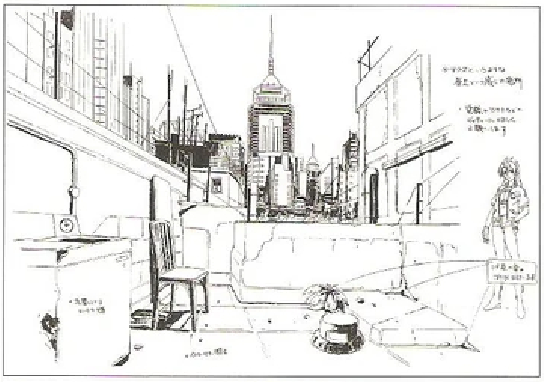


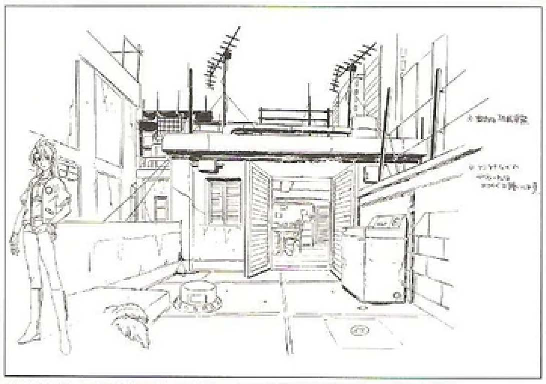
↑女性らしいものはほとんど見られないマドラックスの部屋。





◆テラス◆

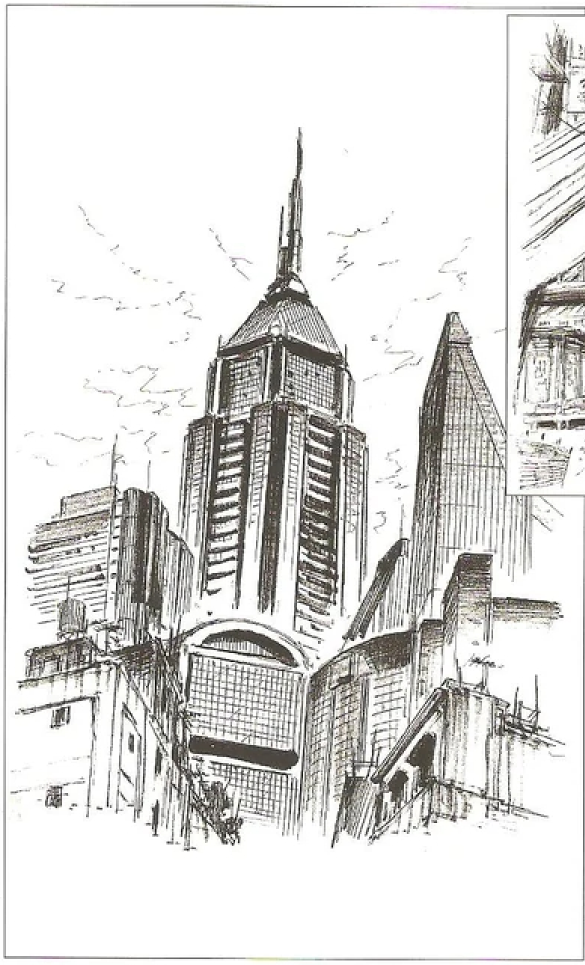


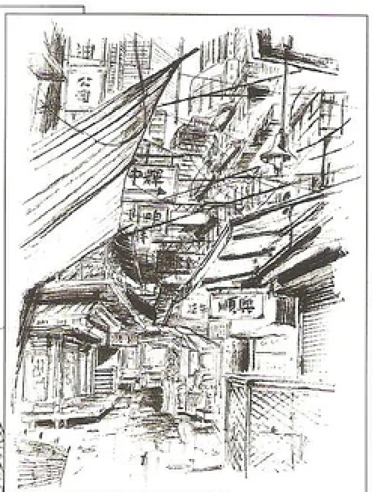


↑眺めは決して良くはないが、マドラックスはここでくつろぐことも多いようだ。

◆シャワールーム◆

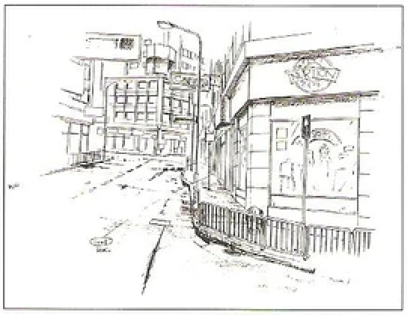
←トイレ一体型のシャワールーム。バスはついていない。

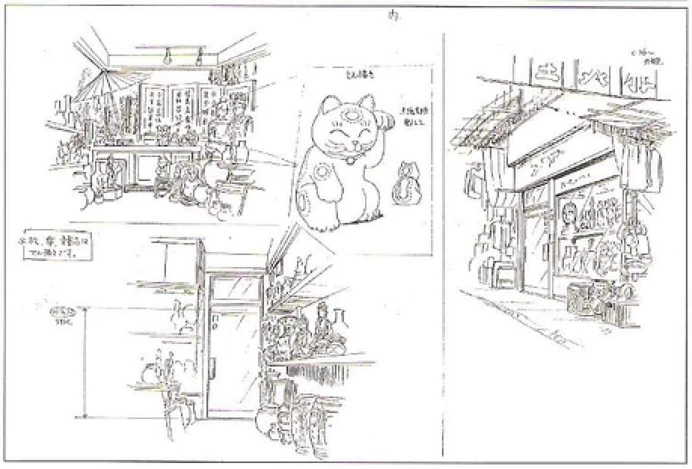




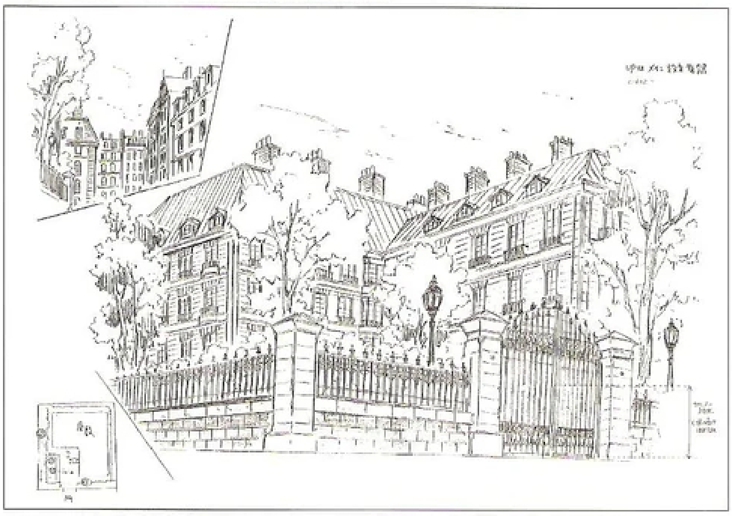
ガザッソニカ非紛争地域

←↓内戦による経済の疲弊が感じられるガザッソニカの都市。高層ビルもあるが、紛争発生前の建造だろう。



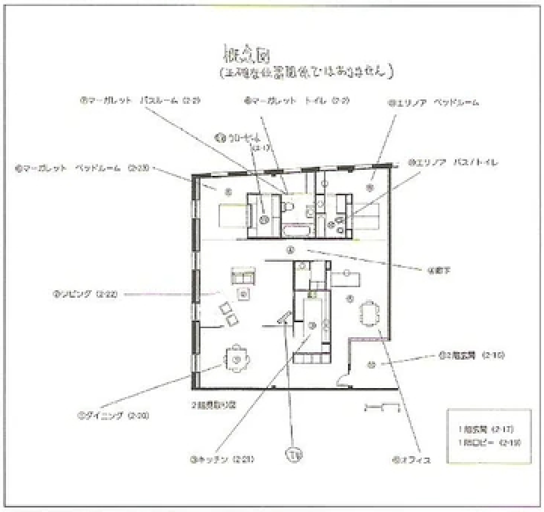


マーガレットのアパート



↑マーガレットとエリノアの2人が暮らしているアパート。立派な庭もあり、かなり高級な印象を受ける。

◆家の見取り図◆

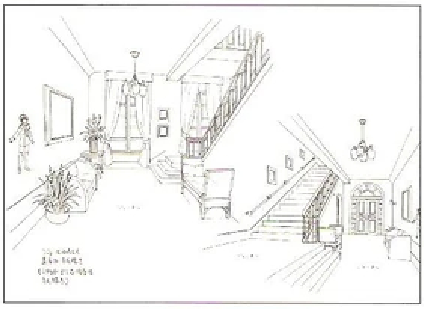


↑部屋の見取り図。2人で暮らしているにしてはかなり広い。

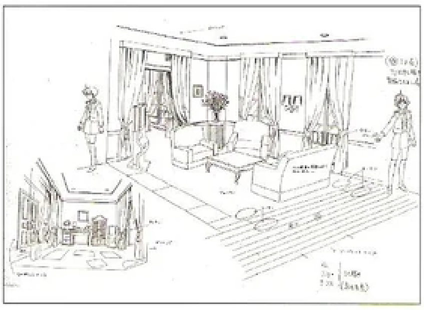
◆玄関◆

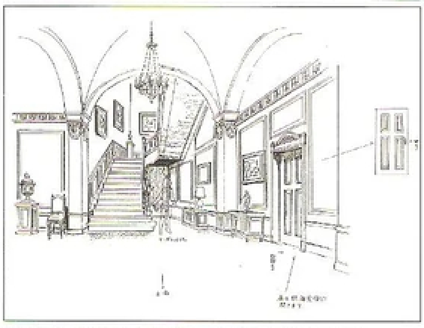


◆ロビー◆



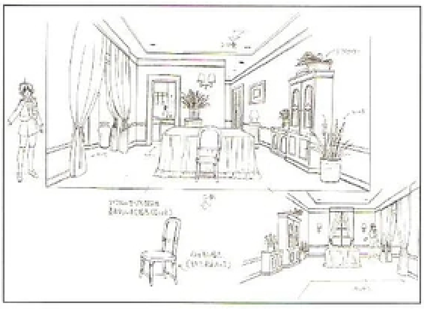
◆リビング◆



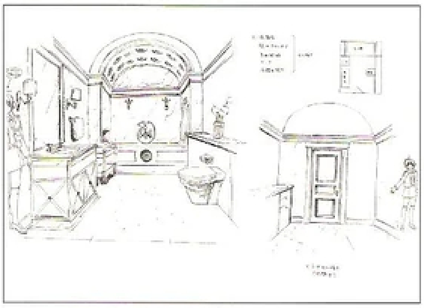


↑アパートの玄関とその中のロビー。実に豪華な作りをしている。

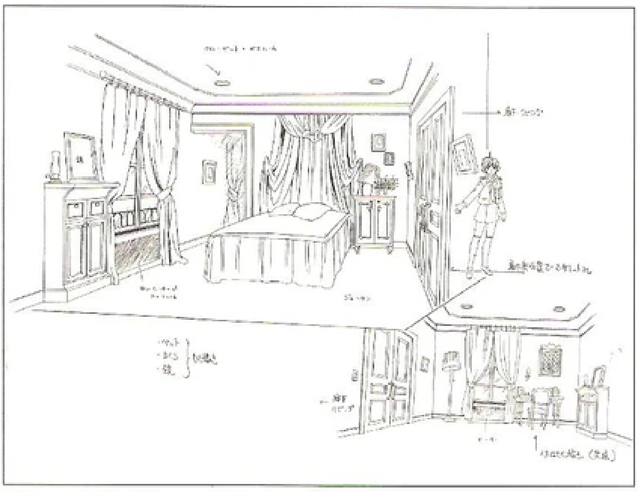
◆ダイニング◆



◆浴室◆

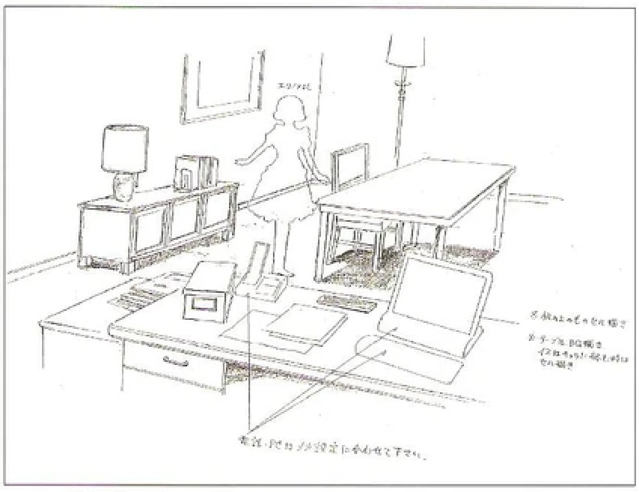


◆マーガレットの部屋◆



↑意外に私物が少ない部屋。エリノアが片付けているのだろうか。

◆エリノアの執務室◆



↑エリノアが、掃除洗濯炊事以外の仕事に使っている部屋。

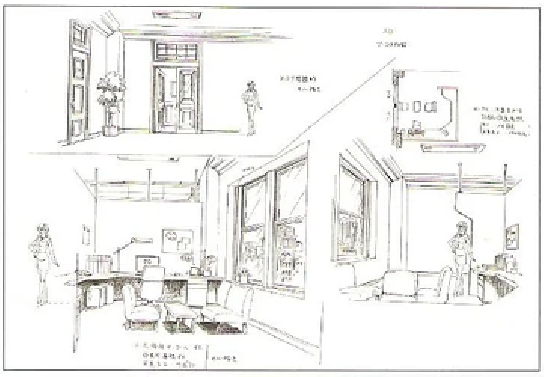
ブッグワルド社

◆正面エントランス◆



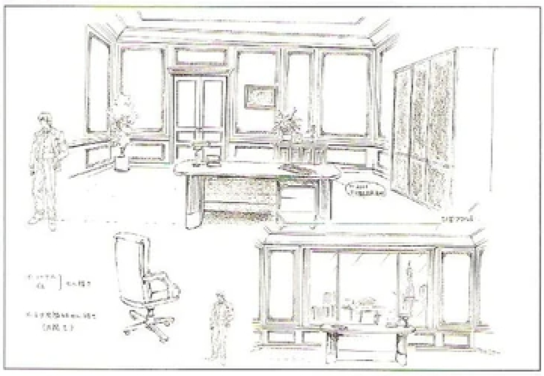
↑ヴァネッサたちが勤める会社。高層ビルではない。

◆ヴァネッサのブース◆



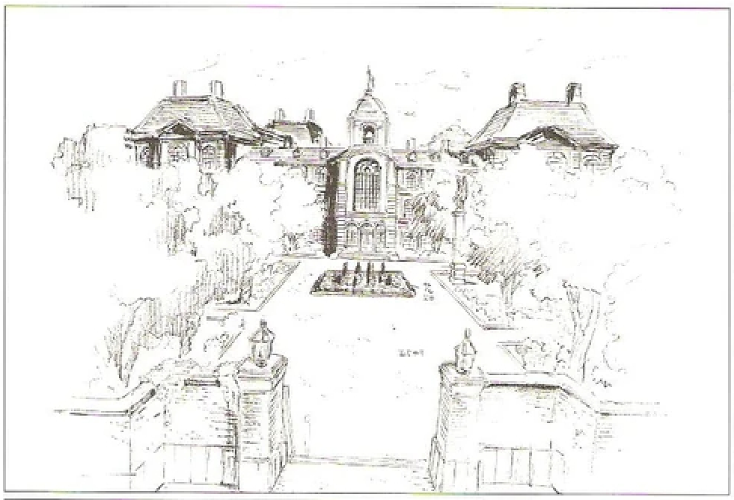
←ヴァネッサのオフィス。応接セットまで用意されている。

◆カロッスアのオフィス◆



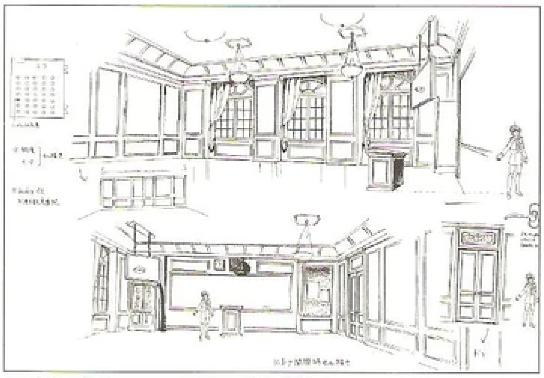
→カロッスアがブッグワルドで表向き働いている部屋。

マーガレットの学校



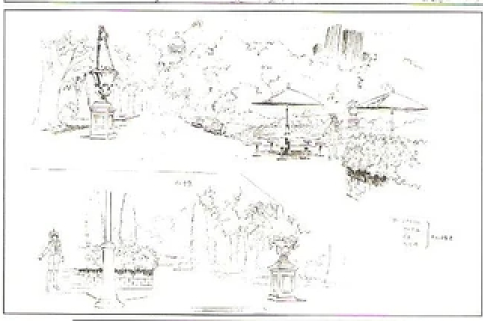
←マーガレットの学校。名門校らしい立派な作り。

◆教室◆



↑教室だが、マーガレットはあまり勉強していなさそう。

◆キャンパス◆



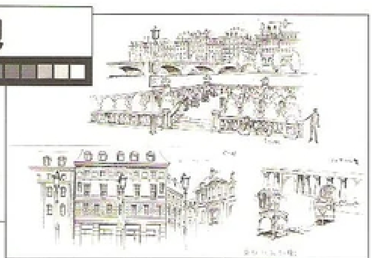
←校舎に劣らず立派なキャンパス。広さもかなりある。

◆中庭◆

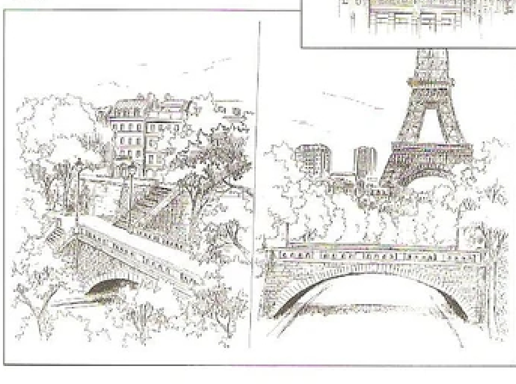


→落ち着いた雰囲気。花壇にはたくさんの花が植えられている。

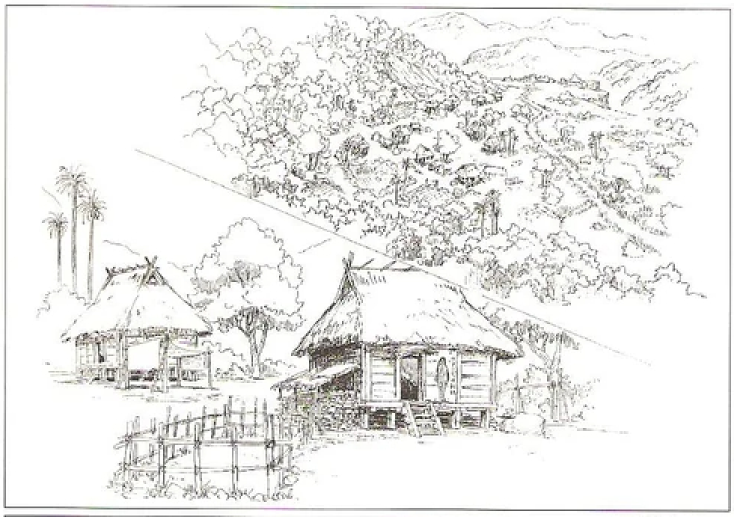
ナフレス市街地



→↓古ヨーロッパの町並みが残るナフレスの市街地。近代的なだけではなく、石造りの建物や橋が特徴的である。



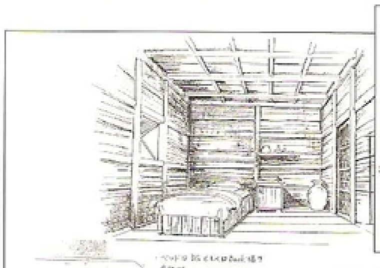
ドアイホ村

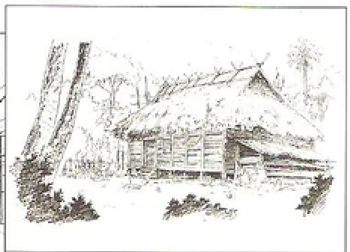


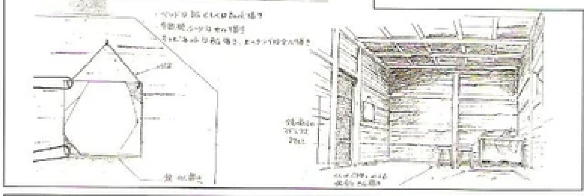


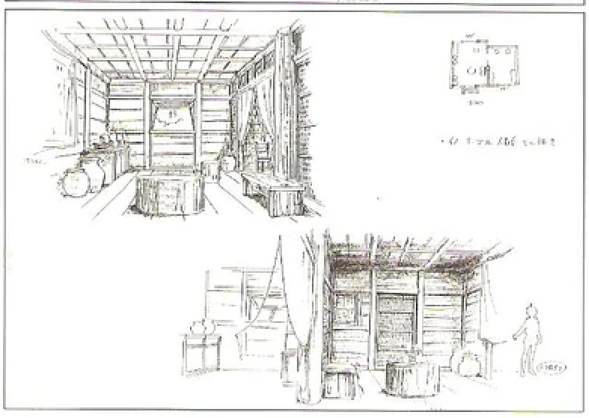
↑←熱帯の森林と、それにあわせた高床式の住居がある。

◆マーガレットたちのいた家◆



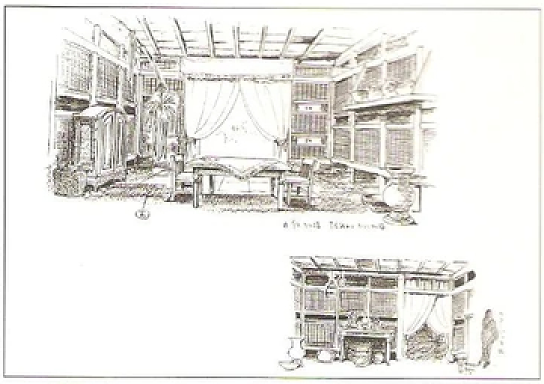


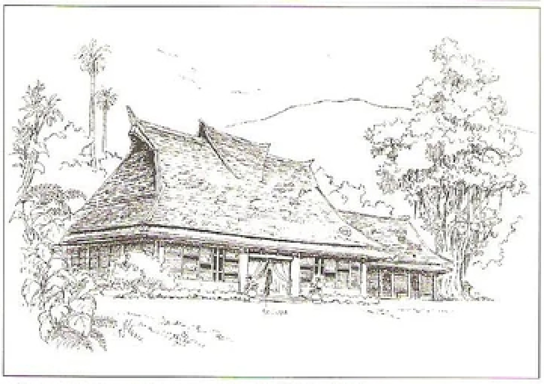




↑←マーガレットたちがドアイホ村に宿泊したとき泊まった家。質素な作りになっている。

◆クアンジッタの家◆



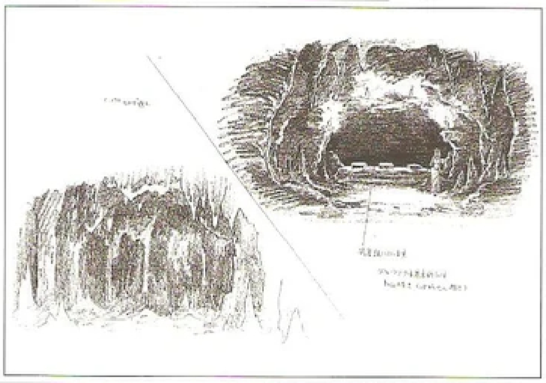


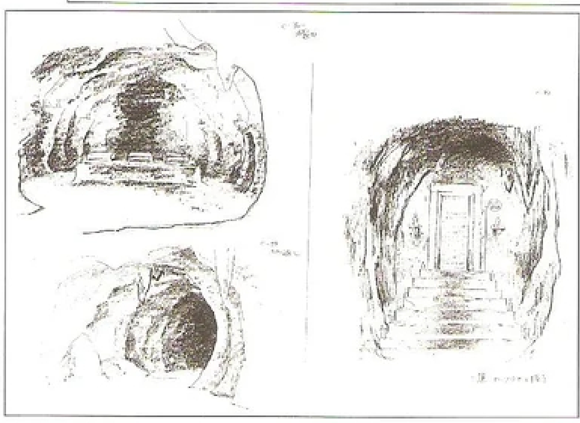
↑村の中でも大きく、調度品もしっかりとしたクアンジッタの家。

◆洞窟と祭壇◆

↑←クアンジッタが、マーガレットとカロッスアを導いて進んだ。



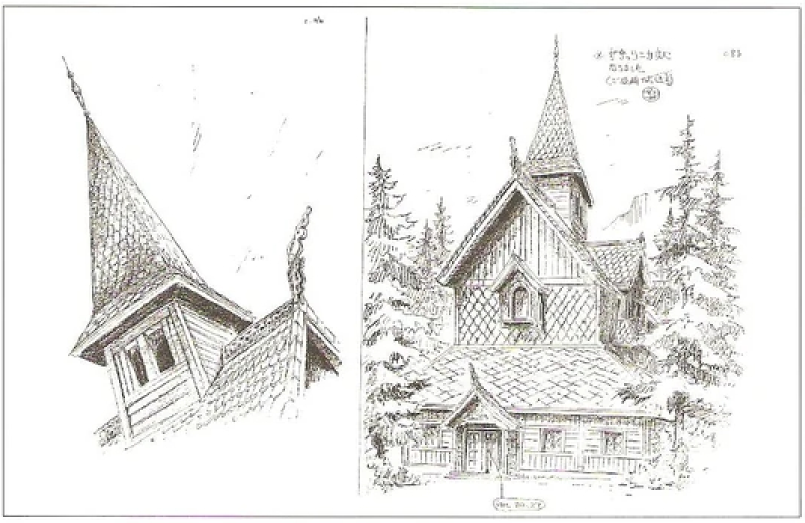




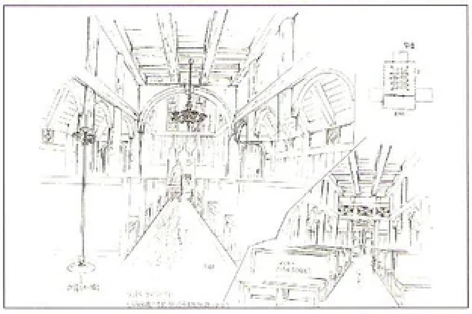
←洞窟の奥にある、3冊の本を置く祭壇。真実の扉が開く場所。

フライデーの教会

↓→フライデーがアジトにしている教会。森の中にたたずむ姿が、不気味な雰囲気を醸し出している。

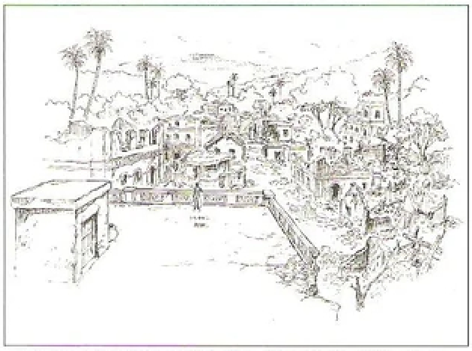








聖地

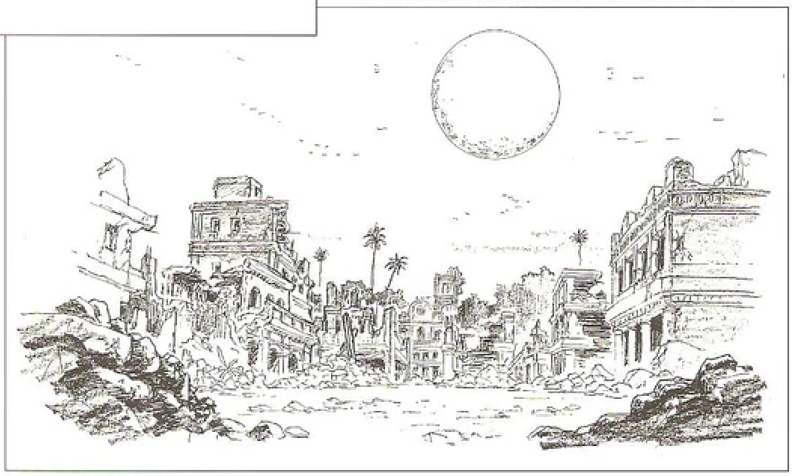


←↑↓3冊の本の力が発揮される場所、聖地。空には不気味に月が輝いている。



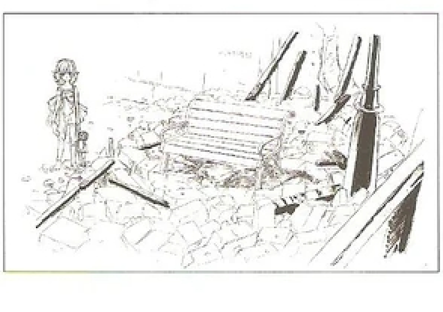
◆12年前の聖地◆

↑マドラックスの父とフライデーが対峙した時の聖地の姿。



廃墟

→レティシアとプッペがたたずむ廃墟。12年前からここの時間は止まり、2人はずっとここにいた。

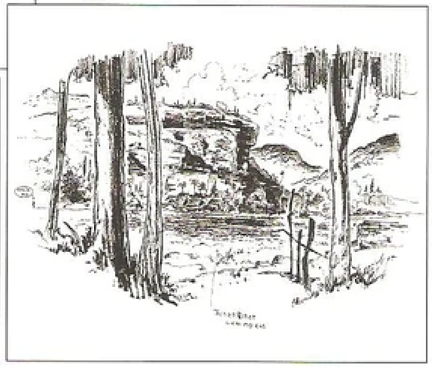




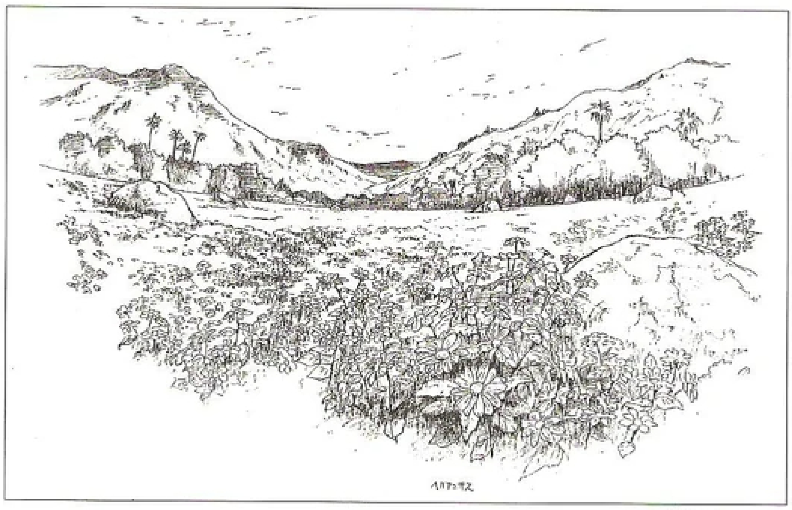
ガザッソニカ紛争地域

←↓うっそうと茂った密林、そして廃墟が続くガザッソニカ紛争地帯。東南アジアのような印象が強い。



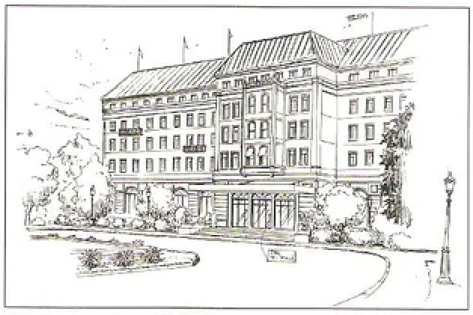



そのほか



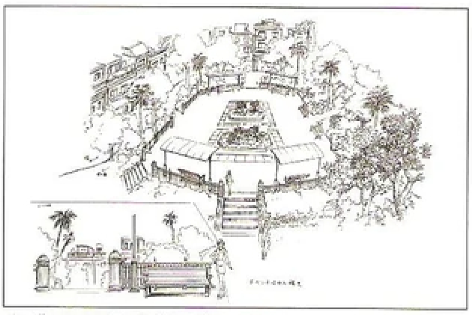
◆花畑◆

↑物語の終盤、エリノアが力尽きて倒れた花畑。



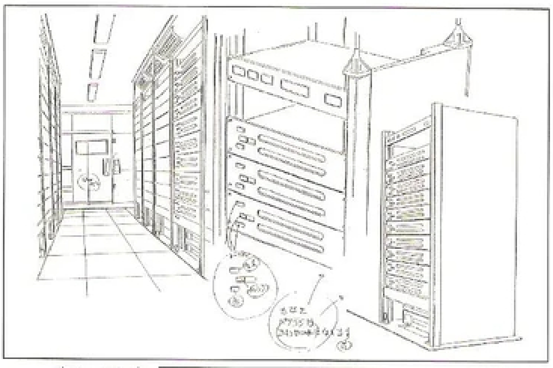
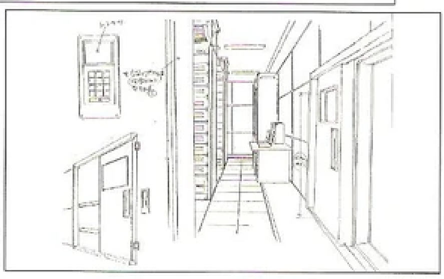
◆アーリウムホテル◆

↑マーガレットたちがバカンスにやってきたホテル。



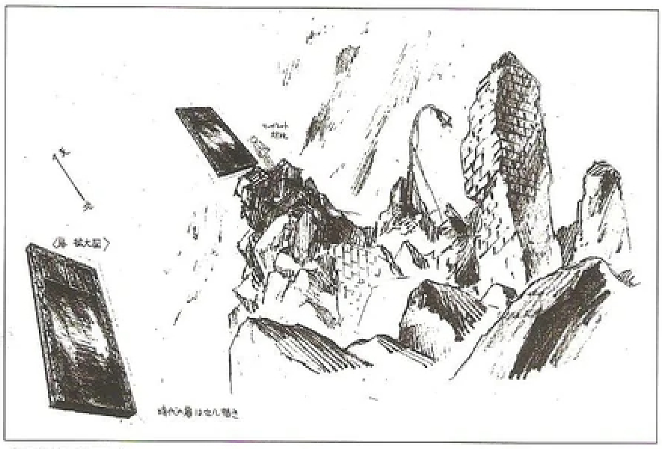
◆ダマンの町の公園◆

↑ヴァネッサが、PCデータを狙うアンファンに襲われた公園。

◆バッジスのコンピュータルーム◆

↑→バッジスがハッキングに使ったトゥルー・クラスタ。



◆時代の扉◆

↑最終話に登場した、マーガレットの望むものがあるという扉。

断片 FRAGMENT OF MADLAX

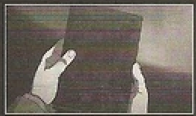
ここでは、10のキーワードからなる『MADLAX』の断片（Fragment）を検証し、より深く作品世界について考察していきたい。この10の断片が、さらに『MADLAX』ワールドを堪能する一助となれば幸いだ。

【本】 1

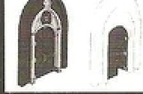
扉を開く鍵として劇中に登場する本は、エリエス文字で"目覚めの言葉"が記されている「ファースタリ」（フライデーが所有）、"本質の言葉"が書かれている「セカンダリ」（マーガレットが所有）、"真実の言葉"が書かれている「サースタリ」（クアンジッタが所有）の3冊が存在する。また、マドラックスは、セカンダリの破れたページを所有している。

それぞれ順に「知ること・自覚すること」「それを自分の中に取り込むこと」「そしてそれを解放すること」という3段階の意味合いが含まれており、。第2話で、マーガレットが「絵本」と表現しているように、その中身は絵と文章によって構成されている。「3冊の本は、『普通の人が読んだら死んじゃうよ』みたいな感じなんですけど、本質を掴んだ者はキッチリ読める……そういう意味では狂気が詰まっている本。マーガレットは無自覚にそれがわかっているんですよ。だから、「コレはダメ」っていう感じで、あまり本に人を近づけないようにしていたんです」（黒田洋介氏・談）。

実際、本に関わった人間……特にセカンダリは、劇中で人に影響を与えている。第6話でエリエス文字を理解していない（と思う）、モーリス・ロベスが、本の中身を垣間見てしまっただけで、本質がさらけ出されてしまった。一般人にとっては、まさに"禁断の書"と言える。



【扉】 2



資質を持つ者が、ファースタリ、セカンダリ、サースタリの3冊を揃えると現れるという「扉」。クアンジッタは、その扉を開けば、本来優しさ、温かさ、本来あるべき自分を知ると語る。だが、フライデーは、「人間の奥底に眠る衝動という名の旋律が流れている」という（そしてそれは「崇高でプリミティブなもの」だとも語っている）。

また、扉には2種類あるということも描かれている。ひとつは「真実の扉」、もうひとつが真実の扉を開いた後にその存在が知られる「時代の扉」。先程クアンジッタやフライデーが語っていたようなことは、おそらく前者に相当すると思われる。すなわち、「本質を見つめる扉」ということだろう。

だが、時代の扉とは一体何か？　レティシアは、時代の扉について『時代の扉を開けば、あなたの願いが叶う』とマーガレットに言っている。ここから類推するに、時代の扉は真実の扉の第二段階にあたり、本質と対峙し、それを受け入れた者が望んでいる世界を、自身の本質に基づいて構築する最終過程として用意されているものではなかろうか？故にマーガレットは、マドラックスとレティシアたちと向き合い、彼女たちも存在する世界＝歪みのある世界を提示し、その中で生きることを望んだわけだ。

そして、"扉"という設定も、「別の場所へと進む」「新世界が開かれる」というようなイメージを象徴している。

【アンファン】 3

世界的盗聴システム「エシュロン」を凌ぐ能力を持つと言われている国際犯罪組織・アンファン。ガザッソニカの内戦も陰で操り、政府軍、ガルザ双方に武器を無償提供し、12年もの長きに渡り戦わせ続けている。

情報を巧に操り、邪魔な存在は次々と排除していく実行力は強大で、ナフレスの政治家、ピエデリカ・モレイは、ガルザのリーダーであるミン・デュルクの息子、クリス・クラーナをガザッソニカに派遣して、内戦の実情を探らせようとしたが、アンファンの「エルダ・タルータ」の罠にかけられた実の娘、アンヌ・モレイの手により殺されてしまう。この他にも、劇中で様々な人間を葬っている。

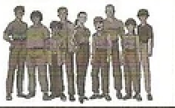
政府軍、ガルザ双方の高官はアンファンのメンバー（＝双方の軍も手足）。さらに、カロッスアのようなブッグワルドに務めている人間や、マクレーの如く組織に吸収されてしまう者、普通の構成員、傭兵などなど、所属人員の規模は計り知れない。

また、情報を扱う組織だけに、構築されたシステムは実に堅牢。世界で3番目の処理速度を誇る、バッジスのスーパーコンピュータ「トゥルー・クラスター」による侵入でさえ、見事に撃退している。

フライデーは、おそらく組織のボス格だと思われるが、組織自体の詳細の多くは不明。あるいは、フライデーも単に幹部のひとりで、ガザッソニカのような国が、まだ他にもあるのかもしれない……。



【ガルザ】 4



近代化を推し進めようとしたガザッソニカ国王に対して、12年前に一部の軍人たちが反発し、武装抵抗組織「ガルザ」が誕生した。

プロデューサー・北山茂氏の作成した資料によると、正確には把握できないが、訓練され、組織化された兵力は約4～5万と推定。潜在的なゲリラを含めると、政府側の陸軍兵力を上回るという説もあるとか。

また、反乱軍の為、機械化や装備の平均化が遅れており、部隊を編成するだけの戦車・装甲車などは保有していない。もっぱら、携行型対戦車兵器・対空兵器（RPGロケットランチャーやスティンガーなど）といったものに依存している。

また、組織化された部隊においては共通の武器が支給されるが、鹵獲した政府軍の武器はゲリラ等によって利用されている。

だが、これはあくまでも演出。裏に回ってみれば、ガルザもアンファンによって操られている組織に過ぎない。支給されるという武器も、アンファンから提供されているもの。おそらく、アンファンがその気になれば、ガルザも一気に近代的な兵器を手に入れることができると思われるが、それではルートをいぶかしがられ、内戦の呈を維持できない。そこで、ガルザはあくまでも"ゲリラっぽい"味付けがなされているのだろう。なんにせよ、たまったもんじゃないのは、そんな演出によって戦場で戦わされている末端の兵士たちである。

【カンナビノイド】

エリック・ジランが「メモリーズ・オフ（記憶封鎖）」をした際、大量に分泌した神経伝達物質・カンナビノイド。これは物語の中だけの設定ではなく、現実の世界にもカンナビノイドは存在する。

カンナビノイドは、痛みの軽減や運動機能の制御、そして、物語の設定と同じく、記憶にも作用する性質を持っている可能性があると言われている。

そのカンナビノイドだが、どこにあるかというと、それは「マリファナ」の中。マリファナの原料である大麻には、60種以上のカンナビノイドが含有されている。

そんな物質をエリックは自分の中で生成してしまったのだから、相当“ハイ”な状態だったと思われる。そのハイな状態をもって、苦い記憶を封じ込めていったのだろう。しかも、それを意図的にやったというよりかは、潜在意識がそう働きかけたといった感じだろう。付け加えるならば、記憶の封鎖が、エリックを、具体的な記録物として残る本を探す探偵「ビブリオ・ディティクティヴ」にした要因なのかもしれない。

現在、その鎮痛作用などから、医療目的としての大麻使用も議論されているが、日本では通常の吸引使用はもちろん、医療目的であってもその使用は禁じられ、違反した場合は法によって取り締まられる。くれぐれも、エリックのように辛い過去があったとしても、大麻に手をださないように。注意！



【エリエス文字】



エリエス文字は、ガザッソニカに古くから伝わる文字。ソルドフィーヌ大学の名誉教授が、内戦の始まる前に紀元前にエリエス文字が書かれたと考えられる壁画の調査へ向かった（壁画は3つまで発見）。当時としては、四大文明のいずれにも属さない文字の発見だと騒がれ、学会も大いに湧いたという。

しかし、激しい内戦によりガザッソニカでの調査は困難になり、あまつさえ、最初にガザッソニカを訪ねた調査隊は現地で謎の壊滅を遂げ、教授だけが生き残って帰国した。しかし、その教授もまた、家族を道連れに自殺をしてしまう。

現地では、エリエス文字を「サルオンの神言（しんごん）」と呼ばれている。クアンジッタによると、セカンダリには「サークス・サーク」、ドアイホ村の壁画には「エルダ・タルータ」と書かれているという（これら言葉については別項を参照）。

この「神言」という言葉だが、神のお告げ、神託、神ないしは神事に関する語りごとを意味している（ちなみに、本来の読み方は「かみごと」、または「かむごと」）。

そしてもうひとつ注目したいことがある。それは、「神言」と同じ響きを持つ言葉「真言」。こちらは仏教用語で、真実の言葉、またはその働きを表現する“秘密の言葉”の言葉ということを指している。ここに、“二重の意味”を感じるが、あくまでも想像の範疇。真偽の程は不明だ。

【ブッグワルド】

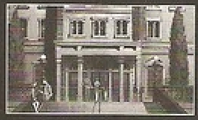
ヴァネッサ、カロッスア、チャーリーが働くブッグワルドは、経済大国であるナフレスの中でも最大の商社である。ヴァネッサとチャーリーは、そのブッグワルドの国際部に勤務している（カロッスアは不明）。

経営は多岐に渡り、ガザッソニカにおいては、非武装地域にある様々な施設の、約三割に資本を投下している（ガザッソニカ以外の国にもレジャー施設を建設）。さらに、その系列会社にはラップトップパソコン「S-32」シリーズなどを販売するタービック社なども含まれている。

ちなみにだが、役員専用の高級ホテル「アーリウム」も所有しているので、福利厚生施設は充実していると思われる（重役だけかもしれないが）。

一方で、裏ではアンファンと繋がり、政府軍とガルザの両陣営に資材の販売を行っている。これにより、ブッグワルドは莫大な利益を獲得している。

この、アンファンとの深い繋がり、また、カロッスアのような社員がいるという事実からも、ブッグワルドは実質的にアンファンの支配下にあると考えていいだろう。ただ、ブッグワルドの創業にアンファンが関わっているのか、それとも、いずれかの時期に乗っ取ったのか、その経緯は不明だ。いずれにせよ、カロッスアと同様、アンファンにとっての表の顔といった役割を担っていると言える。恐るべきはアンファンだ。



【ヘリアンサス】



第4話で、マーガレットが死んでしまったアンヌ・モレイに捧げた花「ヘリアンサス」。

ヘリアンサスとは、ヒマワリの属名。しかし、単にヘリアンサスというと、コヒマワリやヒメヒマワリ、ヤナギバヒマワリなど、ヘリアンサス属の多年草類を指すことになる。本作では、設定画から察するに、ヤナギバヒマワリをして、ヘリアンサスと総称しているようだ。

ヤナギバヒマワリは、英名を「ゴールデン・ピラミッド」。北アメリカ原産の宿根草で、葉が柳の葉のように細長いことから、このように命名された。

草丈が高く、時に2mにも達するものもあり、耐寒性、耐暑性が高く、育てやすい花として知られている。開花は、8月下旬から始まり、9月に満開になるという。

そして、花言葉は劇中でもマドラックスが語っていた通り、「誘惑」。同時に、「崇拝」「敬慕」といった意味もあるらしい。

だが、ヘリアンサスではなく、ヤナギバヒマワリとして調べてみると、花言葉は「君の傍にいるよ」「あこがれの貴方」等。アンヌ、そしてマクレーは、「エルダ・タルータ」という言葉によって、本質の世界へ“誘惑”されたわけだが、アンヌに対してマーガレットが哀れみ、慈しみの気持ちがあったと考えると、「君の傍にいるよ」という花言葉も、またあながち的外れでもないと思う。

【バートン家】

ナフレスでも貴族の家柄にあるバートン家。裕福で、周囲から一目も二目も置かれるセレブである。だが、そんな貴族であるところのバートン大佐が、何故ガザッソニカで軍人として戦っていたのか？

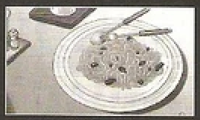
まず、バートン大佐の立場は、傭兵部隊の軍事顧問という設定。「元々、貴族階級の家って、代々軍人をやってる所が結構あることなんです。バートン家もそういった家系なんです」（北山氏・談）。だが、今の時代で敢えて傭兵になるというのは何かしら理由があると思うのだが、「お城の維持費が大変だから（笑）」（黒田氏・談）とか、「固定資産税が払えない（笑）」（北山氏・談）とのこと……でいいんですか？

また、お互いを知っている風だったバートン大佐とフライデーの関係は、「アンファンの情報とバートン大佐の武力がシンクロして、一流の傭兵集団としていろんな国から招聘され、多額のお金をもらっていたというような、お互い持ちつ持たれつの関係だったんですよ。それが、ガザッソニカの一件に関しては、フライデー自身が仕組んだことなので、バートン大佐が『おいおい、どういうことやねん』というような所から亀裂が始まった」（黒田氏・談）そうだ。

ちなみに、バートン大佐もフライデーから呼ばれていた「マドラックス」という名前だが、これは傭兵としてのコードネーム。（実際、「マッド」と名乗っている傭兵は多いとか）。父から子へ、この名前は引き継がれたことになる。



【パスタ】



マドラックスとマーガレットが好きな食べ物、それはパスタ。2人とも、劇中で「今日はパスタにしよう」とか「パスタが食べたい」というようなことを言っている。

何故、パスタというチョイスなのだろうか？　「これから行うミッションより、今日のメシのことを考えてしまう……要するにマドラックスにとって、ジャングルの中で戦ったりすること自体が非日常じゃなくて日常なんで、一般の人が『帰ったらテレビ、何を観ようか』と考えるような普通のことをパスタに置き換えて、マドラックスに言わせたんです。あとは万国共通みたいな所があったんで、パスタだったらガザッソニカでもナフレスでも作れるかなと。それから、マドラックスやマーガレットの家で焼き飯とかが置いてあったら絵にならないですし（笑）、単純に絵になる料理っていうと、パスタとかピザはポンと置いてあるだけでどんな料理かわかるものですから。それくらいのチョイスです」（黒田氏・談）。

また、マドラックスに「パスタが食べたい」と言わせた手前、マーガレットもパスタ好きにしたという事情もあるが、女性にも人気が高いメニューということもイメージに合致していたという。

ちなみに、ならば黒田氏もパスタが好物なのかと思いきや、「いや、僕が好きなのはハンバーグとカレーライス……って子供かよ（笑）」とのこと。

真下耕一×黒田洋介×北山 茂

（監督）（脚本・シリーズ構成）（プロデューサー）

全てはこの3人から始まった！ 監督の真下耕一氏、脚本家の黒田洋介氏、プロデューサーの北山茂氏にお集まり頂き、『MADLAX』を"解剖"すべく、スペシャル鼎談を開催。製作の発端、舞台設定、作品に託したメッセージなど、本作の正体がここで明らかになる！

多重人格ではない

――今回の『MADLAX』は『ノワール』(註1)の流れを継いで始まった作品ではあると思うのですが、『ノワール』が終わって、どういった形で企画が動き出したのでしょうか？

真下　もうちょっと『ノワール』のダークな部分を攻めた作品を作りましょうという所からなんですけど、それ以前に別のデザインもやってて、「でも、こういう話だったらまんま霧香、ミレイユ(註2)と似てても、むしろいいかもしれないね」という……感じだったっけ？

北山　僕が覚えてるのは、監督から電話がかかってきて「ヒマ？」と言われて遊びに行ったら、企画書を出されて…。

一同　（笑）

真下　えー、そうかなぁ？　企画書じゃないでしょ、多分（笑）。

北山　いやいや、企画書でしたよ。

黒田　僕が一番最後に入ってきたんですけど、北山プロデューサー御自ら、先に第1話の脚本を書かれていたんですよ。そして、第2話の脚本はなんと監督が書いていて！　で、ある程度「こういう感じの話だ」ということが書かれた企画書みたいなものと、その脚本があって、1話と2話見たら全然テイストが違っているんですよ（笑）。1話目が『プライベートライアン』(註3)みたいな話で、2話目は妖艶な女殺し屋が出てくるような話。それで、「これは一体、何だろう？」と思っていたら、監督がポンと肩を叩いて、「まぁ、これでなんとかひとつ」と。

一同　（笑）

黒田　凄い投げ方をされまして（笑）。それで雰囲気をいただきつつ、このシリーズの流れでこういうキャラを入れてみてはどうでしょうかとか、北山プロデューサーから「メイドは絶対つけろ！　メイドは絶対つけろ！」と強く言われて、「わ、わかりました！　メイドをつけます！」という感じで（笑）、お2人と話し合いつつ、今の形にまとまっていきました。

真下　なんで「メイドをつけろ」って言ったんだっけ？

北山　いや、もともとお嬢様にメイドがついているという設定がいいかなと思ったんですよ。今、アニメでメイドっていうと、だいたい視聴者の感情移入する主人公の男の子についてるってのが多いんですけど、女の子についてるメイドっていうのはなかったかなと……まぁ、そんだけですけど（笑）。

――マーガレット役に桑島法子さん、リメルダ役に久川綾さんという、ある意味『ノワール』の流れを引き継いでる部分(註4)がありますけど、そこら辺は意図的に？

黒田　純粋にオーディションした結果ですよ。確かに、『ノワール』のイメージがあるからオーディションにも来ていただいたと思うんですけど、だから絶対に「即、決定！」というわけじゃなくて、話し合った末のキャスティングですから。

――オーディションで決まったとおっしゃいましたが、何か決定打になったものは？

北山　マーガレットは、変な話、また桑島さんだといかにも狙ってるように思われるかなと思ったんだけど、色々と録っている内に、「それでもやっぱり桑島さんだよね」と確信して、決まりました。逆にマドラックスは最後まで決まりませんでしたね。

真下　音響監督のなかの（とおる）さんが、3日くらいスタジオに籠もって悩んでいましたね。キャスティングも、ある意味デザインじゃないですか。同じ1色で染まるわけにはいかない。こっちが黒だったらこっちが白だとか赤だとか、そういう設計がありますよね。そのデザインを、最後の最後までどうしていくかと悩みました。そういう意味では、なかのさんのデザインは的確だったよね。

黒田　マドラックスとマーガレットは外見があれだけ違いますけど、同じ年齢という設定ですよね。なので、あまりお姉さんっぽい声じゃダメなんです。そういう所で、小林沙苗さんのような、若々しいというか、発展途上というか、「洗練されていく途中」というようなイメージは良かったんじゃないかなと思います。逆に、大人の女であるリメルダは、久川さんにガッチリとやっていただいた方が、マドラックスとの差が出るし、そこらへんはバランスだと思うんですよ。全体的な、ストーリーも見つつキャラクターも見つつキャスティングしていくという。バランスによっては、ひとり変わるとあっちもこっちも変わったりすることもあるので。

――ちなみに『MADLAX』ってタイトルはどこから出てきたのですか？

真下　北山に「ちょっと読んで」って言った企画書についていたんだよね。

北山　タイトルはもう（監督の中で）決まってました。

黒田　メインキャラの名前のほとんどは、企画当時のものを使ってるんですよ。マドラックス、マーガレット、エリノアとか。

北山　だから面白いのは、キャラが生まれた時期によって（名前が）イギリス風だったりフランス風だったりと違うんですよ。同じ国なのに（笑）。その時に考えていた設定段階と、お話や舞台が変わってきてるから。

黒田　そうです。最初はイギリス系だったんですよね。なんですけどやっぱり武器輸出といったらフランスだろうとか短絡的な考え方から（笑）、フランス系に移しちゃったという。

――『MADLAX』の由来はなんですか？　最初タイトルを見た時、「マッドラックス」と読んでしまったのですけど。

真下　でもその通りですよ。それで2人の女の子が登場するんです。本来ひとりだったんだけど、「どうせひとりで二重人格やるよりも、別人にした方が面白い」となって。

黒田　物理的多重人格現象とか、そんなこと言ったりとかしたんですけど「それはもう多

真下耕一
KOICHI MASIMO

監督。ビィートレイン株式会社代表取締役。
主な監督作品：「無責任艦長タイラー」「ノワール」「.hack//SIGN」「.hack//Liminality」「Avenger」「吟遊黙示録マイネリーベ」など。最新作は「ツバサ・クロニクル」

×

黒田洋介
YOSUKE KURODA

脚本家、漫画原作者。有限会社スタジオオルフェ取締役。
主な脚本作品：「無限のリヴァイアス」「スクライド」「おねがい☆ティーチャー」「おねがい☆ツインズ」「ガングレイヴ」「リングにかけろ1」など。最新作は「極上生徒会」

×

北山 茂
SIGERU KITAYAMA

ビクター・エンタテインメント株式会社・映像プロデューサー。
主なプロデュース作品：「ジオブリーダーズ」「トライガン」「エクセルサーガ」「ノワール」「ガングレイヴ」など

重人格じゃなくて別人なのでは？」というツッコミを誰もしないで、流れるままにいってしまったと…（笑）。

――最初の企画書の段階で、多重人格的な話をしようという考えが？

真下　いや、多重人格じゃないんですよ。渋谷の喫茶店で北山と話してた時に、「今、そこを歩いている女の子だって、実はいろんな側面を持っているよね」みたいな所から、元々はひとりだった人間が、黒田洋介が入ってきて２人になっちゃったと（笑）。その方が、行ったりきたりもないし、描きやすいし、むしろそういう設定の方がわかりやすい。ひとりでやるとジキルとハイドみたいになっちゃいますしね。

黒田　あと単純に監督に言われたのは、「戦場」という非日常における優しさ、慈愛みたいなものと、普通のなにげない日常の中での見えない狂気みたいなものを描いていきたいと強く言われました。なので、戦場の話だとちょっと優しかったり、いいシーンを作ったり、心通わせるシーンを作ったりとか。逆に日常の方は、悪い幻想を見たり、殺人事件が起きたり、ナンパしてくる男がいたり、骨折ったりとか（笑）(註5)。日常を普通に生きていることが、「結構危なくないかい？」みたいなイメージを、多少意識して書いてたというのはあるんですけど。

今の日本は『MADLAX』

――『ノワール』の場合2人で世界各地を回ってましたが、『MADLAX』の場合ガザッソニカとナフレスの2カ所だけで話が進んでいきますよね。

黒田　それも監督に「『ノワール』は美術監督にメチャクチャ怒られたから、今回はあんまり場所は移動しないで」って言われて（笑）。

真下　俺そんなこと言ったかなぁ（笑）。

黒田　言ったっスよ！　メチャクチャ縛りになってたんですよ。でも、その国内でいろんな場所行っちゃったんで、たいして変わらなかったとは思うんですけど（笑）。

真下　でもまぁ、ガザッソニカは架空のアジアで、ナフレスがフランスとかヨーロッパ系の国というのはひとつのポイントなんです。どっちがほんとにゴージャス、ラグジュアリー、あるいはリラックスで、どっちが狂気なのかと。今、この日本が東南アジアだったりフランスだったりという乖離はもう現実にあるわけじゃないですか。だから場所も本来はひとつなんですよ。で、当然ひとりだった女の子を2人に分けちゃったわけですから、場所も2つになっちゃったとか……そういう理知的なことを言ってよ（笑）。

黒田　現実に生きてますので（笑）。

真下　だからナフレスもガザッソニカも、日本そのもの。そこを“新しいカメラ”で撮影すると、ああいう風に映る。フランスチックだったりアジアンチックだったり、というだけです。黒田洋介のさっきの発言は忘れてください（笑）。

というのは最後じゃないと、どうしようもない。ストーリーテリングの面で考えれば、ヒロインとヒロインが早めに出会うというのはマスト。でも、そうじゃないんですよ、『MADLAX』は。

――序盤、マドラックスとマーガレットが交互に出てくる展開でしたが、ああいう2本のラインを走らせる流れは、企画の当初から考えていたんですか？

真下　それは現実的に言うとね……毎回戦争シーンを描くのが大変だから（笑）。毎週作るとなると、それはちょっと大変。そうなると、もっと日常の部分も描いておかないと、バランスが取れないよねっていうことで。本来ならば、もっと極端に描いてもよかったんですけどね。

北山　凄惨なシーンというのは嫌がる方も多いかと思いますけど、本当はある程度出したかったんです。いたずらに残酷なシーンを出すとかそういう意味合いじゃなくて、凄く理不尽なこととか、残酷なことっていうのが、都会でもあるだろうし戦場でもあるということを表現したかった。

> 「ナフレスもガザッソニカも、日本そのもの。
> そこを“新しいカメラ”で撮影すると、
> ああいう風に映る」（真下）

黒田　本当は、ひとつの国で、市街地と内戦地帯というふうに分けても全然よかったんですけど、それだとやっぱり殺人とか戦争とかっていうのは肌で感じてしまうので、大きく海を隔てたくらいの距離感を持たせて、ある意味どちらも対岸の火事みたいな気分にした方がいいかなと。

――『ノワール』は、主人公格2人がわりとすぐ会って接点があるんですけど、『MADLAX』の場合かなり先まで接点を持たないという珍しい話の進め方ですよね。

黒田　それはさっき監督が言った、お互いの場所にある感覚的なものを見せるためには、早めに会わせてしまうと、そのニュアンスは伝わりにくいなと思っていたので、けっこう後の方で合流させたんです。

真下　2人が全然違うところで暮らしてて、片方は戦争とかそっちの狂気の世界、片方はお嬢様といわれている世界で世の中に不幸なんかないという感じでしょ？　2人が出会う

――“2つの流れ”というのは、作品全体の一貫したコンセプトなんでしょうか？

真下　それはもう、"MAD"と"LAX"だもんね(註6)。ただそれは、どこまで「今の日本は本当に『MADLAX』だよ」ということが伝わったか伝わらないのかというのが、難しい所だよね。

黒田　2話って、ちょっと接点みたいなものをつけようとして書いていたりするんですけど、本当は「のほほんとした女の子が学校行って、ただ帰ってきました。その間に一カ所だけ変なことが起こります」というだけで、「……これって、単なるほのぼのドラマ？」というところまで書いちゃうというのもひとつ

註1……2001年にBeeTrainが製作したTVアニメシリーズ。「ノワール」と呼ばれる女性2人の暗殺ユニットが、お互いの絆を深めながら、世界各国を股にかけ、様々なミッションをこなしていく。

註2……夕叢霧香（ゆうむら・きりか）とミレイユ・ブーケのこと。『ノワール』の主人公。

註3……1998年に制作されたスティーブン・スピルバーグ監督のノルマンディー上陸作戦を舞台にした戦争映画。戦場の殺戮を徹底したリアルさで描き話題となった。

註4……『ノワール』で桑島法子は夕叢霧香を、久川綾はクロエを演じている。

の手だと思っていたんですよ。ただ、あんまりにもお客さんがついてこれないというか、「タイトル間違えたのか？」と思われそうだったので（笑）。そこは、極端な言い方をすれば、僕が怖がっちゃったんで、なるべくお互いに接点を持たせるような作りにしたんです。

真下　でも、それはそれで見事だったよ。ナフレスで「雨が降る」と言って、それがラストでガザッソニカで雨が降ったりとかね（註7）。人物を2人に分けて、場所も別なんだけど、「この2人はひとりなんだよ」ということを刷り込んでいったんでしょうね。

私は誰？

――マドラックスとマーガレットの役回りについてなのですが、基本的にはどういう捉え方なのでしょうか？

真下　マーガレットは、さっきも言ったように一見普通に見えるけど、背負ってるものは凄くデカいという女の子。でも、生死の境目に立たされて、「生きたいのであれば、相手を殺さなきゃならない」というシチュエーションになった時、カンナビノイド（註8）で記憶を抹殺しちゃったりするのが生存本能というやつだろうと。だから、むしろマーガレットの方がノーマルなんですよね、普通の中では。どこにでもいる普通の少女というか女の子。逆に、マドラックスはあらかじめ狂気の世界に入っちゃっていて、狂気のド真ん中にいると、それはもう戦うしかない、やるしかないってなるじゃないですか……アニメーションの現場はまったくその通りで、ニュートラルな状態に戻って振り返ってみれば、「何であんな大変なことしてたんだろう？」みたいな（笑）。たぶんマーガレットが普通の人なんですよ。

黒田　そうですね。マーガレットは、本質に近い生き方というか。そういう生き方は、ナフレスでの生活……これは日本に置き換えてもいいんですが、どうも違和感を感じざるを得ない。でも、普通に生きろと周りからは言われる。だから一生懸命普通に生きようとしているけど、違和感は拭いきれなくて、でもどこが違うのかと言われてもわからない。感覚的に掴んでいるだけなので、言葉に置き換えることができない。でも、ここで生きていかなきゃいけないんだよねってことに最終的に気づいていくと。そういう意味では、僕の中では（マーガレットは）ノーマルな人間だと思ってます。どちらかというと「普通の人」と呼ばれている人間の方がアブノーマルなんじゃないだろうかという考え方ですね。でも、普通の人から見れば、マーガレットの方がアブノーマルに見える……そういう意識を持って脚本は書いています。

真下　……今、凄く面白いことを彼は言っていたんだけど、みんな「私は誰それだ」と信じて生きているじゃない。じゃあ、曾曾祖母さんの名前を言ってみろと。曾曾曾爺さんの名前を言ってみろと。それはちゃんと辿れる人もいるだろうし、辿れない人もいる。それで、そういうことを突き詰められると、「あれ、私って誰なのよ？」となる。そんな感覚ですよ。ひょっとしたことから「自分はなんなんだろう？」「もしかしたら人を殺したのかもしれない」と。「小さい頃の記憶を忘れちゃっているのではないか」とか、「辛い思い出があったからだ」とか、ひとりひとりが気がついていってくれれば、日本も、もうちょっと良くなるかもね。ところが、フライデーみたいに、意識を、あるいは情報を操作していると「俺は真下だ」と思っちゃうわけよ。俺は真下じゃないのよ。誰の誰兵衛かわかってない。

黒田　マーガレットはナフレスという、国単位で「あなたはマーガレット・バートンでいいですよ」と言ってもらってる場所にいる女の子で、マドラックスは「世界が滅びようとも、私はマドラックスである以上マドラックスなんだ」って言い切れるキャラクターなんですよ。誰も社会の保証なんかしてくれない、ただ私がここにいるのは、私が強烈に私という個を感じているから私はマドラックス……それ以上でもそれ以下でもないというキャラクターですね。でも、その存在を否定されると、彼女の中の世界が終わってしまうので、それだけはどうしても許されない。その為に、生きている実感を絶対的に、強烈に感じていたいという所が、マドラックスの最大の弱みでもあったりする。僕の中では、どっちも考えてることは同じだっていう風に理解してやってるけど、環境が違うとこうも違うのかという所ですね。そういう所が書いてみたかったんです。

真下　観念的に聞こえるんだけど、さっきの「曾曾祖母さんの名前を言ってみろ」と言われると、誰だって「うっ……」と思うじゃないですか。実は全然観念的じゃないですよ。新しいカメラで、ちょっと未来の最新鋭カメラで撮影すれば、あの通り映るんだよ具体的に。と思ってるんだけどね。

――マドラックスやマーガレットを通して、「自分に対して無自覚な生き方」というアイロニーがあると。

北山　矛盾とか理不尽とかに対して、ある程度無自覚でないと、現代社会って生きていけないじゃないですか。自分たち自身も決してすべてがわかっているわけではないんですけ

「自分が立っていられる場所を
持っているということは幸せなんだけど、
同時に、その場所は
狂気で彩られているということも
自覚して欲しい」(黒田)



註5……第6話でマーガレットに近づき、あまつさえ彼女を襲ったロベスは、駆けつけたエリノアにシバかれ、手を思いっきり踏みつけられた。

註6……すなわち、「MAD（狂気）」と「RELAX（癒し）」。



註7……第2話で、ナフレスでマーガレットが「雨が降る」と言った後、ガザッソニカでも雨が降っていた。

註8……記憶を封印してしまう物質。詳しくはP82を参照。

ども、自分たちが納得がいかないということを全部拒否していたら、たぶん1週間と生きていけませんよね。それを感じながらストレスとして抱えきれなくなった人なんかが、時々首吊っちゃったりするんじゃないかと思うんですよ。多分、ほとんどの人間というのは、ある程度のことは飲み込んじゃって、一定に仕切られた存在区分の中で生活しているんじゃないかな。

――逆に、自分が何者かということをよくわかっているのはレティシアなんでしょうか？

黒田　そうですね。同時に、会ったら自分が消えるということもわかっている。真実としての自分が消えるけども、真実に辿り着かなくては私自身がその次に行くことはできない。でも死にたくないなとも思っている、というキャラクターなんですよね。そういう意味では、真実の刹那で生まれた人格が、真実を見失ってる子たち、あるいは自分を導いているという感じ。そして、その真実の中に隠されている多くの他の人たちの中にも、精神的に介入していくという感じのキャラクターですね。

――多重人格の場合、苦痛を押しつけられた人格は元の人格を憎んだりするようになりますが、マドラックスやレティシアがマーガレットを憎まないのはなぜですか？

黒田　自覚しているからです。普通の多重人格だと主と副があるわけじゃないですか。元になってる人間と生み出された人間という。でも、彼女たちは同時に生まれたんで。だから、「私はマドラックスだ」と言い切れる人格が個として存在してしまっているということが、最後までマーガレットにくっつかない理由でもあるんです。「あなたのマドラックスとしての個を尊重する。私はマーガレット・バートンとしての個を尊重する。ただどこかで、また絶対会うことにはなるでしょうけど」という考え方ですね。

真下　黒田洋介は非常にあったかいですよ。心に傷を負ってるからなのかどうかわからないけど（笑）、あったかい方向にいくよね。

善悪の超越

――「本質」についてなんですが、フライデーは、いつも「本質を見ろ」と言ってますけど、彼の指す本質とは何ですか？

黒田　それは先程言ったことですね。自分を、個というものを自覚することは、狂気の中だけでできるという持論があるので、じゃあ狂気を蔓延させて、本当の自分を自覚した時に殺し合うんだったら、それはそういう世界なんだし、結果として滅びてもいいんじゃないかっていう。でもその先に気づいて、本質に目覚めた人間がその向こう側に行くのであれば、それは行ってもOK……というような、フライデーくんなりの美意識、思想みたいなものがキチッとあって、彼は行動しています。

――第24話で、フライデーが「本質が愛を示すか」と言ってましたけど、愛を示すんならそれはそれでいいんじゃないの？　みたいな。

黒田　そうですね。そういう意味では、今までさんざん本質を見てきた男ですので、目の前で新しい本質を見せてくれたことに対する軽い感動という感じで。

――そもそもフライデーはどこから来て、いつから本を集め始めたんでしょう？

黒田　資質ある者だったから本を渡されたんです。クアンジッタの家系の人間が、フライデーという存在が出た時に、こいつは資質がある→「じゃあ、あんたかな」と渡した→それで集めてみた→やろうとした→どうやら違う→新たな資質がいるはずだ、という。

――善悪で判断してるんじゃなくて、資質があれば誰にでもと。

黒田　下世話な話なんですけど、（クアンジッタの立場からすれば）狂気によって時代が変わる、戦争によって時代が変わるなら、それもまた歴史の変革なんだろうという捉え方ですね。時代が流れだした時に、どうやって姿を変えるのか？　それは戦争なのか、世界平和の破壊なのか？　あるいはまったく別のものなのか？　それを見届けるのがクアンジッタの一族ということですね。見届ける者なんで、善悪の判断はナシ。なので、「見届ける」とずっと言わせてたんです。ただ、無駄に歴史を止めさせることにしかならないから、資質なき者に本が渡るのは嫌なんだと。

真下　この『MADLAX』の物語を作る側の位置は、人間って昔から狂気の側に住んでるんだよっていう考え方。昔から「話せばわかる」とか、そういう時代があったって思っちゃってると思うんだけど、そうではない。「話せばわかる」という側の視点に立っていると、むしろわかりにくいかもしれないね。そこにギャップがあるんだよね。

黒田　善悪ではないんですよね。最終的にやりたいことは。主人公側もそうだし、クアンジッタもそうだし、フライデーもそうなんですよ。ただ、狂気というのは絶えずあるものなので、世界をどの視点で見るかという、願いというより「世界の本質に触れたあなたは、その世界でなにを望むか？」ということで、世界を変えるということではなくて、世界に"個"として望むものはなんだと。あなたはいっぱい狂気を見てきたはずだ。それを自覚できる資質ある人間だ。そのあなたが世界に何を望むんだと。平和を望むのか、狂気を望むのかという所での、最後のマーガレットの選択がある。そして、狂気を自覚して狂気の中で生きていくこと自体が、人が生きるということなんだから、このままでいいですという最終的な結論がくる。

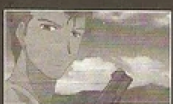
真下　その辺をもうちょっとわかりやすくやればよかったんだよ（笑）。

黒田　いや、それをあんまりやりすぎると、「青臭～っ」って思われたりとか、説教くさくなっちゃうんで（笑）。

北山　ただ、人っていうのは、矛盾を抱えていながらも、みんなどこかで「自分は正しい」と思って生きてますよね。「俺間違ってるよな、ごめんな」と思いながら生きてる人ってあんまりいないと思うんで、理屈で追い詰めると、大体の人は自己嫌悪に陥るか、「ふざけんなバカヤロー！」ってケンカになるか。

黒田　もしくは「生きててスイマセン」になるか（笑）。

北山　つまりはフタしちゃって生きてるわけだけど、そこを見つめられるかどうかっていうことだと思うんですよ。どうにかやっているうちはいいんだけど、気がつかないまま、それで正しいと思っていたりするから、ちょっと何かがあったときに、仲良しだったお隣さんを、ふと気がついたら殺しちゃったとか、そういうことになるんじゃないかと思うんですよね。



註9……第1話のゲストキャラクター。ガルザの青年兵士。

幸せの傍に狂気

――それから第24話でもうひとつ。実は、エリノアが一番好きだったのは執事をしていた祖父で、その大好きな祖父から託されたから「お嬢さんは大事だ」と自己洗脳するような感じで、あそこまで献身していたのかなとも思ったのですが。

黒田　それは、形から入る愛もあったりするかもしれませんから、そういうのも引き金になってるみたいな所があると思います。

北山　色んな捉え方があると思うんですけど、血縁じゃない運命共同体という家族の捉え方をエリノアはしてると思うんですよ。第1話で死んじゃうピートくん（註9）もそうですが、意外と「家族」というキーワードが作品の中で使われているんですよ。

真下　黒田洋介がこれまで書いた脚本を全部読んだわけじゃないけど、「本物の家族じゃないんだけど家族なんだ」という意識、価値観は、キーワードとしてあると思う。黒田洋介の遺伝子の中には、おそらく確実にある。色濃く出てますよ。

黒田　要するに、家族とか上司部下とかいうのだと、それって社会が決めたことわりじゃないですか。さっきのピートとおやっさんだったら男と男、マーガレットとエリノアは女と女。恋愛とかそういうことではなくて、まったくの他人が結びつく所に、狂気の中にある唯一の救いがあるというか。

真下　それが最高位？

黒田　最高位までは行かないですねぇ。ただ、一番端的に見せやすい救いかな。そのために命を賭けてしまうというのも、また皮肉なのかもしれないけれども。それから、男女でコンビを組ませるより、男男、女女でコンビを組ませた方が、打算以上のものが絵的に介入していない、セックスとかそういうものじゃない所で、「この2人の関係は美しいですよね」ということが端的に見えればいいなっていうのもあります。

――あ、ピートも含めてなんですが、マドラックスに関わる男は、大抵不幸になってますよね？（笑）

黒田　マドラックス、それにマーガレットもそうなんですけど、日常から外れて行くというイメージで書いてたんで、そういう意味では、マーガレットも会う人会う人死んでたりとかしてますよね。本探しを頼みに行ったら死んじゃうし、みたいな（笑）。真実により近づいてる2人に近づいてしまうと、本人も大なり小なり近づいてしまうので、そこに破綻が必ず生まれてしまう。だから、一番頑丈な男はチャーリーだと思ってますよ。会っても全然揺らがなかった（笑）。ある意味、最高に俗世間の人間だと、僕的には認識して書いていたんですよ。

北山　繊細だとか感覚が鋭敏だと、幸せとは限らないよね。

黒田　愚鈍なものがよかったりする時もあるという。

北山　エリノアも結構ニブイよね（笑）。

黒田　研ぎ澄ましてる方向が、一方向にしか出てませんから、エリノアは。

北山　農家のオバサンとか、生活に根づいてる人の強さってあるじゃないですか。いくら人生とか社会とかが大変なんだ、ヤバイんだと言われても、「明日の朝から乳搾りだから、早く寝なきゃいけないんだよ」みたいな（笑）。そういう大地に根を張ってる強さがあるから、エリノアは「お嬢様の記憶なんかどうでもいいです！」って言っちゃうんだよね（註10）。「じゃあ今までなんの為に！」と（笑）。でも、当たり前が大事だと言わせたのは、僕はすごいなと思っています。大体、アニメとか映画って、日常から上に向かって本当の愛とか友情とかを探すか、凄く落ちた状況にいて、そこから何かを取り戻すとかっていうのが多いんですけど、そうじゃなくて「ここが、この場所が一番大事だから」というのはなかなか言えないよね。

黒田　幸せって、いいことがあったから幸せではないんですよ。今、ここにいること自体が奇跡的であり、幸せ。本質的に生を謳歌していない人は、そこを失って、初めて気づくんじゃないのかな。ただ、自分が立っていられる場所を持っているということは幸せなんだけど、同時に、その場所は狂気で彩られているということも自覚して欲しい。小さい幸せも悪意も山のように存在している、人生はこの2つの間を綺麗に渡って行かなきゃいけないんですよ。

それでも世界を愛する

――演出についてもお伺いします。戦闘中におけるドレスへの着替え（註11）、あれはどういった意図でそうしたのですか？

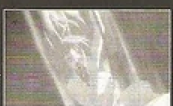
黒田　監督の中では、「マドラックスは戦場の中を日常として生きている」という表現ですね。最初に書いた時は、ドレスなんか着てなかったんですよ。それを監督がどうもしっくりこないとおっしゃられて、「彼女はああ見えても、可愛くありたい普通の女の子なんだ」という所に転がって、それが過度に強烈な現象で発展したと（笑）。あと、初のドレス姿が第1話ということもあったので、「さぁショーの始まりです」というようなイメージでもありましたね。ただ、第1話も、ほんとに踊るように撃ってくれたので、「これがマドラックスだな」というのは出たんじゃないかなと。

真下　ドレス姿こそが、マドラックスにとっての普通。戦闘服で戦闘しているという額面通りの表現だったら、それはもう脚本や現場にどっぷり浸かっているしね。

黒田　スタッフでいえば、酒飲みながら原稿書いてるみたいな感じですかね（笑）。

北山　ドレスもそうなんですけど、戦闘シーンって、普通の映画だと、スナイパーが緊張して「ハァハァ」とか言ったり、アクションをやっている時に「トゥ！」みたいな気合いの声が入ったりしますけど、『MADLAX』はそういう表現が全くないんですよ。要は「今日もお勤めをしてますよ」「今日も無難に8割方のエネルギーでこなしましたとさ」という感覚なんですよ。だから、小林さんは相当大変だったと思いますね。緊迫しているんだけども、シーンとしてはマドラックスというキャラクターの日常感を求められるんで。

黒田　だから、第1話が一番マドラックスが超越者然としていて、そこから色々と心理的な影響でだんだん弱くなっていくんです。そして、全てを受け入れて、再び個として強烈に自分を意識し始めた最終回は、「絶対当たりません」という強さが戻ってくるという（笑）。あと、「マドラックスは少女なんだ」という意識は凄くあります。第3話でも、わざわざ着替えて、女の子として会いに来たというようなイメージだったりとか（註12）。



註10……第24話で、マーガレットと対峙したエリノアは、「お嬢様の記憶は戻らなくていい。元の暮らしに戻りたい」と告げる。

註11……マドラックスは、戦闘に際してドレスに着替えて戦う（全てにはあてはまらないが）。



註12……第3話、グエン・マクニコルに会う為に公邸へ潜入したマドラックスは、女中姿の変装からドレスに着替えている。

註13……晴れ。民俗学や人類学において「非日常」を指す言葉。逆に、ケ（褻）は「日常」を指す言葉。

北山　僕はDVDの解説で「ドレスに着替えるのは、女の子としての自分に対するハレ(註13)の演出だ」と、勝手に書きました。「ちょっと気合い入れてお仕事しようかな」とか、「今日は会社に素敵なお客さんが来てるから、お茶出さなきゃ」っていう時にメイクを直してみたりとか、そういう感覚が女性にはあると思うんで、日常の中で自分の中で非日常を演出するというのが、どういう形で出るかと。ただ、通常の捉え方で行くと、戦争をするとか殺し合いをすること自体が非日常になっちゃうんで、それを日常として規定して、その上でマドラックスで非日常を感じさせようとするとどうすればいいのかしらっていうと、オシャレかなあと。

黒田　人殺しって、結局、機能的になっていくじゃないですか。どうやったら綺麗に殺せるかとか、どうやったら気配を悟られても撃てるかとか。そういうものを突き詰めていけば、どんどんシステマティックになってしまって面白味も何もない。そこでマドラックスは日常感を感じたかったんじゃないかなと。生足出してる段階で、相当機能的ではないんですけど、ただそこで傷ついてないという所が、彼女の彼女たるアイデンティティーだと思っています。

――それから、これはみんな知りたがってることだと思いますが、あの"ヤンマーニ"(註14)は、本当に"ヤンマーニ"なんですか？（笑）

真下　知らないよ、そんなこと（笑）。

黒田　だんだん真下監督が落合監督(註15)みたいになってきました（笑）。あの曲、ほんとは主題歌だったんですけど、挿入歌の方に持ってきたという監督の凄いチョイスでしたね。でも、そこで本編に大きな華ができましたし、僕はもう後半の方は、あの曲がかかると想定して書いてましたから（笑）。それなのに別の挿入歌が入ってきたりして、監督にしてやられたこともありましたね（笑）。

北山　シチュエーションによってちゃんと振り分けがあるんですよ、戦闘音楽として。第15話あたりが一番ヤンマーニが途切れていたんです。なんで、その頃には「監督、そろそろヤンマーニしないと！」と言ったり。

一同　（笑）

黒田　イントロしか流れなかった時は「今日、寸止めヤンマーニでしたね」みたいな（笑）。それにしても、全く想定してなかった所で変な話題性が出ちゃいましたね（笑）。

――フライデーはマドラックスに撃たれましたけど、実はまだ生きてる可能性もあるのでしょうか？

真下　死なないよねぇ。死ぬわけがない。

黒田　「なーんてね」という感じで生きてますよ（笑）。フライデーも完璧ではないんです。だから完璧を追い求めて生き続けると、自分の中では解釈しています。

――クアンジッタは、最後コト切れていたのはなぜですか？

黒田　これは勝手な僕の設定なんですけど、歴史の変わり目に、クアンジッタのような立場の人が、必ずひとりいるんですよ。マーガレットが選んだことによって、クアンジッタが見てきた世界はここで閉じる。で、マーガレットが選んだ世界を、新たな人物が次の変わり目まで見届けて行きますと。それはナハルかもしれないし、クアンジッタがクローンのようにボワッと出てくるかもしれないですけど（笑）、そういう役目なんです。彼女は本質には触れられないけど、それを歴史として刻んでいく、歴史そのものを人に置き換えてみましたという感じですね。

――では、チャーリーは生きているんでしょうか？(註16)

黒田　生きてますよ。脚本ではちゃんと本質に目覚めるシーンがあったんですけど、尺の都合でカットされて（笑）。最初殺しちゃったんですけど、生きてます。

――3冊の本は最後に燃えましたけど、世界の何処かには、まだ真実の扉があるのでしょうか？

黒田　というか、最後の頁に「マーガレット・バートンはこうでした」ということが書いてあって、「ハイ、次の時代へどうぞ」って感じですね。あと2000年くらいすると、とんでもなくブ厚い本になったりするのかもしれないですけど、その時はもっと細かい字で書いてたり、LZHで圧縮したり(註17)、手は講じているのではないかと（笑）。あと、ガザッソニカの内戦も全然終わってないですし、アンファンは分裂したりとかはするかもしれないけど、存続し続けるでしょうね。

――色々と想像は尽きませんが、そろそろお時間なので、最後に一つ。『MADLAX』は、自分にとってどのような作品でしたか？

黒田　「何かに委ねられて生きるんじゃなくて、しっかり自覚して生きて、このメチャクチャな世界を愛する」という気持ちを込めつつ、ラストシーンを書いてました。要するに、最終的に言いたかったことは、「色々と理解した上で、この世界を愛しましょう」というようなことなんです。

――真下監督と北山さんはいかがですか？

真下・北山　そういうこと！

黒田　えー！　……逃げられた（笑）。

――では、黒田さんの今の言葉でシメさせていただきます（笑）。ありがとうございました。

「第15話あたりが一番ヤンマーニが途切れていたんです。なんで、その頃には『監督、そろそろヤンマーニしないと！』と言ったり」（北山）

註14……ファンの間では、挿入歌「nowhere」で繰り返し流れるフレーズが「ヤンマーニ」として認知されている。梶浦由記のインタビュー（P91）を参照。

註15……セ・パ両リーグで活躍したプロ野球の名選手。2004年に中日ドラゴンズの監督に就任。俺流。



註16……「真実の扉」を開き、フライデーの狂気が世界に満ちた際、本質に目覚めた警官によりチャーリーは腹部を銃で撃たれている。

註17……データ圧縮の一形式。

STAFF INTERVIEW スタッフインタビュー

『MADLAX』全26話を支えた多くのスタッフを代表して、5人の"仕事人"にご登場を願い、お話を伺った。果たして本作がどのようにして作られたのか？　その一端が垣間見えてくる筈だ

大澤聡 SATOSHI OSAWA

（キャラクターデザイン・監修）

主な参加作品▶▶▶
『ノワール』『.hack//黄昏の腕輪伝説』（作画監督）『.hack//SIGN』（キャラクターデザイン、作画監督）『AVENGER』（レイアウト作画監督）など

担当したキャラクターは、マドラックス、マーガレット、エリノア、ヴァネッサ、リメルダ、ナハル、チャーリー、それからサブキャラですね。サブキャラは、7話まではすべてで、あとは所々で描きました。

描くにあたって、監督からは、影のつけ方や顔のこと……特にシワとか、注意して描いてもらいたいというような指示はいただきました。それから、「誰もが描けるようなキャラで」ということも仰っていましたね。

黒田さんのシナリオが大変面白かったので、「これを、どう絵にしていけば良いのやら……」と、散々悩まされました。今でも「シナリオの面白さを充分表現できた」と自信を持って言える話数があるのかと聞かれれば、ちょっと微妙な所ではあります。試行錯誤の連続でしたね。

【印象に残っているエピソード】 色々とありますが、個人的にはやはり、ヴァネッサが死んだ第22話。あれは心に残っています。

ちなみに、印象的なキャラは、第8話で登場したドアイホ村の子供（笑）。自分が描いたキャラじゃないですが、可愛らしくて気に入ってます。

【作品全体の感想】 あまり手の速くない僕にとっては、とにかく時間の無い作品でした。演出をはじめ、各スタッフの方々には、御迷惑をおかけしたと思います。ですが、アニメーターとして記念になる物ができたと思っています。とにかく監督には、「お疲れ様でした」、この一言です。

芝美奈子 MINAKO SHIBA

（キャラクターデザイン）

代表作▶▶▶
『ノワール』（キャラクターデザイン、作画監督）、『ヒカルの碁』（原画・作画監督）、『.hack//SIGN』（キャラクターデザイン）、『ふしぎ遊戯』（原画）など

担当させていただいたキャラクターは、まずカロッスアと、それからフライデー、クアンジッタですね。

【『MADLAX』参加の経緯】 突然、真下監督から呼び出され、「ちょっと美形を描いてみないか？」と誘われまして（笑）、それでカロッスアを描くことになりました。フライデーとクアンジッタは、追加という形でオーダーが来ました。

キャラクターをデザインをする上で、監督から言われたことは、とにかくカロッスアは「カッコよく」と。逆に、フライデーとクアンジッタが、「何をしているのかわからない人」「街中に立っていたら思いっきり不自然な人」という感じでした（笑）。

でも、まさかフライデーがあそこまで変な人になるとは思いませんでしたね。ある意味、一番"楽しそう"でしたし、どんどんエスカレートしていく江原正士さんの演技に惚れました（笑）。

自分がデザインしたキャラクターが絡むシーンでは、第19話の、フライデーがカロッスアに銃で撃たれてしまうシーンが特に好きですね。フライデーがかぶっている仮面は、もう、ひたすら勢いだけでダーッと描いた末にできあがった代物なんですけど、それを作中でとても効果的に使っていただいて、凄く嬉しかったです。

え、真下監督に一言ですか？　……何かとワガママを言いまして、ご迷惑をおかけしました！

宮地聡子

SATOKO MIYACHI

（キャラクターデザイン）

代表作▶▶▶
『ノワール』（キャラクターデザイン・原画・作画監督）、『少女革命ウテナ』（原画）、『メダロット』（原画・作画監督）など

【自身がデザインしたキャラについて】 レティシアとプゥペを描かせていただきました。真下監督の場合、好きなように描かせてくれるので、楽しかったですね。だからキャラクターにも愛着がありますよ。

ただ、レティシアを描くにあたっては結構悩んで、毎日ちょっと描いては「違うな」というのを繰り返していたんです。そんな時に、真下監督から一言アドバイスをいただいたんですけど……すみません、何て言われたのか忘れました（笑）。多分「もっと好きに描いていいんだよ」みたいなことと、「片目は隠れているんだ」みたいなことを言われたと思います。その時にフッとレティシアのデザインが固まって、髪型は2パターンくらい描いていたんですけど、「片目が隠れているんだ」と思って、今の形になりました。

【レティシアの人形について】 1話のコンテの時はウサギの人形だったんですよ。でも、よくよく考えた末、「これはウサギじゃないな」と思って、今のような人形になりました。デザインの決め手は、その頃、アメリカのアンティークドールみたいなのが流行っていたんですけど、それが目について凄く印象に残っていたので、その影響がそのまま出たという感じですね。

【『MADLAX』という作品自体について】 あまり本編に参加できなかった分、「この後はどうなるのかな？」といった感じで視聴者的な観方ができたので、一個人として、楽しませていただきました。面白かったです！

寺岡賢司

KENJI TERAOKA

（メカニックデザイン）

代表作▶▶▶
『ノワール』『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』『攻殻機動隊 S.A.C. 2nd GIG』（メカニックデザイン）など

『MADLAX』では、主に兵器・車両関係、あと携帯電話などの小物をデザインしました。

全般的なモチーフとしては、ガザッソニカがフランスで、ガルザが東側諸国という、簡単なテイストの住み分けはしています。イギリスでもよかったんですけど、イギリスは『ノワール』で使ってるんで(笑)、今回はフランスで行こうと。

【マドラックスの銃について】 マドラックスの銃は「SIG-P210」といって、ちょっと古いタイプの銃なんですけど、裏設定として、「SSSが使っていた銃をマドラックスが譲り受けた」というのがあるんです。設定の「P210」は旧西ドイツ国境警備隊仕様で、おそらくはSSSはヨーロッパのどこかで、米軍と行動をいっしょにした軍人あがりであろうということにしてます。

個人的には、珍しくアニメで「FA-MAS」（ガザッソニカ軍が使用していた銃）を出せたのが嬉しかったですね。FA-MASは、ほとんど出ていないですから、いつか出してやろうとは思ってました。なので、今回の一番のお気に入りはFA-MASですね(笑)。

【真下監督について】 僕はもう真下監督とはおつき合いが長いんで、「今回もいつもの真下監督のお仕事だったなぁ」という感じです。作業としては、スタートからオーダーがキチンとしてましたから、楽でしたね。アウトラインがあった上で、こちらが考えればいいんで、スタッフ的には結構楽させていただきましたね。ありがとうございました！

梶浦由記

YUKI KAJIURA

（音楽）

代表作▶▶▶
『ノワール』『.hack//Liminality』『.hack//SIGN』『舞-HiME』『エレメンタル・ジェレイド』『ツバサ・クロニクル』（音楽）など

『MADLAX』については、事前に真下監督から「日常の中の狂気、狂気の中の日常」というものがテーマだと伺いまして、そこから実際の楽曲制作に入っていきました。

「ピンと来る言葉」というのがあるんですよ。たった一つの単語でも、イメージの涌いて来やすい言葉とそうでない言葉があって……これは単に個人的嗜好ですが。それで、監督からいただくオーダーには、「ピンと来る言葉」が多くて、非常にイメージを膨らませるのが楽なんです。つまりそれは、言い換えれば「景色が見えやすい言葉」ということなんでしょうけれど。登場人物のテーマに関するオーダーで言えば、「門番」という言葉が多用されていたのは印象的でした。例えばヴァネッサは「幸福の門番」。それが彼女の果たして行く役割が非常に的確に表現されているので「なるほど」と。

【ファンの間で“ヤンマーニ”として有名になった「nowhere」のフレーズについて】 実際、何と言っているのかはご想像にお任せ致します。造語ですので、聞こえたままの響きが正解だと思っていただければと。それだけ曲、フレーズを印象的に感じていただけたということでしょうから、光栄だとは思っています。ただ、はじめに「ヤンマーニいいですね」と言われた時は、一体何の曲のことかさっぱりわかりませんでした（苦笑）。

【真下監督に一言】 いつも素敵に曲を使って下さってありがとうございます。今後ともよろしくお願いします！

CAST INTERVIEW

キャストインタビュー

マドラックス、マーガレット、レティシア……『MADLAX』を彩ったメインキャラクターたちに命を吹き込んだ10名の声優。各々の役に込めた想いを、このインタビューから感じてもらいたい

小林沙苗 SANAE KOBAYASHI

（マドラックス）

主な出演作▸▸▸『ヒカルの碁』塔矢アキラ役／『E'S OTHERWISE』明日香＝篤川役／『はじめの一歩』間柴久美役／『エルフェンリート』にゅう役、ルーシ役／『蒼穹のファフナー』カノン・メンフィス役など

マドラックスを演じるにあたって、「彼女は何を考え、生きているのか？」ということが頭の中をよぎりましたね。危険を伴うハードな仕事にも感情を出さず、クールにこなしていく姿に、掴み所のない、不思議な印象を受けました。でも、実際は「優しくて孤独な人なんだな」と。平和な街、甘えられる人がいる場所に産まれなかっただけで、彼女にとっては戦場の生活が普通なんだと思いました。**【“やさしい人殺し”を演じる上での難しさ、注意点】**「マドラックスにとっては、生きるために人を殺してしまうこともあるんだ！」と強く意識して演じていましたが……改めて考えると、今でも悩んでしまいますね。**【ファンに一言】**私にとって、とても大切な作品ですし、これからも、皆さんの心の中に『MADLAX』がいてくれると嬉しいです。本当にありがとうございました！

桑島法子 KUWASHIMA HOUKO

（マーガレット）

主な出演作▸▸▸『ノワール』夕叢霧香役／『機動戦艦ナデシコ』ミスマル・ユリカ役／『ラーゼフォン』如月久遠役／『機動戦士ガンダムSEED』フレイ・アルスター役、ナタル・バジルール役／『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』ステラ・ルーシェ役など

初めてマーガレットを見た時、（マーガレットばりに）「どこかでお会いしましたっけ？」という感じでしたね（笑）。ただ、実際に演じてみると、マーガレットが持つキャラクター全体の雰囲気であったり、設定であったりが謎だらけで、難しかったです。ちょっと……というか、かなり抜けている所が魅力的なお嬢様でしたね。**【アフレコ現場では】**記憶喪失ということなので、彼女が発する言葉に何かしらの意味を持たせようという意識で演技をすると、「もっとナチュラルに」とか言われたりしていたので、その点は注意して臨みました。**【作品全体の印象】**音楽、映像ともに、ハイクオリティで、こだわり満載のオリジナルアニメですよね。特に、エリノアが死んだ回は非常に心に残っています。とにかくすべてが最高です！　またひとつ、自分の宝物が増えました！

金田朋子 TOMOKO KANEDA

（レティシア）

主な出演作▸▸▸『B-伝説バトルビーダマン炎魂』ツバメ役／『ボボボーボ・ボーボボ』田楽マン役／『ボンバーマンジェッターズ』シロボン役／『あずまんが大王』美浜ちよ役／『ケロロ軍曹』ラビー役など

最初は「この子、無表情だなぁ」という印象だったんですけど、演じていくにつれて「小さな女の子に見えて、実はすべてを悟っている“魔性の女の子”なんだな」と思いました。でも、レティシアが人形だったと知った時は、「やはり人間じゃなかったんだ」と（笑）。**【演技で苦労した点】**私の知らない言葉を当たり前のように使っているので、私もよく知っている言葉のように喋るのが大変でした。毎回ドキドキでしたね（笑）。**【自分の中での『MADLAX』】**非常に奥深い作品でした。レティシアは、私が今まで演じたことのないタイプの役だったので、演技の幅を広げていただいた、とても大切な役でしたね。**【ファンに一言】**この作品は、全部観て、初めて色々なことが伝わってくる作品なので、使用上の注意として、必ず全巻観て下さいね（笑）。ありがとうございました！

江原正士 MASASHI EBARA

（フライデー）

主な出演作▸▸▸『EAT-MAN』ボルト・クランク役／『NARUTO』マイト・ガイ役／『鋼の錬金術師』ホーエンハイム・エルリック役／『ジャイアントロボ 地球が静止する日』呉学人役／『PEACE MAKER 鐵』坂本竜馬役など

「ロングヘアーのビジュアル系ロッカーというか、どう見ても堅い仕事をしているとは思えない、潤沢な資産を背景とした、自称アーティスト！」……これがフライデーを最初に見た時のイメージです（笑）。**【演技で注意した点】**台詞がだんだんと乗ってくると、どうしても独裁者的、高圧的な物言いになってしまうので、「フライデーはアーティストである」ということを強く意識して演じました。**【作品全体の感想】**ストーリー的にも、簡単に把握できる作品ではないですし、思考しなければならない部分も多くある作品ですが、単純に物語の筋を追っていくという受動的な観方ではなく、判然としない部分を自分で考えて埋めていくことによって、日常考えてもみなかったことが浮かんでくる作品ですね。とにかく、皆さん自身の目と耳とセンスで、この作品の“本質”を見極めてください！

雪野五月

SATSUKI YUKINO

（ヴァネッサ）

主な出演作▸▸▸主な出演作：『フルメタル・パニック！』千鳥かなめ役／『トライガン』ミリィ・トンプソン役／『たこやきマントマン』レッド役／『犬夜叉』日暮かごめ役／『プラネテス』田名部愛役など

ヴァネッサは、見た目も設定も、“大人の女性”って感じじゃないですか。なので「これは難しそうだな……」と思いましたが、ヴァネッサを演じていくうちに、彼女は正義感が強くて、誠実で、茶目っ気のあるキャラクターだということもわかりました。**【演技で注意した点】**まずは、妹的な立場にあるマーガレットへの愛情ですね。それから、人の生死について自分と違う考えを持つマドラックスとの心の距離感。これにも気をつけました。**【アフレコ現場での思い出】**……江原さんのすべてです（笑）。具体的にですか？……とにかく、江原さんのすべて（笑）。これに尽きますね。はい。**【ファンに向けて一言】**『MADLAX』を観て下さって、本当にありがとうございます。この不思議な世界観に浸りたい時は、DVDが出ていますので、いつでも観て、作品の雰囲気やテイストを堪能してください。

内川藍維

AI UCHIKAWA

（エリノア）

主な出演作▸▸▸『とっとこハム太郎』岩田カナ・かぶるくん役／『マジンカイザー』弓さやか役／『超者ライディーン』西条きらり役／『超重神グラヴィオン』テセラ役／『星界の紋章』グレーダ役など

演じる際に監督から「（エリノアは）マーガレットの100倍は頭がいい」と聞いて、「これは大変だな」思いました。実際、機転の効く、賢い子ですよね。それに、信念が強くて、日々の生活を積み重ねる喜びを知っている子だなとも思います。エリノアが死んだ時は、とても悲しかったですね。「優しい気持ちが、愛が勝って良かったね」という想いが溢れて、涙が出ました。**【アフレコ現場での思い出】**ことあるごとに「まるで告白じゃない」（第24話・リメルダの台詞）と言うのが流行りました（笑）。この台詞は今でも好きですね。**【作品全体の感想】**深く潜伏しているものを暴いて、心の中の真実を明示する……怖いけど、そういうことを見つめる意義を考えさせられる作品だと思います。**【ファンに向けて一言】**『MADLAX』を、そしてエリノアを愛してくれて、どうもありがとうございます！

久川綾

AYA HISAKAWA

（リメルダ）

主な出演作▸▸▸『美少女戦士セーラームーン』水野亜美役／『ノワール』クロエ役／『十二国記』中嶋陽子役／『カードキャプターさくら』ケロ(ケルベロス)役／『ラーゼフォン』紫東遙役など

リメルダは、美人で、スタイルが良くて、腕利きのスナイパー。まさしく“デキる女”、“バリバリのキャリアウーマン”って感じですね。ただ、演じている最中は「リメちゃん！　お母さんはあなたをそんな風に育てた憶えはありませんよ！」と思いました（笑）。**【演技で注意した点】**注意したのは、江原さん！　江原さんのジョークで笑わないようにする集中力がポイントでしたね（笑）。**【作品全体の感想】**絵の完成度の高さに、監督とBeeTrainの偉大さを知る作品であり、演じ手である役者を、とても大事にしてくれた作品です……そして、打ち入りのジャンケン大会で四国の小豆島の旅行が当たった、私にとってありがたい作品ですね（笑）。とにかく、リメルダを演じることができて幸せでした。観てくれた方、スタッフ、キャストの皆さんに感謝しています。

森川智之

TOSHIYUKI MORIKAWA

（カロッスア）

主な出演作▸▸▸『ギャラリーフェイク』藤田玲司役／『BLEACH』黒崎一心役、東仙要役／『剣風伝奇ベルセルク』グリフィス役／『犬夜叉』奈落役／『今日からマ王！』コンラッド役など

「二枚目で歯切れもよく、即座の判断力に長けていそうな感じで、決して自分の弱みを他者には見せない、やり手の青年」というのが第一印象でしたね。演じていく過程では、「謎は多いけど、野心に満ちたキャラクター」というイメージ。演じていて、とても楽しかったです。**【演技で注意した点】**とにかく、リアリティのある演技を追求しました……でも、「思うようにはいかないものだな、真実の探求とは……」って感じでした（笑）。**【作品自体の感想】**カロッスアを演じていく中で、とても貴重な経験を積ませていただきましたし、そんな経験を与えてくれた『MADLAX』にはとにかく感謝ですね。オーディションを受けた時から、「この作品に出演したい！」と強く思っていたので、運命を感じます。**【ファンに一言】**非常に深みのある作品なので、何回も何回も観て楽しんでください。

兵藤まこ

MAKO HYOUDOU

（クアンジッタ）

主な出演作▸▸▸『ラーゼフォン』ヘレナ・バーベム役／『機動戦士Vガンダム』ミューラー・ミゲル役／『MACROSS PLUS』シャロン・アップル役／『鉄腕バーディー』レビ役／『究極超人あ〜る』天野小夜子役など

【クアンジッタの第一印象】「エキゾチックな巫女様」かなと。切れ長で、涼しげな目から、人の心を読み取る力のあるキャラクターだと感じました。演技の上では、心の奥底に秘めた想いをしっかりと掴んで表現しないと、台詞が浮いてしまうので、そうならないように心がけましたね。その心の奥底では、マーガレットが、怯むことなく自分の真実と向き合い、新たな「時代の扉」を開くことを望んでいたと思います。**【作品全体の感想】**フライデーの台詞に、争いは人間の本質が引き起こしていて、それが人間の奥底に眠る衝動であるとありましたが、その衝動を凌駕するほどの“大切な何か”を、この作品は伝えようとしているのではないのかと思いました。**【ファンに一言】**『MADLAX』を観た方は、誰の為に、今、自分が存在するのかを、この作品を通じて是非考えてみてください。

中野千佳代

CHIKAYO NAKANO

（ナハル）

主な出演作▸▸▸アミューズメント総合学院大阪校声優タレント学科卒業。「MADLAX」のナハル役がデビュー作となる

最初は「か弱そうな女の子だな」と思いました……でも、いざ演じてみると「強すぎっ！」って（笑）。**【アフレコ現場での思い出】**私にとって初めての現場だったので、全てが新鮮で思い出深いです。ほぼ毎回居残りになる私に、スタッフの方々が最後までつき合って下さり、笑顔で「お疲れ様でした」と言って下さったこと、兵藤さんに何かと面倒を見て頂いたこと、内川さんや森川さん、江原さん、皆さんが優しく声を掛けて下さったこと、目線が合うと金田さんがニコッと笑って下さったこと、居残りになった私を雪野さんが励まして下さったこと……まだまだあってキリが無いくらいです。本当に温かい現場でしたね。皆さんにも、末永く『MADLAX』を愛していただけると嬉しいです。……ところで、この作品の影響でパスタ好きになったのは私だけでしょうか？（笑）

STAFF & CAST LIST

スタッフ
&
キャストリスト

MAIN STAFF

企画：佐々木史朗
プロデューサー：
北山　茂・浜元達哉
アシスタントプロデューサー：
吉田　博
シリーズ構成：黒田洋介
キャラクターデザイン：
大澤　聡・芝　美奈子・宮地聡子
メカニックデザイン：寺岡賢司
キャラクター監修：大澤 聡
メカ作画監督：才木 康寛
色彩設計：小島 真喜子
特殊効果：村上 正博
撮影監督：青木 孝司・齋藤 仁
編集：森田 清次

美術監督：海野よしみ
音響監督：なかのとおる
音響効果：浦畑　将（楽音舎）
録音調整：廣岡信貴
録音：内田直継
音響制作：HALF H・P STUDIO

音楽：梶浦由記
オープニングテーマ「瞳の欠片」
作詞・作曲・編曲：梶浦由記
歌：FictionJunction YUUKA
エンディングテーマ
「inside your heart」
作詞・作曲・編曲：梶浦由記
歌：FictionJunction YUUKA
挿入歌「nowhere」「I'm here」
作詞・作曲・編曲：梶浦由記
歌：FictionJunction YUUKA
音楽プロデューサー：野崎 圭一
音楽制作：
ビクターエンタテインメント

制作統括：江川功爾憲
制作：ビィートレイン
監督：真下耕一
製作：ビクターエンタテインメント

VOICE OF CHARACTERS

マドラックス：小林沙苗
マーガレット・バートン：桑島法子
エリノア・ベイカー：内川藍維
ヴァネッサ・レネ：雪野五月
カロッスア・ドーン：森川智之
リメルダ・ユルグ：久川　綾
レティシア：金田朋子
クアンジッタ・マリスン：兵藤まこ
ナハル：中野千佳代
チャーリー・ウィンストン：川島得愛
フライデー・マンデー：江原正士
SSS（スリースピード）：浦山　迅

●STAFF

第1話
「銃舞 -dance-」

脚本：黒田洋介
作画監督：門　智昭
絵コンテ：真下耕一
演出：有江有樹

CAST

マドラックス：小林　沙苗
レティシア：金田　朋子
SSS：浦山　迅
ピート：浪川　大輔
ナイマン：坂東　尚樹
軍曹：黒田　崇矢
通信：佐藤　竜太郎
記者：工藤　良輔
ガルザ兵：田中　啓之

第2話
「紅月 -crimson-」

脚本：黒田洋介
作画監督：なかじまちゅうじ
絵コンテ：澤井幸次
演出：黒川智之

CAST

マドラックス：小林沙苗
マーガレット：桑島法子
エリノア：内川藍維
ヴァネッサ：雪野五月
カロッスア：森川智之
レティシア：金田朋子
チャーリー：川島得愛
フライデー：江原正士
部長：大川　透
女学生：近藤光世・神田理江

第3話
「蒼月 -moon-」

脚本：黒田洋介
作画監督：津幡佳明
絵コンテ・演出：守岡　博

CAST

マドラックス：小林沙苗
マーガレット：桑島法子
エリノア：内川藍維
ヴァネッサ：雪野五月
カロッスア：森川智之
リメルダ：久川　綾
レティシア：金田朋子
チャーリー：川島得愛
SSS：浦山　迅
グエン：有本欽隆
情報屋：園部啓一
謎の声：兵藤まこ
秘書官：田中　完

第4話
「誘惑 -ask-」

脚本：黒田洋介
作画監督：大澤　聡
絵コンテ・演出：黒澤雅之

CAST

マドラックス：小林沙苗
マーガレット：桑島法子
エリノア：内川藍維
ヴァネッサ：雪野五月
カロッスア：森川智之
レティシア：金田朋子
チャーリー：川島得愛
フライデー：江原正士
SSS：浦山　迅
マクレー：寺杣昌紀
ピエデリカ：内田直哉
アンヌ：名塚佳織
重役：稲葉　実
若手刑事：石野竜三

第5話
「無在 -none-」

脚本：黒田洋介
作画監督：なかじまちゅうじ
絵コンテ：川面真也
演出：黒川智之

CAST

マドラックス：小林沙苗
カロッスア：森川智之
リメルダ：久川　綾
フライデー：江原正士
SSS：浦山　迅
クリス：入野自由
ピエデリカ：内田直哉
情報屋：園部啓一
ブライアン：田中　完
アナウンサー：羽田智彦

第6話
「遺言 -leave-」

脚本：黒田洋介
作画監督：門　智昭
絵コンテ・演出：有江勇樹

CAST

マドラックス：小林沙苗
マーガレット：桑島法子
エリノア：内川藍維
ヴァネッサ：雪野五月
ロペス：石田　彰
キアラ：千葉紗子
執事：篠原大作
教師：大川　透
フェリック：宗矢樹頼
友人：小尾元政

第7話
「本 -nature-」

脚本：黒田洋介
作画監督：岩岡優子
絵コンテ：澤井幸次
演出：川面真也

CAST

マドラックス：小林沙苗
マーガレット：桑島法子
エリノア：内川藍維
ヴァネッサ：雪野五月
カロッスア：森川智之
レティシア：金田朋子
フライデー：江原正士
エリック：平田広明
ルシール：篠原恵美
ルシールの友人：坂口候一
教授：梅津秀行

第8話
「魂言 -soul-」

脚本：黒田洋介
作画監督：岩岡優子
絵コンテ：澤井幸次
演出：川面真也

CAST

マドラックス：小林沙苗
マーガレット：桑島法子
エリノア：内川藍維
カロッスア：森川智之
リメルダ：久川　綾
レティシア：金田朋子
クアンジッタ：兵藤まこ
ナハル：中野千佳代
フライデー：江原正士
SSS：浦山　迅
エリック：平田広明
ルシール：篠原恵美
ルシールの友人：坂口候一
兵士：河本邦弘

第9話
「残香 -scent-」

脚本：黒田洋介
作画監督：津幡佳明
レイアウト作画監督補：大澤　聡
絵コンテ・演出：守岡　博

CAST

マドラックス：小林沙苗
マーガレット：桑島法子
エリノア：内川藍維
ヴァネッサ：雪野五月
カロッスア：森川智之
リメルダ：久川　綾
クアンジッタ：兵藤まこ
レティシア：金田朋子
ナハル：中野千佳代
ルチアーノ：水島　裕
専務：稲葉　実

第10話
「浸触 -dive-」

脚本：黒田洋介

作画監督：竹上貴雄

絵コンテ：澤井幸次

演出：黒澤雅之

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

レティシア：金田朋子

チャーリー：川島得愛

フライデー：江原正士

バッジス：佐々木　望

部長：大川　透

第11話
「異国 -object-」

脚本：黒田洋介

作画監督：門　智昭

絵コンテ：澤井幸次

演出：黒川智之

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

レティシア：金田朋子

SSS：浦山　迅

バッジス：佐々木　望

部長：大川　透

アインス：福山　潤

現場責任者：伝坂　勉

店主：河野智之

第12話
「消意 -close-」

脚本：黒田洋介

作画監督：なかじまちゅうじ

絵コンテ：黒澤雅之

演出：有江勇樹

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

レティシア：金田朋子

チャーリー：川島得愛

フライデー：江原正士

バッジス：佐々木　望

部長：大川　透

情報屋：園部啓一

第13話
「覚鳴 -awake-」

脚本：黒田洋介

作画監督：山下喜光

絵コンテ・演出：川面真也

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

クアンジッタ：兵藤まこ

チャーリー：川島得愛

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

SSS：浦山　迅

第14話
「忘想 -memory-」

脚本：黒田洋介

作画監督：大澤　聡

絵コンテ：澤井幸次

演出：黒澤雅之

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

ナハル：中野千佳代

侍女：鷹村　遊

第15話
「偽争 -camoufrage-」

脚本：黒田洋介

作画監督：津幡佳明

絵コンテ・演出：守岡　博

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

第16話
「銃韻 -moment-」

脚本：黒田洋介

作画監督：門　智昭

絵コンテ：澤井幸次

演出：黒川智之

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

SSS：浦山　迅

親衛隊隊長：田中　完

男：川上貴史

第17話
「殺那 -reunion-」

脚本：黒田洋介

作画監督：岩岡優子

絵コンテ：澤井幸次・真下耕一

演出：有江勇樹

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

チャーリー：川島得愛

レティシア：金田朋子

フライデー：江原正士

SSS：浦山　迅

バッジス：佐々木　望

親衛隊隊長：田中　完

保安局員：鈴木琢磨

第18話
「双離 -duo-」

脚本：黒田洋介

作画監督：竹上貴雄

絵コンテ・演出：川面真也

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

チャーリー：川島得愛

レティシア：金田朋子

フライデー：江原正士

親衛隊隊長：田中　完

駐在員：永野広一

第19話
「獲本 -holy-」

脚本：黒田洋介

作画監督：山下喜光

絵コンテ・演出：守岡　博

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

隊長：坂口　候一

部下：川上　貴史

第20話
「真相 -wish-」

脚本：黒田洋介

作画監督：津幡佳明

絵コンテ：澤井幸次

演出：黒川智之

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

第21話
「告薄 -guilty-」

脚本：黒田洋介

作画監督：門　智昭

絵コンテ：有江勇樹・黒澤雅之

演出：有江勇樹

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

バートン大佐：大川　透

マーガレットの母：三石琴乃

クリス：入野自由

第22話
「激情 -rage-」

脚本：黒田洋介

レイアウト作画監督：大澤　聡

作画監督：竹上貴雄

演出：黒澤雅之

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

王国軍兵士：河本邦弘

ガルザ兵：川上貴史・河野智之

第23話
「迷心 -doubt-」

脚本：黒田洋介

作画監督：山下喜光

絵コンテ・演出：守岡　博

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

ガルザ兵：田中啓之・川上貴史

兵士：佐藤竜太郎・古屋貴史

第24話
「献心 -hearts-」

脚本：黒田洋介

作画監督：津幡佳明

絵コンテ・演出：川面真也

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

執事：篠原大作

ガルザ兵：袖岡敦史・羽田野渉・松林大樹・小林和矢

女性：伊東久美子

第25話

脚本：黒田洋介

作画監督：門　智昭

絵コンテ：澤井幸次

演出：黒川智之

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

チャーリー：川島得愛

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

バートン大佐：大川　透

ガルザ兵：川上貴史

第26話

脚本：黒田洋介

作画監督：大澤　聡

絵コンテ：澤井幸次・真下耕一

演出：有江勇樹

CAST

マドラックス：小林沙苗

マーガレット：桑島法子

エリノア：内川藍維

ヴァネッサ：雪野五月

カロッスア：森川智之

リメルダ：久川　綾

クアンジッタ：兵藤まこ

レティシア：金田朋子

チャーリー：川島得愛

ナハル：中野千佳代

フライデー：江原正士

SSS：浦山　迅



MADLAX
the Bible

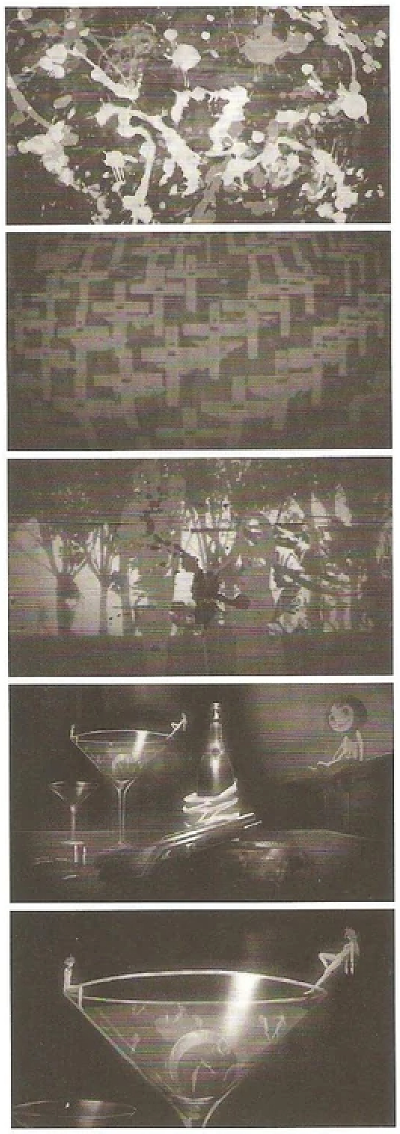
2005年5月21日初版発行

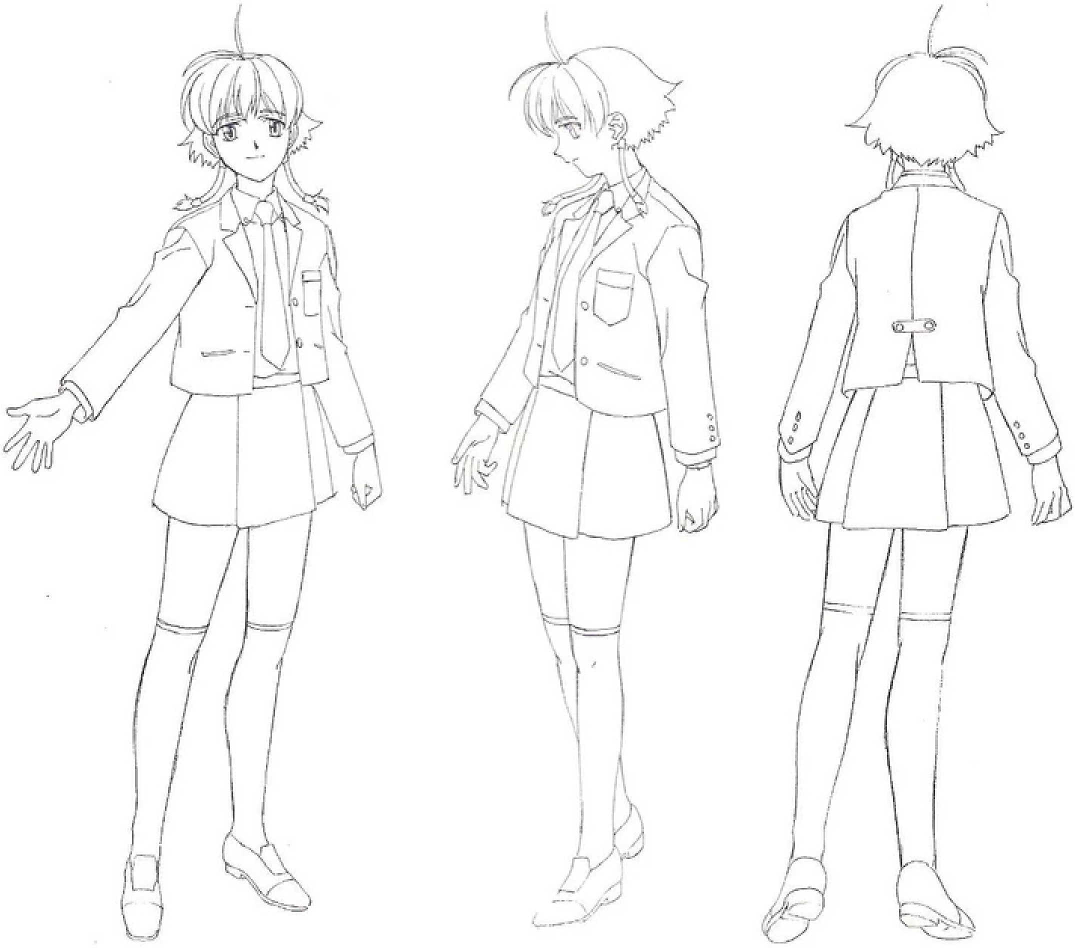
発行人　佐藤光市
編集人　稲川俊文
発行所　株式会社ホビージャパン
〒151-0053 東京都渋谷区代々木2丁目15番8号
営業03-5304-9112
編集03-5304-9119

編集　沼田孝一（ホビージャパン）
大門弘樹（セブンデイズウォー）
木澤行人（セブンデイズウォー）
執筆　結城昌弘
加藤秀和
桝谷直俊
装丁　澤木貴男
AD　杏珠（Studio H.M）
デザイン　杏珠（Studio H.M）
木村慎治（サムズアップ）
協力　ビクターエンタテインメント
ビィートレイン
アーツビジョン
青二プロダクション
81プロデュース
賢プロダクション
シグマ・セブン
スペースクラフト
ぷろだくしょんバオバブ
—「MADLAX」 all staff—

印刷・製本　図書印刷株式会社

ISBN4-89425-375-5　C9476
雑誌68142-55





MADLAX
the Bible

ISBN4-89425-375-5

C9476 ¥1905E

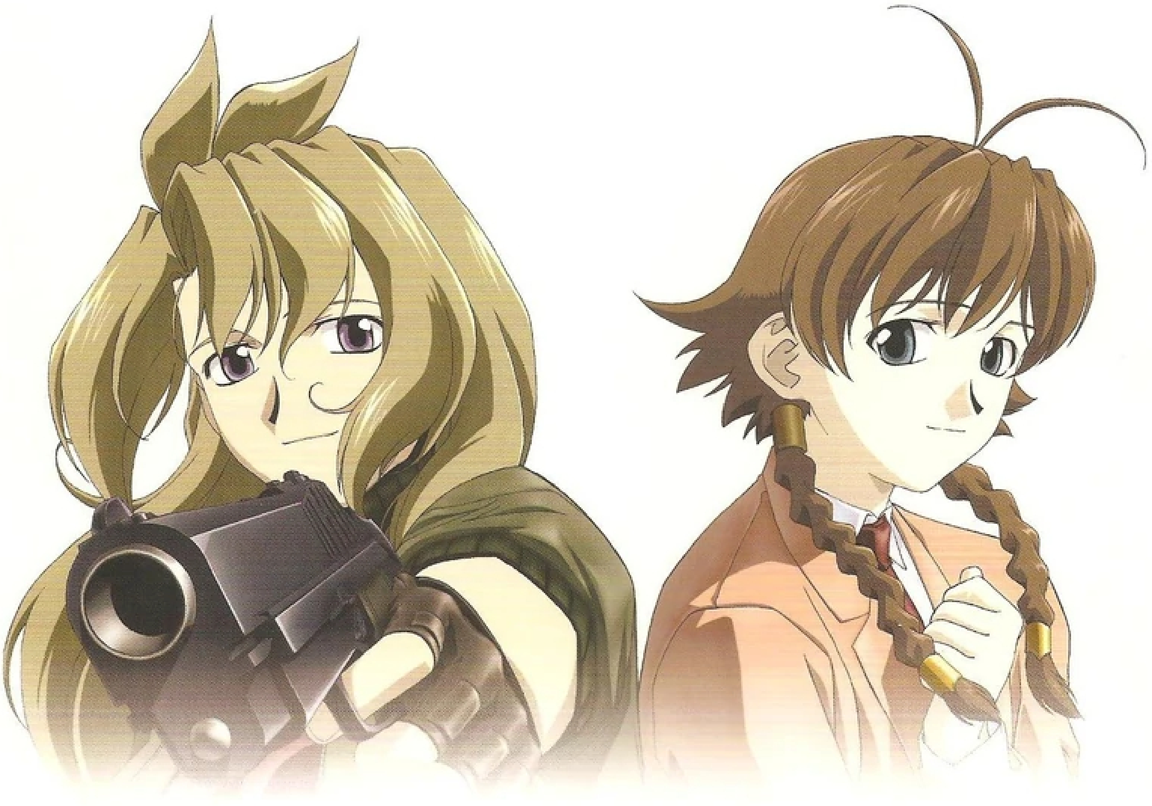
雑誌68142-55

定価:2,000円 本体1,905円 ⑤

9784894253759

1929476019059

Hobby JAPAN



MADLAX the Bible